

老年期における回想の質と適応との関連

野村 信威
(同志社大学大学院文学研究科)

橋本 宰
(同志社大学文学部)

本研究における目的は、老年期における回想という行為と適応との関連について検討することである。また回想において適応と関連を示す要因は、回想行為そのものよりも回想の質であるという仮説のもとに、「回想の情緒的性質」および「過去のネガティブな出来事を再評価する傾向」を測定する尺度を作成し、これらの要因と人生満足度や抑うつ度などとの関連について、老人大学受講者208名および大学生197名を対象に質問紙調査による検証を試みた。その結果、世代や性別によりその関連の仕方は異なるものの、回想の情緒的性質が適応度と関連することが認められ、ネガティブな出来事の再評価傾向は主に青年期で、回想量は老年期の男性で特徴的に適応度を説明した。そのため老年期の男性で頻繁に過去を振り返ることは適応度の低さと関連すると考えられた。さらに老年期の男性のみに、ポジティブな回想の想起しやすさと回想量との交互作用が認められ、ポジティブな回想と適応度の関連する程度は回想量によって異なると考えられた。

【キー・ワード】老年期, 回想, 適応, ライフレビュー

問 題

回想とは、かつて経験したことを再認識感情をともなって再生することや、過去について思いめぐらすことと考えられている。回想は日々の生活において様々な形で行われ、特定の目的のもとに意識的に振り返る場合もあれば、何らかの刺激の結果として思い出が自然に心に浮かび上がる場合もあるだろう。

一般に老年者は、若年者に比べて頻繁に過去を振り返り、思い出に親しむことが多いと考えられている。しかし老年者にとって過去を振り返る行為は、単に過去を懐かしんだり、現在の自分から注意を背けるためばかりでなく、より積極的な意味をもつものとして捉えることもできる。

Erikson, Erikson, & Kivnick (1990) によれば、老年期における発達課題は「統合対絶望」という命題であり、これら相反するもの間でバランスをとることで、単なる心理的苦痛や葛藤に終わらない「創造的な緊張」を経験することが生きるための英知を生み出すとされている。そしてそのためには、「これまでの経験を思い出し再検討しようとする意欲」が必要であると述べている。そのため過去の経験を再考する機会となる回想は、老年期の発達課題を達成するための具体的な手段のひとつに挙げることが出来るだろう。

アメリカの精神科医であるButler (1963) は、老年期にしばしば認められる、過去を振り返る行為としての回想は、自己の歩んできた人生を回顧して未解決の葛藤を解決することをうながす自然で普遍的な心的プロセス

であり、回想には適応的な効果があると述べた。そして老年期に共通して認められるこうした心的プロセスをライフレビュー (life review) と名付けた。

Butlerによる提唱の後、回想法は広く臨床・実践の場に取り入れられ、多くの研究者の注目を集めた。

Coleman (1974) は回想の効果に関する先駆的な研究において、48名の施設入居高齢者に対して約1時間の回想面接を6セッション行った。その際に回想を、単に過去について言及する単純な回想 (reminiscence)、重要な出来事を他者に伝える情報付与的回想、そして過去についての積極的な心理的解釈が生じるライフレビューの3つのタイプに分類し、それぞれの回想が及ぼす適応の効果について検証した。その結果、過去の人生に不満がある場合にライフレビューは適応度と関連することを見出した。すなわち過去の人生に不満がある場合、ライフレビューを積極的に行う者はそうでないよりも有意に適応度が高く、ライフレビューをすることが過去のネガティブな影響を低めてより適応的に生きる効果を生み出すと考えられた。

その後行われた回想研究では、しばしば回想のもつ質や機能の分類に関心が向けられ、いくつかの異なるタイプの回想が存在することが示唆されている。例えばLoGerfo (1980) は、回想には快の感情をともない気分を高揚させる情動付与的回想、過去の葛藤や失敗を調整する機会となる評価的回想、そして後悔の念をともなう記憶が非建設的に繰り返し生じる強迫的回想の3つのタイプがあると述べている。

またRomanuik, & Romanuik (1981) は13項目からな

る回想活用尺度 (Reminiscence Uses Scale) を作成し、因子分析により、自身を楽しませたり励ますために行う「自己尊重/イメージの高揚」、現実的な問題の解決に用いる「現在の問題解決」、人生の意味や自己理解を導く「実存的自己理解」の3因子を抽出した。

一方 Webster (1993) は、回想と機能に関する体系的な類型化を試み、43項目からなる回想機能尺度 (Reminiscence Function Scale) を作成した。そして回想の機能を、退屈の軽減、死への準備、アイデンティティ/問題解決、会話、親密さの維持、苦痛の再現、情報伝達という7因子に分類している。

このような回想の質や機能を分類する試みとは対照的に、回想の量的次元について検討した研究も数多く行われている。

Lieberman, & Falk (1971) は、180名の高齢者と25名の中年者を対象に質問紙調査を行い、回想量や回想にもなる情動の程度と生活環境や年齢、ストレスへの対処などとの関連について検討した。その結果、老年者は中年者よりも頻繁に過去を振り返っていたが、回想とストレスへの対処の関連は有意ではなく、回想と適応度との関連は認められなかった。

また Brennan, & Steinberg (1984) は、回想の量と社会的活動の程度、モラルの関連について検討した。73名の地域高齢者を対象に行った聞き取り調査の結果、過去の満足度と回想量の間には負の相関が認められた。そのため回想が適応的な役割を果たすのはまれであり、その効果があるとすれば、それはモラルよりも気分に影響するのではと述べた。

日本でも、長田・長田 (1994) が回想の量を測定する8項目からなる尺度を作成し、年代による回想量の違いと適応度との関連について検討した。その結果、老年群よりも学生群でより高い回想傾向が認められ、老年者がより過去を思い出す傾向は認められなかった。また老年群では、回想量の多さは現在の満足度の低さや死への不安の強さと関連し、老年期において回想を頻繁に行うことは現在の満足度の低さと関連している可能性を示唆した。

このように回想の量的次元に関する研究では、しばしば適応度との間に正の関連が認められないために、回想のもつ適応的効果が疑問視されたり、回想のもつネガティブな側面が強調されることが多かった。また回想の適応的効果を認めない研究は、量的次元を検討した場合に限らず、これまでも多く報告されている (例えば Perrota, & Meacham, 1981)。そのため回想のもつ適応的効果は一般に広く支持されているにも関わらず、その効果に関する実証的研究では、一致した結論には到ってないと考えられてきた。

こうした回想研究に認められる結果の不一致の理由と

して、回想の定義が十分に明確ではないこと、対象者の条件が研究間で異なりその比較が容易でないこと、そして回想研究の方法論的な難しさなどが挙げられている (Merriam, 1980; Molinari, & Reichlin, 1985)。そしてこれらの要因に加え、回想の質的次元と量的次元が区別して捉えられていないこともその原因の一つだと言えるだろう。

回想の質と量がつ、それぞれに異なる特徴について検討した研究はわずかにすぎないが、在宅および施設入居高齢者140名を対象に構造化面接を行った、Fry (1991) による研究は重要な示唆を与えている。彼はその結果より、回想の量的および質的次元はそれぞれ独立しており、さらに回想量とその情緒的性質は、適応度との関連において対照的に異なることを見出した。すなわち、回想の情緒的性質がポジティブである場合、過去の満足度や主観的幸福感が高く、抑うつ的ではなかった。しかし回想の量が多い場合、人生満足度や主観的幸福感は低く、抑うつ傾向は高かった。このことから Fry は、抑うつや不安などのネガティブな感情は、個人を回想活動に向かわせる役割を果たしていると考えた。また虚無感や人生の意味を見出せない心理状態を補う行為として、頻繁に過去を振り返るのではと考察している。

本研究では、回想行為そのものが適応度と関連するというよりも、むしろそうした関連は回想の質により異なると仮定した。そして回想の質的な違いを特徴づける代表的な2つの側面として、「回想の情緒的性質」および「過去のネガティブな出来事を再評価する傾向」を取り上げ、こうした概念を測定する指標を作成して、適応度との関連について検討を試みる。また分析にあたっては青年群を設け、世代および性別の要因を加えることで、老年期に特徴的な回想と適応度との関連やその性差についても合わせて検討する。

回想の情緒的性質の重要性を示唆する主な研究として、Havighurst, & Glasser (1972) による研究を挙げることが出来る。Havighurst, & Glasser は500名以上を対象に質問紙調査を行い、回想の情緒的性質、すなわち回想が快感情をともなうポジティブなものか、あるいは不快でネガティブなものかという違いに注目して適応度との関連を検討した。その結果、回想量と回想にもなるポジティブな情動は相関し、回想にもなるポジティブな感情が大きいほど適応度やモラルも高いことを示唆した。

回想の情緒的性質とは、過去を思い出すときに生じる様々な感情や認知の性質であり、ポジティブなものやネガティブなもの両方が含まれている。われわれは過去を振り返って気分が高揚することも、また反対に気分が沈むこともあるだろう。そのため回想の情緒的性質は、その内容によって全く異なった心理的效果を生み出すこと

が予想できる。われわれはFry (1991) に従って、回想の情緒的性質をもっとも重要な回想の質的側面と考え、検討すべき課題として取り上げた。

本研究で取り上げたもう一つの回想の質的側面は、ネガティブな出来事に対する再評価傾向である。野村・橋本 (1997) は、老人保健施設のデイケアを利用する16名の高齢者を対象に5セッションからなる回想面接を試み、事例的な検討を行った。その結果、適応度の高い高齢者に共通する特徴として「過去のネガティブな出来事を再評価する傾向」があることを認め、過去のネガティブな出来事の再評価傾向と現在の適応度の高さが関連する可能性を示した。

回想において過去のネガティブな出来事を再検討することの重要性は、ライフレビューという概念においてもしばしば強調されている。前述したColeman (1974) は、ライフレビューを過去の出来事や行動に対する「積極的な心理的解釈や評価の表現」として定義した。

またHaight, Coleman, & Lord (1995) は、ライフレビューが療法的効果をもつには「構造化されていること (structure)」「評価的であること (evaluation)」,そして「個別に行うこと (individuality)」の3つの条件が必要であると、とりわけ「評価的であること」は、過去の洞察を深めて再統合を促し、ライフイベントの受容を可能にするためにもっとも重要な要素であると述べた。

こうした見解は、ライフレビューという行為が過去の出来事の解釈や評価という要素を含んでおり、回想において過去を再評価する程度がその適応的効果を説明する可能性を示唆している。さらにライフレビューは今日でも未だ曖昧で複雑な概念であり、こうした事象を実証的に取り扱うことは容易ではないが、それに比べて過去の再評価傾向に関する実証的研究に取り組むことは充分に可能である。また過去の再評価傾向について検討することは、ライフレビュー自身のもつ適応的効果についても有意義な示唆を与えることができると考えられた。

予備調査

われわれは予備調査において、回想の情緒的性質および過去のネガティブな出来事に対する再評価傾向を測定する尺度の作成を試みた。

質問項目は、事前に行った16名の高齢者に対する回想面接において、高齢者が述べた「ポジティブまたはネガティブな感情や認知をとまなう回想」と「過去のネガティブな出来事に対する再評価」に関するコメントをもとに作成し、さらに長田・下仲・中里・河合 (1993) による先行研究を参考にして質問項目を補った。

その結果「ポジティブな感情や認知をとまなう回想」に関する15項目、「ネガティブな感情や認知をとまなう回想」に関する8項目、そして「過去のネガティブな出

来事に対する再評価傾向」に関する15項目に整理した。これらの尺度は自分にどの程度あてはまるかについて、「そう思う (5点)」「まあまあそう思う (4点)」「どちらでもない (3点)」「あまりそう思わない (2点)」「そう思わない (1点)」の5件法で評定させた。

予備的な質問紙調査を大阪市内の社会福祉センターに通所する60歳以上の男女170名に依頼して郵送により回収した。その結果、複数の記入漏れのある回答をのぞいた115名 (男性39名, 女性76名, 平均年齢71.2歳, 標準偏差5.5歳) を対象として統計処理を行った。

作成した3尺度に対して、主因子法・プロマックス回転 (斜交解) による因子分析を行い、固有値1を基準とした場合、3つの尺度からはそれぞれ複数の因子が抽出された。しかし全ての尺度で初期解において第1因子に高い説明率が示され (35.4~43.9%), 主に逆転項目からなる解釈不可能の因子を除くと、プロマックス回転後の因子間相関も比較的高かった ($r=.398\sim.589$)。そのためこれらの尺度が単一の因子によって説明可能であると考えた。その上で因子負荷量が0.35に満たない6項目を削除し、因子数を1とする因子分析を再度試みた。その結果、3つの尺度全てにおいて1因子による高い説明率が認められ (40.9~48.8%), これらの尺度が単一の因子構造をもつものと判断した。

以上の結果をもとに14項目からなる肯定的回想尺度、6項目からなる否定的回想尺度、そして12項目による再評価傾向尺度とした。ただし肯定的回想尺度は「良い思い出の多さ」を表すのではなく、回想することによっていい気分になったり良かったと思う程度を表わす指標である。否定的回想尺度についても同様である。そのためこれら2つの尺度は、「回想におけるポジティブあるいはネガティブな感情や認知の想起のしやすさ」、つまり回想の情緒的性質を測定している。

肯定的回想尺度、否定的回想尺度、そして再評価傾向尺度の質問項目、Cronbachの α 係数、各項目における因子負荷量および共通性の値をTable 1, Table 2およびTable 3に示した。

回想の情緒的性質を測る指標としては、現在までに長田・下仲・中里・河合 (1993) によるサクセスフル・レミニッセンス尺度 (SR尺度) がある。SR尺度は「快の感情をとまなう深く広がりをもつ回想」の指標として定義された14項目からなる尺度である。肯定的回想尺度、否定的回想尺度とSR尺度との相関を求めたところ、肯定的回想 ($r=.639, p<.001$) と否定的回想 ($r=-.555, p<.001$) のどちらにも高い相関が認められ、この結果はこれらの尺度の併存的妥当性を示すと考えられた。

性格特性との関連 さらに作成した尺度の基準関連妥当性を検証するため、性格特性の指標である日本版NEO-FFI (NEO Five Factor Inventory) を用いてその関連を

Table 1 肯定的回想尺度の質問項目, 因子負荷量および共通性

項目	因子負荷量	共通性
⑧ 私は昔のことを思い出すと幸せを感じる	.818	.669
⑫ 昔のことを思い出すと心が満たされる	.779	.606
⑩ 過去を思い出すと心がやすらぐ	.763	.583
② 昔のことを思い出すと, とても満足な気分になる	.739	.546
⑪ 過去の思い出をかけがえのないものと思う	.699	.488
④ 過去を考えるとなつかしい気分になる	.688	.473
① 過去を思い出すのはとても楽しい	.675	.456
⑤ 思い出は私にとってとても大切なものである	.665	.442
⑦ 過去の思い出は, その後の私にいい影響を与えている	.664	.441
⑭ 過去の思い出があるので私は幸せだと思う	.660	.436
⑬ 過去を思い出すことで勇気づけられる	.654	.428
⑨ 過去を思い出すと自分に誇りがもてる	.611	.374
③ 昔のことを考えると自分の価値を思い出す	.519	.269
⑥ 昔のことを思い出しても, あまりいい気分にならない*	.370	.137

(* は逆転項目) 固有値 6.35, 寄与率 45.3%, Cronbachの α 係数 .918

Table 2 否定的回想尺度の質問項目, 因子負荷量および共通性

項目	因子負荷量	共通性
⑤ 思い出すのがつらいことがある	.837	.701
③ 私には思い出したくないことがある	.702	.493
② 過去を思い出すと気分が沈むことがある	.691	.477
④ 悲しい思い出がたくさんある	.689	.475
⑥ 今でも悔しく思う思い出がある	.674	.454
① 今でも忘れられないいやな思い出がある	.573	.329

固有値 2.93, 寄与率 48.8%, Cronbachの α 係数 .845

検討した。

老年群は京都市内にある老人大学の受講者を対象に質問紙調査を依頼した。質問紙は配布時に返信用封筒を添付し、郵送で回収した(有効回答率は75.9%)。学生群は京都市内の私立某大学において心理学関連課目を受講する大学生に調査を依頼し、一週間後に回収した。その結果、被調査者は老年群は164名(男性102名, 女性62名)で平均年齢は68.4歳(57~83歳, 標準偏差5.0歳), 青年群は220名(男性95名, 女性125名)で平均年齢は20.3歳(18~25歳, 標準偏差1.2歳)だった。

NEO-FFIはCosta, & McCrae (1992)によるNEO-PI-Rの短縮版であり, 下仲・中里・権藤・高山(1999)により標準化された。神経症傾向(N), 外向性(E), 開放性(O), 協調性(A), 誠実性(C)の5次元の性格特性を構成する60項目に対して5件法で評定する。

また回想の指標には, 作成した3つの尺度のほかに, 長田・長田(1994)による回想尺度を加えた。この尺度は, 個人の回想量あるいは頻度を測定する8項目の尺度であり, 日常生活の様々な場面で回想する頻度を「よく考える」から「考えない」の4件法で評定する。

NEO-FFIを説明変数とし, 回想に関する4つの尺度を従属変数とする重回帰分析を青年群および老年群の男女4群に対して行い, その結果をTable 4に示した。

肯定的回想の程度を4群すべてで一貫して説明する性格特性は見出されなかった。しかし老年女性群と青年男性群では外向性の次元から, また老年男性群と青年女性群では協調性の次元から説明され, ポジティブな回想の想起しやすさは, 外向性や協調性といった性格特性から部分的に説明できると考えられた。

否定的回想は老年女性群をのぞく3群に共通して神経

Table 3 再評価傾向尺度の質問項目, 因子負荷量および共通性

項目	因子負荷量	共通性
⑧ いやなことに対して今ではちがった見方ができる	.743	.551
④ いやなことでも, あとで思い返すとプラスになったと思うことがある	.741	.549
① いやなことでも後からいい思い出になると思う	.710	.504
② いやなことでも, 自分にとって意味があるものだと思う	.688	.474
③ いやな出来事の持つよい側面に気づくことがある	.669	.448
⑦ いやなことがかえって懐かしい気がする	.655	.429
⑤ いやなことでも教訓やためになると思う	.648	.419
⑨ 以前はいやだったことも, 今では受けいれている	.647	.418
⑫ いやなことがあったからこそ今の私がある	.552	.305
⑩ 以前いやだったことも, 今はあまりいやではない	.544	.296
⑪ いやなことの持つ意味や価値についてよく考える	.538	.290
⑥ いやなことは自分にとって何の意味もない*	.478	.229

(* は逆転項目) 固有値 4.91, 寄与率 40.9%, Cronbachのα係数 .887

Table 4 回想指標に対する性格特性 (NEO-FFI) の重回帰分析

	神経症傾向 (N)	外向性 (E)	開放性 (O)	協調性 (A)	誠実性 (C)	重相関係数
回想量	老年女性群					.407
	老年男性群	.431***		.236*		.499***
	青年女性群		-.228*			.290**
	青年男性群	.424***				.445***
肯定的回想	老年女性群		.325*	-.308*		.630**
	老年男性群				.244*	.574***
	青年女性群				.263*	.423***
	青年男性群		.199*			.484***
否定的回想	老年女性群					.399
	老年男性群	.431***			.310**	.594***
	青年女性群	.403***				.445***
	青年男性群	.505***				.555***
再評価傾向	老年女性群	.512**			.357*	.520*
	老年男性群			.227*		.355
	青年女性群				.202*	.417***
	青年男性群		.234*		.214*	.388**

数値は標準偏回帰係数 * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

症傾向の次元から説明され, ネガティブな回想の想起しやすさは神経症傾向から説明できた。

再評価傾向は老年男性群をのぞく3群に共通して誠実性の次元から説明された。しかし老年男性群では再評価傾向は開放性の次元から説明され, さらに老年女性群では再評価傾向は神経症傾向によっても説明されると考えられた。

回想量の多さを一貫して説明する性格特性は見出されなかったが, 老年男性群と青年男性群ではともに回想量が神経症傾向から説明され, 男性では回想量が多いことは神経症傾向により説明できると考えられた。

Costa, Metter, & McCrae (1994) は性格特性の各次元において, 外向性 (E), 協調性 (A), 誠実性 (C) はそれぞれ適応度と正の相関を示し, 神経症傾向 (N) は適

応度と負の相関を示すと述べている。本研究では、否定的回想は主に神経症傾向と、再評価傾向は誠実性とそれぞれ関連を示した。また肯定的回想と性格特性との関連は明確ではなかったが、複数の群において外向性や協調性と正の関連を示した。回想のタイプと性格特性の間にはこれまでに本研究と類似した関連が見出されており (Webster, 1993), この結果は作成した尺度の基準関連妥当性を部分的にはあるが支持すると考えられた。

本調査

目的

回想の情緒的性質および過去のネガティブな出来事に対する再評価傾向を取り上げ、青年群との比較を通して、老年期における回想に特徴的な適応度との関連について詳細な検討を試みることを目的とした。

方法

被調査者 老年群は京都市内にある老人大学の受講者を対象に質問紙調査を依頼して郵送で回収した (有効回答率は70.4%)。学生群は京都市内の私立某大学で心理学関連課目を受講する大学生および大学院生に調査を依頼し、一週間後に回収した。その結果、被調査者は老年群は208名 (男性111名, 女性97名) で平均年齢は67.8歳 (60~82歳, 標準偏差4.6歳), 青年群は197名 (男性90名, 女性107名) で平均年齢は20.8歳 (18~30歳, 標準偏差1.9歳) だった。

測定 回想に関する指標には、予備調査で作成した肯定的回想尺度 (14項目), 否定的回想尺度 (6項目), 再評価傾向尺度 (12項目) に加えて、長田・長田 (1994) による回想尺度を回想量の指標として用いた。

本研究では、適応度を被調査者の主観的な側面に限定し、人生満足度や抑うつ、自尊心の程度として操作的に定義した。適応指標に以下の3つの指標を用いた。

(1) 人生満足度 (Life Satisfaction Index-A: LSI-A) LSI-AはNeugarten, Havighurst, & Tobin (1961) により作成され, Adams (1969) により18項目に改訂された。日本では和田 (1981) により項目数の少ない日本版が作成された。本研究ではAdamsの尺度に対応させるため、和田の尺度に含まれない項目を独自に加えたLSI-Aを予

備的に作成した。また選択肢はWood, Wylie, & Sheafor (1969) による3件法のスコアリング (よい選択に2点, 悪い選択に0点, ?に1点を与える) に準じて, はい, いいえ, どちらでもないの3段階評定とした。項目分析において尺度一項目間相関の低い項目を削除し, 新たに14項目からなるLSI-Aを作成した。尺度の内的整合性を示すCronbachの α 係数は.806だった。本研究で作成したLSI-Aと和田によるLSI-Aとの相関は非常に高く ($r=.962, p<.001$), 作成したLSI-Aが人生満足度の指標として使用可能であると考えられた。

(2) 抑うつ尺度 (Geriatric Depression Scale: GDS) Yesavage, Brink, Rose, Lum, Huang, Adey, & Leirer (1983) により作成され, Niino, Imaizumi, & Kawakami (1991) により日本版が作成された。30項目からなり, 「はい」「いいえ」の2件法で評定する。得点の高さは抑うつ度の高さを示す。

(3) 自尊感情尺度 (Rosenberg Self-Esteem Scale) Rosenberg (1965) により作成され, 山本・松井・山成 (1982) により日本版として標準化された。10項目からなる尺度で, 「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で回答する。自分に対して「これでよい」と思う程度を測る。

結果および考察

回想尺度間の相関 はじめに回想尺度間の関連について検討した。回想尺度間の相関を算出するにあたっては, 世代および性別ごとに相関を求めた (Table 5および6参照)。

その結果, 老年男性群と青年群の男女で肯定的回想と再評価傾向の間に中程度の正の相関が認められた。そのため老年女性群を除けば, ポジティブな回想はネガティブな出来事の再評価傾向と関連すると考えられた。

肯定的回想と否定的回想は老年群で有意な負の相関が認められた。しかしながら相関係数の値は低く, 想起のしやすさにおいて両者は互いに独立するものと考えられた。また回想量は, 概して回想の質的指標とほとんど関連しなかったが, 青年男性群でのみ全ての回想の質的指標と有意な相関を示し, なかでも否定的回想と回想量の間にはやや強い相関が認められた ($r=.525, p<.001$)。

Table 5 老年群における回想尺度間の相関

	回想量	肯定的回想	否定的回想	再評価傾向
回想量		.160	.177	.221*
肯定的回想	.050		-.265***	.149
否定的回想	.188*	-.190*		.061
再評価傾向	.109	.405***	-.323***	

左下 男性/右上 女性

数値は相関係数 * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table 6 青年群における回想尺度間の相関

	回想量	肯定的回想	否定的回想	再評価傾向
回想量		.137	.136	.009
肯定的回想	.248*		-.014	.323***
否定的回想	.525***	.092		-.262**
再評価傾向	.335**	.598***	.107	

左下 男性/右上 女性

数値は相関係数 * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table 7 各指標における4群ごとの平均値と標準偏差および各要因のF値

尺度					F 値			
	老年女性群	老年男性群	青年女性群	青年男性群	自由度	世代	性別	交互作用
回想量	18.66 (4.73)	19.12 (4.19)	19.75 (3.72)	18.53 (3.79)	1,369	0.40	0.43	3.69
肯定的回想	51.44 (9.62)	51.22 (9.19)	54.14 (8.76)	49.75 (8.76)	1,397	0.48	6.09*	5.21*
否定的回想	18.72 (7.06)	16.71 (6.07)	22.36 (5.37)	22.78 (5.40)	1,400	65.15***	1.89	4.10*
再評価傾向	42.40 (10.29)	41.39 (10.51)	46.53 (7.81)	43.57 (8.81)	1,397	11.22***	4.34*	1.08
人生満足度	18.98 (4.54)	18.97 (4.84)	19.35 (5.59)	17.27 (5.57)	1,399	1.66	3.91*	4.05*
抑うつ度	9.01 (5.34)	7.06 (5.16)	12.01 (6.42)	12.69 (6.55)	1,385	52.07***	1.06	4.77*
自尊感情度	36.28 (5.47)	37.96 (4.93)	33.54 (7.42)	35.19 (7.41)	1,395	18.54***	6.76**	0.00

カッコ内は標準偏差, * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

世代および性別による相違 調査に用いた4つの回想尺度について、世代および性別による得点の相違を検討するため、性別と世代（青年群・老年群）を独立変数とする2要因の分散分析を行った。Table 7には、適応指標を含めた各指標における4群ごとの平均値、標準偏差および各要因のF値を示した。

その結果、世代および性別による交互作用が肯定的回想および否定的回想において認められた。単純主効果の検定の結果、肯定的回想は老年群では性別による得点の差はないが、青年群では男性よりも女性の得点が高かった ($F(1,397) = 11.27, p < .001$)。また否定的回想は、青年群では性別による差はないが、老年群では女性が男性よりも得点が高かった ($F(1,400) = 5.74, p < .05$)。また世代および性別それぞれの主効果が再評価傾向で認められ、青年群は老年群よりも過去を再評価する傾向が高く、女性は男性よりも再評価傾向が高かった。

なお回想量はいずれの主効果および交互作用も有意でなく、世代や性別による回想量の違いは認められなかった。この結果より、一般に考えられている老年期により過去を振り返る傾向は支持されず、青年期により頻繁な回想が行われることを示した長田・長田 (1994) の結果とは異なるが、老年者が青年よりも頻繁に回想を行わないという点では一致するものだった。

適応指標との関連 ところで本研究の調査方法は、質問紙を用いた関連研究にあたり、回想を行うことで生じる適応的効果を直接検討することは出来ない。また記憶における気分一致効果の研究では、過去を想起する際の感情状態が想起される内容に影響を及ぼす可能性が指摘されており (例えば筒井, 2000)、回想から適応への一方的な因果関係を規定するべきではない。しかしながら回想が適応度に及ぼす効果はこれまでも示唆されており (例えば Haight, 1988)、本研究でも同様の因果関係を仮定した上でそれらの指標間の関連を検討することは十分に意義があると考えた。

回想に関する指標のうちのいずれがよく適応度の高さを説明するのかを検証するため、人生満足度および抑うつ

度、自尊感情度を従属変数とし、第1段階として回想の量および情緒的性質、再評価傾向の4つの指標を、第2段階として回想量と3つの回想の質的指標との積である交互作用項を説明変数として投入する階層的重回帰分析を、老年女性群、老年男性群、青年女性群、青年男性群の4群に行った (Table 8 参照)。なお多重共線性の問題を除去するため、独立変数はいずれも平均値からの偏差に変換して用いた (Aiken, & West, 1991)。

分析の第1段階において、肯定的回想は老年男性群のみで適応度の高さを、また否定的回想は老年女性群と青年群の男女で適応度の高さを説明していた。そのため世代や性別によってその関連に違いが認められるものの、ポジティブあるいはネガティブな回想の想起しやすさは適応度の高さを説明する可能性が示された。しかしながら回想量と再評価傾向は、老年群と青年群のあいだで異なる結果を示した。青年群の男女ともに再評価傾向は適応度を説明した一方で、回想量は説明しなかった。そのため青年期には、回想量の多さは適応度に関連しないが、過去のネガティブな出来事の再評価傾向が高いことは適応的と考えられた。

また老年男性群では、回想量は適応度と有意な関連を示した (抑うつ度: $\beta = .250, p < .05$; 自尊感情度: $\beta = -.237, p < .05$)。しかし再評価傾向は老年群の男女ともに適応度を説明しなかった。そのため老年期には、ネガティブな出来事の再評価傾向が高いことは適応的とは言えないが、回想量が多いことは非適応的だと考えられた。しかしながらこの関連は男性において顕著であり、女性では明確ではなかった。

分析の第2段階では上記の変数に加えて回想量と肯定的回想、否定的回想、再評価傾向の3つの回想の質的指標との積である交互作用項を説明変数として投入した。その結果、交互作用項の投入による決定係数の増分は老年男性群において自尊感情度を従属変数とした場合に有意であり ($\Delta R^2 = .140, \Delta F(3,100) = 6.82, p < .001$)、肯定的回想と回想量による交互作用項の寄与が有意だった ($\beta = .316, p < .01$)。また決定係数の増分は有意ではない

Table 8 適応指標に対する回想の量および質の階層的重回帰分析

	老年女性群			老年男性群			青年女性群			青年男性群		
独立変数	人生満足度	抑うつ度	自尊感情度	人生満足度	抑うつ度	自尊感情度	人生満足度	抑うつ度	自尊感情度	人生満足度	抑うつ度	自尊感情度
第1段階												
回想量				.250*		-.237*						
肯定的回想						.260**						
否定的回想	-.328**	.265*					.263**	-.316**		-.287*	.457***	-.303*
再評価傾向							.338**	-.328**		.298*		-.362*
決定係数(R ²)	.136*	.135*	.041	.152**	.164**	.178***	.240***	.282***	.229***	.180*	.265***	.172*
第2段階												
回想量				-.195*	.312**	-.302**						
肯定的回想						.254**						
否定的回想	-.338**	.264*					-.207*	.283**	-.326**		.444**	
再評価傾向							.387**	-.345**		.307*	-.376*	
回想量×肯定的回想				.282*		.316**						
回想量×否定的回想												
回想量×再評価傾向												
決定係数(R ²)	.145	.141	.074	.207	.216	.317	.256	.298	.234	.182	.279	.210
決定係数の増分(ΔR ²)	.010	.006	.033	.055	.052	.140***	.016	.016	.005	.002	.014	.038

数値は標準偏回帰係数 * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

が ($\Delta R^2 = .055$, $\Delta F(3,100) = 2.31$, $n.s.$), 同様の交互作用項の寄与が人生満足度でも有意だった ($\beta = .282$, $p < .05$)。しかしながら老年女性群や青年群ではいずれの交互作用項の寄与も認められなかった。そこで老年男性群で有意な交互作用を示した肯定的回想と回想量に対して、回想量の得点が平均値および $\pm 1SD$ における肯定的回想の単回帰直線を求めた (Figure 1および2参照)。

その結果、回想量が少ない老年者はポジティブな回想の想起しやすさに関わらず適応度は一定であったが、回想量が多い老年者はポジティブな回想を想起するほど適応度は高く、ポジティブな回想を想起しないほど適応度は低いと考えられた。そのため回想量やポジティブな回想の想起しやすさが単独で老年者の適応度を説明するというよりも、そうした要因が関連しあうことで適応度を説明すると考えることができた。

全体的考察

本研究の結果はFry (1991)の先行研究を支持しており、回想量とその質的指標の間には青年男性群を除いてほとんど相関が認められず、概して独立したものであると考えられた。その一方で、青年男性群において回想量とその質的指標との間に相関が見られたことは、両者がつねに独立しているとは言えないことを示している。

また重回帰分析の結果より、老年期の男性では、回想の量が多いほど非適応的である一方で、ポジティブな回

想を想起しやすい場合には適応的であるというように、それぞれ適応度と異なる関連をもつ可能性が示された。

世代差および性差について

回想と適応度との関連には、世代により異なる特徴が認められた。そして青年群ではほとんど性差が認められなかった一方で、老年群では顕著な性差が認められた。

青年が自己のアイデンティティを確立するプロセスで、しばしば回想を用いている可能性が指摘されている(長田・長田, 1994)。先に示した分散分析の結果より、青年は否定的回想やネガティブな出来事を再評価する傾向が老年者よりも高く、また重回帰分析の結果、これらの指標は適応度の高さをよく説明した。こうした結果は、青年が様々な価値や役割を同一化したり拒絶してゆくプロセスにおいて、しばしば過去のネガティブな出来事を振り返って再評価しようとして試みていることを示すと考えられる。青年期の男性で回想量とその質的指標に相関が認められたのは、回想において否定的な出来事の想起やその再評価が頻繁に行われていることを示すかもしれない。しかしながら本研究では、なぜこうした関連が青年期の男性のみに顕著であり、女性では認められなかったのかは検討できなかった。

これに対して老年群では、適応との関連において男女で特徴的な違いが認められた。

老年男性群では回想量と肯定的回想の想起しやすさが適応度を説明し、ほかの3群と異なって否定的回想は適

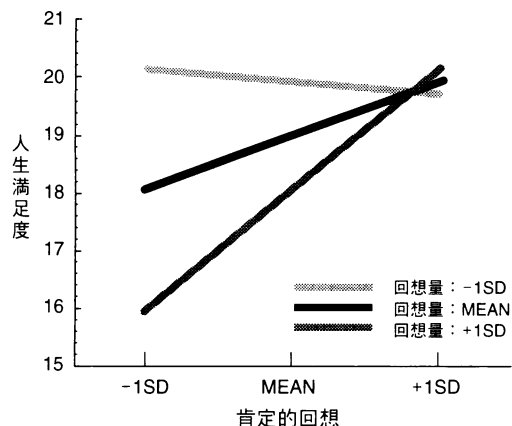


Figure 1 人生満足度における回想量および肯定的回想の交互作用

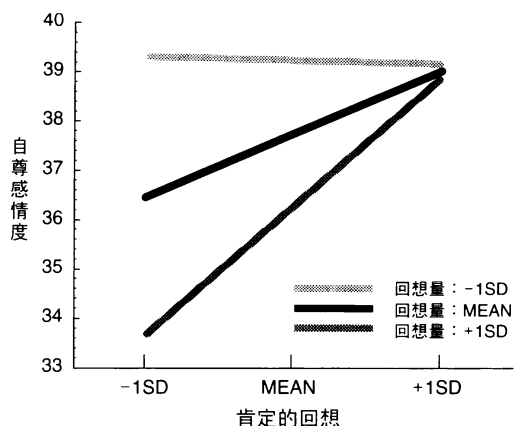


Figure 2 自尊感情度における回想量および肯定的回想の交互作用

応度を説明しなかった。そして青年期にはネガティブな出来事を再評価することは適応的であり、回想量の多さは適応度と関連しなかったのと同様に、老年期にはネガティブな出来事を再評価することは適応的とはいえず、回想量が多いことは非適応的だと考えられた。

このような世代差は、両者にとって回想のもつ意味が異なることを示すかもしれない。青年期における回想とは、自分自身を内省して理解するために行われ、解決すべき問題を振り返る機会として存在すると考えられる。そのため再評価することは重要な意義をもつ。しかし老年者にとっての回想は、しばしば「過ぎ去った過去をよくよと振り返ること」になる危険性をもっている。たとえ老年者が過去に未解決の葛藤を抱えていても、そのことをあらためて吟味することはかえって心理的な負担を生み、再評価しようと試みるプロセス自体が不快な経験となる可能性がある。そのため過去を再評価するよりも、むしろ思い出さないよう努めることが老年者にとって容易で有用な方略であると考えられる。

老年女性群では、ネガティブな回想を除いて回想に関する尺度は適応度を説明しなかった。また性格特性との関連では、老年期の女性はほかの群と異なり、神経症傾向はネガティブな回想の想起しやすさを説明せず、その一方で再評価傾向の高さを説明した。そのため老年期の女性では、神経症傾向に関わりなくネガティブな回想を想起するが、過去を再評価する程度は神経症傾向の高さと関連すると考えられた。

このことに関連して、老年期の性差に関する研究(例えばSmith, & Baltes, 1998)では、老年期の女性は男性よりも抑うつ的で主観的ウェルビーイングが低く、より多くのネガティブな感情を経験しているとされる。その理由として、多くの女性が男性よりも配偶者や肉親の死別を経験して独居であること、また女性は男性よりも自

己の内的な情動経験を表出する傾向があり、ネガティブな情動を認めやすいことなどが挙げられている。

老年者の心理的適応や幸福感に対して、配偶者との死別の有無や友人や家族による社会的支援などの要因が影響を与えることがこれまでも指摘されている(例えば岡林ほか, 1997)。本研究の対象者は老年女性群の約半数(予備調査における62名中34名)が伴侶との死別を経験しているのに対し、男性群で伴侶と死別していたのはわずか(予備調査における102名中5名)であった。伴侶を失った老年期の女性が死別について回想し、それを再評価しようと試みている可能性は十分に考えられる。そのため、こうした要因が性差に与える影響を統制した上で、さらに詳細な検討を試みる必要があるだろう。

老年期における回想の質と適応との関連

重回帰分析の結果からは、老年男性群のみにはあるが、回想量と肯定的回想との間で交互作用が認められた。そして回想量が少ない老年者はポジティブな回想の想起しやすさに関わらず適応的だが、回想量が多い老年者はポジティブな回想を想起するほど適応的であり、想起しないほど非適応的な傾向を示した。

この結果は、LoGerfo (1980)の強迫的回想やWebster (1993)の苦痛の再現といった回想機能をよく説明すると考えられる。すなわち、回想はしばしば老年者にとって苦痛で困難な経験となるにも関わらず、彼らは時として不快な過去を強迫的に振り返る場合がある。過去のつらく悲しい出来事や実現しなかった願いは個人の記憶にしこりとなって残り、それは彼らに今なお過去の苦痛を振り返らせる誘因となるかもしれない。

そのため老年者の過去がネガティブな思い出に占められる場合、頻繁に回想を行うよりも、むしろ回想を行わないほうがより適応的であると考えられる。回想による

ネガティブな影響を避けて過去を振り返らないことは、それ自体尊重すべき自然な行為であり、老年者が適応を維持するための有効な手段となるだろう。

Coleman (1986) は、長年にわたる縦断的研究の結果、過去を好んで思い出すかどうかと適応度の高さの間には一義的な関連が認められないことを示唆している。回想すること、あるいは回想を行わないことが適応的であるかどうかは、その個人が歩んできた人生の道筋や現在の生活環境、そして現在の視点から過去をどのように捉えることができるかといった要因が影響しあっていると考えられる。

本研究では老年期の回想と適応度との関連に性差が認められ、回想の量やその質的指標が男女に共通して適応度を説明することはなかった。しかしながら、老年期の男性ではそれら2つの要因が関連しあうことで適応度が説明できる可能性が示された。これまでの研究の多くは、回想の量的もしくは質的な次元のみに注目して検討されている。だがこの結果からは、回想の適応的意義を検討する場合には、これらの要因をともに検討することが重要であると考えることができた。

だが、こうした結果を解釈する場合に考慮すべきいくつかの要因がある。本研究の対象者は、一般に前期高齢者と呼ばれる比較的健康的な60歳代後半の老年者である。彼らが行っている回想は、老年者が「死が近づくのを意識することで自然に生じる回想 (Butler, 1963)」とは異なるかもしれない。ひとくちに老年者といっても、その年代の違いによって、回想が果たす役割は様々であるとは限らない。こうした結果が後期高齢者を含む老年者全般にあてはまるのかどうかについては、今後さらなる検討が必要であるだろう。

また回想のもつモダリティ、あるいは研究方法の違いという問題も残されている。本研究では質問紙を用いて検討しているため、ここで扱っている回想とは、いわば「個人が日常的に行う回想」や個人の回想スタイルに相当すると考えられ、これらがButler (1963) のライフレビューやHaight et al. (1995) の療法的回想と同一のものであるとは言えない。本研究では、過去を再評価する傾向は老年期の適応度の高さを説明せず、回想において評価の要素が重要な役割を果たすとしたHaight et al. (1995) の見解とは異なる結果を示した。しかしながら、このような結果の相違が認められたのは、扱っている回想のモダリティが異なるためである可能性がある。そのため、個人が日常的に行う回想とライフレビューのような療法的回想は異なる意味をもつという前提に立ち、その上で、実際に回想を行うことが果たす役割や適応的意義が検討されなければならない。

欧米では、施設入居老人やデイケア利用者などを対象とする療法的回想に関する研究が盛んに行われており、

日本でも、野村 (1998) や黒川 (1994) を中心として回想法の実践的な利用やその研究が進められている。今後はこうしたフィールドにおいて試みられている療法的回想についての検討が必要であろう。

文 献

- Adams, D. L. (1969). Analysis of a life satisfaction index. *Journal of Gerontology*, 24, 470-474.
- Aiken, L. S., & West, S. G. (1991). *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. Newbury Park: Sage.
- Brennan, P. L., & Steinberg, L. D. (1984). Is reminiscing adaptive?: Relations among social activity level, reminiscence and morale. *International Journal of Aging and Human Development*, 18, 99-110.
- Butler, R. N. (1963). The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, 26, 65-75.
- Coleman, P. G. (1974). Measuring reminiscence characteristics from conversation as adaptive features of old age. *International Journal of Aging and Human Development*, 5, 281-294.
- Coleman, P. G. (1986). *Ageing and reminiscence processes: Social and clinical implications*. New York: John Wiley & Sons.
- Costa, P. T., & McCrae, R. R. (1992). *NEO-PI-R professional manual: Revised NEO personality and NEO five-factor inventory*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- Costa, P. T., Metter, E. J., & McCrae, R. R. (1994). Personality stability and its contribution to successful aging. *Journal of Geriatric Psychiatry*, 27, 41-59.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1990). 老年期 (朝長正徳・朝長梨枝子, 訳). 東京: みすず書房. (Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1990). *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton & Company.)
- Fry, P. S. (1991). Individual differences in reminiscence among older adults: Predictors of frequency and pleasantness ratings of reminiscence activity. *International Journal of Aging and Human Development*, 33, 311-326.
- Haight, B. K. (1988). The therapeutic role of a structured life review process in homebound elderly subjects. *Journal of Gerontology*, 43, 40-44.
- Haight, B. K., Coleman, P. G., & Lord, K. (1995). The linchpins of a successful life review: Structure, evaluation, and individuality. In B. K. Haight, & J. D. Webster (Eds.), *The art and science of reminiscing: Theory,*

- research, methods, and applications* (pp.179-192). Bristol, PA: Taylor & Francis.
- Havighurst, R. J., & Glasser, R. (1972). An exploratory study of reminiscence. *Journal of Gerontology*, *27*, 245-253.
- 黒川由紀子. (1994). 痴呆老人に対する回想法グループ. *老年精神医学雑誌*, *5*, 73-81.
- Liberman, M. A., & Falk, J. M. (1971). The remembered past as a source of data for research on the life cycle. *Human Development*, *14*, 132-141.
- LoGerfo, M. (1980). Three ways of reminiscence in theory and practice. *International Journal of Aging and Human Development*, *12*, 39-48.
- Merriam, S. (1980). The concept and function of reminiscence: A review of the research. *The Gerontologist*, *20*, 604-609.
- Molinari, V., & Reichlin, R. E. (1985). Life review reminiscence in the elderly: A review of the literature. *International Journal of Aging and Human Development*, *20*, 81-92.
- Neugarten, B. L., Havighurst, R. J., & Tobin, S. S. (1961). The measurement of life satisfaction. *Journal of Gerontology*, *16*, 134-143.
- Niino, N., Imaizumi, T., & Kawakami, N. (1991). A Japanese translation of the Geriatric Depression Scale. *Clinical Gerontologist*, *10*, 85-87.
- 野村信威・橋本 幸. (1997). 高齢者における回想の質が適応に及ぼす影響について. *関西心理学会第109回大会論文集*, 34.
- 野村豊子. (1998). *回想法とライフレビュー：その理論と技法*. 東京：中央法規出版.
- 岡林秀樹・杉澤秀博・矢富直美・中谷陽明・高梨 薫・深谷太郎・柴田 博. (1997). 配偶者との死別が高齢者の健康に及ぼす影響と社会的支援の緩衝効果. *心理学研究*, *68*, 147-154.
- 長田由紀子・長田久雄. (1994). 高齢者の回想と適応に関する研究. *発達心理学研究*, *5*, 1-10.
- 長田由紀子・下仲順子・中里克治・河合千恵子. (1993). 高齢者の回想と死の不安の関係について. *日本発達心理学会第4回大会発表論文集*, 240.
- Perrota, P., & Meacham, J. A. (1981). Can a reminiscing intervention alter depression and self-esteem? *International Journal of Aging and Human Development*, *14*, 23-30.
- Romanuk, M., & Romaniuk, J. G. (1981). Looking back: An analysis of reminiscence functions and triggers. *Experimental Aging Research*, *7*, 477-489.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山 緑. (1999). *NEO-PI-R, NEO-FFI 共通マニュアル*. 東京：東京心理.
- Smith, J., & Baltes, M. M. (1998). The role of gender in very old age: Profiles of functioning and everyday life patterns. *Psychology and Aging*, *13*, 676-695.
- 筒井美加. (2000). 自己関連の情報処理における気分一致効果：自伝的想起課題による検討. *心理学研究*, *71*, 281-288.
- 和田修一. (1981). 人生満足度尺度の分析. *社会老年学*, *14*, 21-35.
- Webster, J. D. (1993). Construction and validation of the Reminiscence Function Scale. *Journal of Gerontology*, *48*, 256-262.
- Wood, V., Wylie, M. L., & Sheafor, B. (1969). An analysis of a short report measure of life satisfaction: Correlation with rater judgements. *Journal of Gerontology*, *24*, 465-469.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子. (1982). 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究*, *30*, 64-68.
- Yesavage, J. A., Brink, T. L., Rose, T. L., Lum, O., Huang, V., Adey, M., & Leirer, V. O. (1983). Development and validation of a geriatric depression screening scale: A preliminary report. *Journal of Psychiatric Research*, *17*, 37-49.

謝辞

本研究を実施するにあたり、財団法人京都SKYセンターの皆さま、医療法人行陵会の秋山謙也さんと大原記念病院博寿苑ダイケアスタッフの皆さま、聖徳大学短期大学部教授長田由紀子先生、東京都立保健科学大学教授長田久雄先生に多大なご支援を頂きました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

Nomura, Nobutake (Graduate School of Psychology, Faculty of Letters, Doshisha University)&Hashimoto, Tsukasa (Department of Psychology, Faculty of Letters, Doshisha University). *Affective Quality of Reminiscence, Revaluation Tendency, and Adaptation in Old Age*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2001, Vol.12, No.2, 75-86.

This study examined the adaptive function of reminiscence in old age, based on the hypothesis that the quality of reminiscence affects adaptation, rather than the quantity of reminiscence. A sample of 208 older adults (ages 60-82 years) and 197 younger adults (ages 18-30 years), all attending college classes, completed questionnaires including a Positive Reminiscence Scale, a Revaluation Tendency Scale, and measures of life satisfaction, etc. The results indicated that the affective quality of reminiscence was generally associated with life satisfaction and mental health, although there was some variation in this tendency according to respondent age and gender. The revaluation tendency was found mainly in younger adults. Only among elderly males, the quantity of reminiscence was associated with adaptive indices, and there was a significant interaction between the quantity and positive affect of reminiscence. These findings suggest that the quantity of reminiscence mediates between the affective quality (positive vs. negative) of reminiscence and adaptation in old age.

[Key Words] Gerontology, Reminiscence, Adaptation, Life review, Adult development

2000.4.13 受稿, 2001.2.6 受理

関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求： 2年間の変化とその要因

杉村 和美

(追手門学院大学人間学部)

本研究の目的は、女子青年のアイデンティティ探求における関係性のレベルを縦断的に検討し、関係性のレベルの変化に関わる要因を明らかにすることであった。女子大学生31名に対して、Ego Identity Interviewを拡張した面接を、3つの時点（3年生前期・4年生前期・4年生後期）で実施した。領域は、職業、友情、デート、性役割の4つであった。職業、友情、デートの3つの領域において高レベルの関係性への有意な移行が示されたが、性役割においては有意な変化は示されず、低レベルへ移行した者が高レベルへ移行した者を上回った。変化の要因については、「就職活動・職業決定」が最も多く、高レベルへの移行と低レベルへの移行に共通に報告された。また、「友人・恋人との関係の変化」が、高レベルへの移行に顕著に見られた。本研究の結果は、アイデンティティにおける関係性の側面を重視する最近の動向を支持するとともに、関係性の観点から見たアイデンティティ形成のプロセスについていくつかの実証的な証拠を提出した。

【キー・ワード】アイデンティティ形成、関係性、女性、青年期、縦断研究

問 題

アイデンティティとは、幼児期以来形成されてきたさまざまな同一化や自己像が、青年期に取捨選択され再構成されることによって成立する、統合された自我の状態である。この統合には、時間的・空間的な変化における斉一性・連続性の自覚と、自己認識と重要な他者からの期待の合致の自覚という形態がある(Erikson, 1968/1973)。現在のアイデンティティ研究においては、後者の側面への関心が高まっている。すなわち、アイデンティティ形成は、他者からの分離や自律によってのみではなく、他者との関係性の中で起こることが強調されている。

アイデンティティに関する多くの論考がこのアイデアに注目しており、アイデンティティ概念のとらえ直しが始まっている(例えばArcher, 1993; Graafsma, Bosma, Grotevant, & de Levita, 1994; Josselson, 1994; Kroger, 1989)。例えばKroger (1989)は、アイデンティティ形成を自己と他者との間のバランスをとるプロセスとして、Graafsma et al. (1994)は、個人とそれを取り巻く文脈との間の相互調整(mutual regulation)として定義している。

杉村(1998)は、関係性の問題を重視したアイデンティティ研究の動向を展望し、青年期におけるアイデンティティ形成とは、自己の視点に気づき、他者の視点を内在化しながら、そこで生じた自己と他者の視点の間の食い違いを相互調整によって解決するプロセスであると指摘した。具体的には、アイデンティティ形成の中心的な作業である探求(exploration)を、自己の欲求・関心

のみではなく他者の意見・期待も考慮したり、相談や討論といった形で他者を利用したり、自己と他者の視点の間の食い違いを交渉などの手段で解決しながら、人生の重要な選択を決定していくことであるととらえ直した。本研究では、このようなアイデンティティ探求のプロセスにおける自己と他者の関係の認識を「関係性」と呼ぶ。

こうした概念のとらえ直しに基づいてアイデンティティ形成のプロセスを検討した実証研究はほとんど見られない。現在までに発表されているのは、Josselson (1992)とKroger (1997)の研究のみである。彼女らは、自己と他者の関係性のいくつかのモードに着目し、それらが自己を定義する際にどのように利用されているのかを検討した。これらの研究は、この分野において先駆的な意義を持つが、主として成人期を対象としている。青年期におけるアイデンティティ形成を検討する際には、この時期の発達の特徴を考慮する必要がある。本研究は、青年期のアイデンティティ形成のプロセスを、関係性の観点から明らかにする。

とくに本研究は、女子青年に焦点を合わせる。その理由は、第1に、アイデンティティ形成において関係性が果たす役割は、男性と女性でその程度や質に違いが見られることが指摘されているからである(例えばGilligan, 1982/1986; Josselson, 1973; Skoe, 1998)。したがって、関係性の観点からアイデンティティ形成を検討するにあたり、まず女性の特徴を詳しく検討することにした。第2に、現代女性の発達において、アイデンティティ形成そのものが大きな意味を持つようになったからである。

女性の生き方が多様化した現代では、女性が主体的に人生の選択を行うことが可能となった。その一方で、女性の選択に対する社会的あるいは伝統的な制約や圧力も少なくない。このような状況において、女性のアイデンティティ形成のプロセスを解明することは重要な課題であると考えられる。

杉村 (1999) は、先に述べた定義に基づいて、面接調査により女子青年のアイデンティティ探求を検討し、探求における関係性には、Table 1 に示すような大きく2つのレベル (高・低) があることを見いだした。これらのレベルは、青年期における社会的認知発達レベル (例えば Fischer, 1980; Noam, & Fischer, 1996; Selman, Beardslee, Schultz, Krupa, & Podorefsky, 1986) を含んで設定されている。アイデンティティと社会的認知能力との関連が指摘されていることに加えて (Marcia, 1993)、関係性のレベルは自己と他者の視点の認識の問題を含むので、人に関わる認知の発達が根底にあると考えられるからである。ただし、社会的認知発達が一般的な人に関する認知の発達を指すのに対して、関係性のレベルは、アイデンティティ探求、すなわち人生の重要な選択を決定するプロセスに焦点を合わせ、そこでの自己と他者および両者の関係の認識の発達を指す点で区別される。

杉村 (1999) の試みは、関係性の観点からアイデンティティ形成のプロセスを研究するための可能なアプローチを提示しているが、検討すべき課題が残されている。つまり、関係性のレベルは、大学3年生前期の対象者から構築されており、一時点での状態像を示したものである。しかし、アイデンティティ形成はある程度の期間にわたって進むので、そのプロセスを明らかにするためには、複数の時点にわたる関係性のレベルの変化を見る必要があると考えられる。Josselson (1994) は、アイデンティティの発達とは、他者の欲求や興味を考慮する一方で自分自身を表現したり、葛藤を認識して解決し、

あるいは解決できない葛藤があっても他者との結びつきをなお持続することを学び続けるプロセスであると指摘している。青年が日常生活の中で他者と関わることを通して、関係性のレベルは洗練されていくと推測される。

したがって本研究の第1の目的は、アイデンティティ探求における関係性のレベルを縦断的に測定することにより、その変化を記述することである。

縦断研究を行う場合、測定時期をどのように設定するかが問題となる。アイデンティティ形成は、青年に対する周囲からの期待や圧力によって推し進められるので、その青年が置かれた環境によって好適な時期が異なると考えられる。大学生の場合、アメリカの先行研究は、ほぼ一致して新入生よりも高学年の方が強いアイデンティティの感覚を持つことを示している (Waterman, 1993 参照)。日本の大学生を対象にした加藤 (1989) の縦断研究は、さらに時期を特定しており、大学3年から4年生前期にかけてアイデンティティ体験が顕著に強まることを見いだした。したがって、この時期が大学生のアイデンティティ形成に関する重要な時期であると考えられる。また、後に述べるように、就職活動や職業決定は日本の大学生のアイデンティティ形成にとって重要な意味を持つことが指摘されている (下山, 1986; 高村, 1997)。これらの前後ではアイデンティティの状態像に違いがあると推測される。そこで、本研究では大学3年生から卒業にわたる期間に焦点を合わせ、就職活動を開始する以前の大学3年生前期 (Time 1)、活動中の4年生前期 (Time 2)、活動終了後の4年生後期 (Time 3) の3時点において測定する。

アイデンティティ・ステータス・アプローチ (Marcia, 1966) による縦断研究は、アイデンティティの領域によってステータスの変化に違いがあることを示している (Kroger, 1988; Waterman, 1993 参照)。いくつかの研究に共通して、大学時代には、男女ともに職業の領域に

Table 1 アイデンティティ探求における関係性の2つのレベル

レベル	定義 ^a
低レベル	このレベルの青年は、重要な人生の選択・決定のプロセスにおいて、自己と他者の視点を認識することができない、あるいは他者の視点を単にコピーしている。自己と他者の関係の表象をほとんど持たず、探求のプロセスにどのような他者が関与しており、彼らがどのような機能を果たしているのかを十分に理解することができない。
高レベル	このレベルの青年は、重要な人生の選択・決定のプロセスにおいて、自己と他者の視点を認識することができる。また、一部の青年は、両者の視点の間の食い違いを相互調整によって解決することができる。自己と他者の関係の表象を持ち、探求のプロセスにどのような他者が関与しており、彼らがどのような機能を果たしているのか理解することができる。

a 杉村 (1999) に表現上の修正を一部加えた。

において高いステイタス（達成とモラトリアム）への移行が顕著に見られた。また、性役割の領域については、女子の方が男子よりも高いステイタスへの移行が顕著に見られた。これらの研究は関係性を考慮していないが、関係性のレベルについても、女子青年はとくに職業と性役割の領域において高いレベルへの移行を示すかもしれない。

本研究の第2の目的は、関係性のレベルにおける変化に関わる要因を明らかにすることである。アイデンティティ形成に関わる要因を検討した研究はこれまであまり行われてこなかった。しかし、近年、社会的文脈におけるアイデンティティ発達に対する関心が高まり、その必要性が指摘されている（Kroger, & Green, 1996; Phinney, & Goossens, 1996）。

Kroger (2000) は、青年期後期のアイデンティティ発達に影響を与える3つの文脈を指摘している。これに従って、大学時代のアイデンティティ探求について可能な要因を整理してみる。1つめは家族である。家族関係の中で青年が体験する独自性 (individuality) と結合性 (connectedness) のコミュニケーションは、他者の視点を考慮しながら自己の独自の視点を明確にするトレーニングとなる。つまり、アイデンティティを探求する基本的な力を養うと考えられる (Grotevant, & Cooper, 1985; 杉村, 1999)。

2つめは友達である。友達関係は、青年期後期に大きな質的転換を遂げる。すなわち、自分にとって本当に必要な友人を選択し、個と個の深い付き合いを求めるようになる (落合・佐藤, 1996)。こうした結びつきは、アイデンティティにおける個としての感覚や関係の中における自己を確認することに寄与するであろう。実際、同性・異性の友人との関係が大学生のアイデンティティ体験と有意に関連していることが示されている (加藤, 1989)。ここで、Kroger は触れていないが、親密な異性との関係もアイデンティティ探求に関わる重要な要因であると考えられる (Josselson, 1994; 大野, 1999)。例えば大野 (1999) は、女子短大生のレポートを分析し、彼女らが恋愛行動を通してアイデンティティを確立していく様子を描いている。

3つめは教育的・職業的環境である。大学に進学する青年はそれ以外の進路を選択する青年に比べて、アイデンティティ探求を長期間にわたり体験し、また後に引き延ばす傾向がある (Kroger, 2000; 下山, 1983)。それだけに、大学環境や大学生という身分が提供する探求のための資源は重要であろう。例えば、授業、サークル、アルバイトなどの活動は、アイデンティティ探求を行う有効な場であると考えられる。さらに、大学時代における就職活動や職業決定は、アイデンティティ探求のとりわけ重要な契機であると推測される。これらは、ほぼすべ

ての大学生によって同じような時期に体験され、相当な時間的・心理的エネルギーを投入して行われる。実際、下山 (1986) は、大学生の職業未決定のあり方を踏まえて、職業決定とアイデンティティの確立との関連を考慮することの重要性を指摘している。また、高村 (1997) は、大学4年生を対象にした面接調査により、進路探求とアイデンティティ探求とが相互作用しながら進む場合に、アイデンティティが成功裏に形成されることを示した。加えて、アメリカの職業選択がきわめて主体的なプロセスであるのに対して、日本の職業選択は、主体性を必要とすると同時に、周囲の期待、成績、その職業の社会的評価をいかに自己の中に組み込むかという問題を含んでいる (下山, 1996)。このことから、自己と他者の視点の認識に着目した関係性のレベルのあり方に対して、重要な意味を持つと推測される。

方 法

対象者

対象者は、国立大学教育学部に在籍する女子青年31名で、調査開始時は3年生で20～21歳であった。全員が未婚であり、両親とも健在で少なくとも1名のきょうだいがいた。全体として、両親の社会的地位は中位から上位であった。なお、調査開始時の実際の対象者は35名であったが、関係性に焦点を合わせた研究であるため両親が健在であり、かつ3つの調査時点のすべてに参加した対象者を有効データとした。

本研究の測定時期は就職活動をはさんでいるので、対象者の就職活動について簡単に触れておく。31名中30名が就職または進学希望で、就職活動の内訳は、一般企業12名、公務員・教員・大学院進学12名、両者を併行して行った者6名であった。このうち26名が、調査終了時までいずれかの進路に内定した。

測度

関係性のレベル すべての調査時点において、Grotevant, & Cooper (1981) による Ego Identity Interview を拡張した半構造化面接を行った。Ego Identity Interview は6つの領域からなり、このうち職業、友情、デート、性役割の4つを選択した。職業と性役割は、先に述べたように女子青年にとって重要な領域であると推測されることから、友情とデートは、大学生活では授業、サークル、アルバイトなどを通して、それまで以上に幅広い同性・異性との関係が体験されると思われることから取り上げた。一方、宗教と政治は日本の青年のアイデンティティ形成にあまり意味を持たないことが示されているため (無藤, 1979; 山本, 1988)、この2領域は除外した。

Ego Identity Interview は、次のように拡張された。アイデンティティ探求における関係性の特徴を明確に把握するために、(a) 探求のプロセスに関与した他者と彼ら

の機能を特定すること、(b) 探求のプロセスにおいて自己と他者の相互調整があらわれた場合に、その内容を追質問することを意図したいくつかの質問が付加された。これらは、アイデンティティ・ステータス面接 (Marcia, 1966; Marcia, & Archer, 1993), アイデンティティ形成における関係性を検討するための方法論的提案 (Archer, 1993), Interpersonal Negotiation Strategies Interview (Schultz, Yeates, & Selman, 1989) を参考にして作成された。項目は、予備面接を行ったうえで確定された。領域ごとの質問項目の概要は、付録1に示した。

各対象者は、領域ごとに各時点の関係性のレベルを評定された。なお、Table 1に示した関係性の2つのレベル(高・低)はそれぞれ、自己と他者の視点の認識の特徴によってさらに3つの下位レベルに分けることができ、全部で6つの下位レベルが設定されている (Sugimura, 2001)。下位レベルの概要は、付録2に示した。評定の信頼性は、ランダムに選んだ30名分(各調査時点から10名)のデータを2名の評定者(1名は筆者; もう1名は大学院研究生で、10名分のデータでトレーニングを受けている)が独立に評定して調べた。評定者間の一致率は、職業80.0%、友情90.0%、デート73.3%、性役割70.0%であった。先行研究では、アイデンティティ・ステータスの評定の一致率は70~90%に分布しているため、本研究の値はおおむね妥当であると考えられる。ただし、関係性のレベルはあらたに設定された観点であるため、先行研究と単純に比較することはできず、今後も検討を重ねて確認する必要があるだろう。

変化の要因 Time 2, Time 3において、それぞれTime 1, Time 2と比較して各領域における関係性のレベルに変化が見られた場合、「前回の調査の時と比べて、_____という点が変わったように思われますが、このような変化に、何が最も影響を与えたと思いますか」と尋ねた。

要因は、次の6つのカテゴリーに分類された。(a) 就職活動・職業決定: 就職に向けた諸活動や職業決定に関わる要因(大学院への進学や特定の職業を伴わない将来展望も含む)、(b) 友人・恋人との関係の変化: 関係の実際の変化(出会い、別れなど)と質的变化(関係の深化、希薄化など)を含む、(c) 大学生活・日常生活上の要因: 大学の授業、周囲からのさまざまな情報など、(d) 内的変化: 強い外的要因なしに起こった考え方などの変化、(e) 考える機会なし: 前回の調査時点で関係性について考える契機となっていたイベントが、今回の調査時点ではなかったこと、(f) 不明: 「わからない」「理由はない」など要因が特定できない。これらは、「問題」で述べた先行研究と本研究で得られたデータの両方を考慮して作成された。

49件の要因が分類の対象となった。評定の信頼性は、ランダムに選んだ37件を2名の評定者(1名は筆者; も

う1名は大学院生で、12件について評定のトレーニングを受けている)が独立に分類して調べた。評定者間の一致率は81.8%であった。

手続き

対象者は、Time 1については授業中に、またTime 2, Time 3については手紙により個別に調査への参加を依頼され、その後、電話で参加の確認と面接日時の設定をされた。全員に謝金として各時点につき1000円が支払われた。

面接は、大学3年生前期(5~7月)、4年生前期(4~7月)、4年生後期(11~2月)の3回にわたって実施された。面接の間隔は、どの対象者についてもほぼ一定になるように設定された。

対象者は、学部内の実験室で筆者により個別に面接された。質問項目が十分に理解されるように、面接の最初に項目のリストが提示された。また、探求のプロセスに関与する他者について尋ねる際には、重要な他者を想起する手がかりとして、人物のリスト(母親、父親、きょうだい、おじ・おば、同性の友人、異性の友人、恋人、先輩、先生、これ以外の人)が提示された。これらの他者は、予備面接において探求のプロセスに関与することが見だされている (Sugimura, 1997)。面接は約1~3時間かかり、了承が得られた場合には録音され逐語録が作成された。

結 果

アイデンティティ探求における関係性のレベルの変化

関係性の2つのレベル(高・低)はそれぞれ3つの下位レベルに分けることができたが、そのいくつかは頻度が少なかったため、分析において下位レベルは区別しないこととした。

Table 2は、領域ごとの関係性のレベルの変化を示したものである。対象者の関係性のレベルにおける変化の時期と方向を特定するために、変化の顕著性に対する検定を行った。すべての期待度数が5未満であったため二項検定を用い、Time 1からTime 2, Time 2からTime 3, Time 1からTime 3の3つの期間について、領域ごとに、“低レベルから高レベルへの移行”と“高レベルから低レベルへの移行”の頻度を分析した。

職業、友情、デートの3つの領域において顕著な変化が示された。いずれの場合も、高レベルへの移行が低レベルへの移行より有意に多く見られた。また、有意な変化が見られたのは、Time 1からTime 2とTime 1からTime 3においてであり、興味深いことに、Time 2からTime 3においては、どの領域でも有意な変化はなかった。各領域における変化は、以下の通りである。

職業においては、Time 1からTime 2(3年生前期から4年生前期)で、高レベルへの移行が低レベルへの移行よ

Table 2 領域ごとの関係性のレベルの変化 (N=31)

領域 レベル	時点 前\後	Time 1からTime 2			Time 2からTime 3			Time 1からTime 3		
		低レベル	高レベル	<i>p</i> ^a	低レベル	高レベル	<i>p</i>	低レベル	高レベル	<i>p</i>
職業										
低レベル		7	8	.020*	6	2	n.s.	9	6	n.s.
高レベル		1	15		5	18		2	14	
友情										
低レベル		13	7	.035*	13	1	n.s.	15	5	.031*
高レベル		1	10		2	15		0	11	
デート										
低レベル		17	6	n.s.	16	3	n.s.	15	8	.020*
高レベル		2	6		0	12		1	7	
性役割										
低レベル		14	3	n.s.	17	1	n.s.	16	1	n.s.
高レベル		4	10		3	10		4	10	

注. 2つの時点のうち、前の時点におけるレベルは縦に、後の時点におけるレベルは横に示した。数字は人数を示す。

^a 二項検定による検定結果。

**p* < .05

り有意に多く見られた (*p* = .020)。友情においては、Time 1からTime 2とTime 1からTime 3 (3年生前期から4年生後期)で、高レベルへの移行が低レベルへの移行より有意に多く見られた (それぞれ*p* = .035, *p* = .031)。デートにおいては、Time 1からTime 3で、高レベルへの移行が低レベルへの移行より有意に多く見られた (*p* = .020)。性役割においては、他の3領域とは異なり、どの期間においても有意な変化は見られなかった。またきわめて少数ではあるが、すべての期間において低レベルへ移行した者が高レベルへ移行した者より多かったことが特徴的であった。

関係性のレベルの変化に関わる要因

Time 1からTime 2, Time 2からTime 3の2つの期間を合わせると、関係性が低レベルから高レベルへ移行した対象者は、のべ31名 (職業10名, 友情8名, デート9名, 性役割4名)であった。また、高レベルから低レベルへ移行した対象者は、のべ18名 (職業6名, 友情3名, デート2名, 性役割7名)であった (Table 2参照)。これらの合計49件 (以下、のべ人数を「件」と表示する)について、レベルの変化に関わる要因を領域ごとに分類したものがTable 3である。

高レベルへの移行 まず、カテゴリーを概観する。「就職活動・職業決定」が、31件中18件と最も多くを占めた。4つの領域のすべてにおいて出現したが、とくに、職業 (10件すべて)、友情 (8件中3件)、性役割 (4件すべて)において、対象者に最も共通に報告された。職業的な要因が、職業以外の領域のアイデンティティ探求にも関連していたことは注目される。次に多くを占めた

のは「友人・恋人との関係の変化」で、31件中10件であった。このカテゴリーは、友情 (8件中3件)とデート (9件中7件)の変化に対して中心的な役割を果たしていた。以上の2つのカテゴリー以外に分類された要因は少数であった。

次に、領域ごとに主な要因を見てみる。領域ごとの特徴的な要因と反応例を示したものがTable 4である。職業では、10件すべてが「就職活動・職業決定」に分類された。このうち半数以上が、就職活動を本格的に行ったり職業を決定する段階になって、それまで意識していなかった両親の期待, 欲求, 圧力が顕わになったことを報告した。同時にそれは、両親とは異なる自己の視点を認識することを意味していた (例1)。残りの対象者は、就職活動の中で、さまざまな他者 (両親, 友人, 教師など)から情報を得る必要が生じたことを報告していた。この体験を通して知った他者の職業に対する関心や考えと自分のそれらとは、併行してより明確に認識されるようになっていた (例2)。

友情とデートでは、「友人・恋人との関係の変化」が最も共通に報告された (それぞれ3件, 7件)。関係の変化には、実際的なものと質的なものが約半数ずつ含まれており、一部においては両方の特徴が示された。実際の変化については、出会いや再会 (例3)、別れや付き合い相手が替わったこと (例5)を契機として、友人や恋人との関係性を内省したことが報告された。質的变化については、関係の深まり (例6)、あるいは関係の希薄化などが、自己と他者 (とくに友人, 恋人)の視点を明確にする契機となっていた。ここで重要なことは、以上

Table 3 領域ごとの関係性のレベルの変化に関わる要因

領域	カテゴリー						Total
	就職活動・ 職業決定	友人・恋人との 関係の変化	大学生活・ 日常生活	内的変化	考える機会 なし	不明	
高レベルへの移行							
職業	10	0	0	0	0	0	10
友情	3	3	2	0	0	0	8
デート	1	7	0	1	0	0	9
性役割	4	0	0	0	0	0	4
Total	18	10	2	1	0	0	31
低レベルへの移行							
職業	5	0	1	0	0	0	6
友情	0	0	0	0	2	1	3
デート	0	1	0	0	0	1	2
性役割	2	0	1	1	2	1	7
Total	7	1	2	1	4	3	18

注. 分類された要因は49件で、これは Time 1 から Time 2, Time 2 から Time 3 の2つの期間におけるレベルの変化に関わった要因の合計である。

Table 4 領域ごとの特徴的な変化の要因と反応例

領域	高レベルへの移行	低レベルへの移行
職業	<p>【就職活動・職業決定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ [決まった就職先について] そんなに親に喜んでもらえないとは思わなかった…… 今まで反対されたりすることはなかったので…… 親が保守的なことを望んでいるのは前から分かっていたが、こんなに……違うんだと…… 確認 [した] (例1)。 ・ 自分で [職業の選択肢が] 絞れてきたところで、漠然としていないというか、ちゃんとした形になってきたから人に聞けた (例2)。 	<p>【職業決定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 就職活動している時点では [同じように活動している友達の影響が] あったけど、 [就職を] 決める時や決まっちゃった時にはあまり [友達の影響] はない (例8)。 ・ 将来の道が決まったので、もう [母親からの] 圧力はない (例9)。
友情	<p>【友人との関係の変化】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ いろんな子 [友達] に最近…… 会って [友人関係のことを] 考えたり、思い出した (例3)。 <p>【就職活動・職業決定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 就職活動で自己分析をして、今までの [友人関係のことを] を振り返った (例4)。 	
デート	<p>【恋人との関係の変化】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ [恋人と] 別れると、その人との付き合いの中に何か反省というのが常にある (例5)。 ・ [恋人と] 1年付き合ってた…… 以前と比べて相手の悪い部分が見えるようになった分、相手も私の悪いところを言うようになって [た] (例6)。 	
性役割	<p>【就職活動・職業決定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ [理由は] 就職活動です…… 母親が働いてきた後で家事をやっているのを見ると、自分に置き換えたら、すごい大変なことをやっているんだなと思って…… 自分にはそんなことできるのかなとも思うし、でもそれが母親なのかなという気もしますし (例7)。 	<p>【就職活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 就職活動していて、そう簡単に育児休暇はもらえないものなんだと [分かり] …… 一般論が分からなくなってきた [た] (例10)。

注. 特徴が明白ではない場合は、空白とした。反応例の中の「……」は省略、[] 内は筆者による補足を示す。

の例に示されるように、実際的であれ質的であれ、対象者がそれらの変化に対する評価や意味づけを行っていたことである。

これに加えて、友情では、「就職活動・職業決定」にも3件が分類された。これらの対象者は、就職活動のそれぞれ異なる側面に言及した。具体的には、適職を把握するためのいわゆる“自己分析”への取り組み(例4)、採用面接で自分について表現した体験、さらに就職活動が忙しくて友達に会う機会がなくなったことが、友人との関係性を内省する契機であったと報告した。

性役割では、4件すべてが「就職活動・職業決定」に分類された。これらの対象者は、就職活動や職業決定を契機として将来の生活設計(結婚や家事分担のプランなど)がうながされ、そのための参考として他者(とくに両親)の生き方や考えを認識したと報告していた(例7)。

低レベルへの移行 まず、カテゴリーを概観する(Table 3参照)。「就職活動・職業決定」が18件中7件と最も多くを占めていた。このカテゴリーは、職業と性役割に出現し、これら2領域においては対象者に最も共通に報告された(それぞれ6件中5件, 7件中2件)。これ以外のカテゴリーは、少数の対象者のみに報告された。

次に、領域ごとに主な要因を見ている(Table 4参照)。職業では、5件が「就職活動・職業決定」に分類された。これらの対象者においては、就職活動が終了(つまり職業が決定)して職業のアイデンティティ探求をする必要がなくなったため、自己の視点も他者の視点も認識されなくなった様子が示された(例8, 9)。

友情とデートでは、低レベルへ移行した対象者が少数であったため、一定の特徴を見いだすことは難しかった。

性役割では、5つのカテゴリーにわたって要因が分類された。このうち、「就職活動・職業決定」に分類された2件は、将来の職業生活を展望した時に、かえって性役割に関する自己の視点が曖昧になるという興味深い特徴を示した。これらの対象者は、就職活動を通して社会における性役割の現実に直面したり(例10)、将来の職業・結婚生活を現実的に考えるようになり、それまで保持してきた自己の視点(平等的性役割観)と、それを対比的に浮かび上がらせる役割を果たしていた両親の視点(伝統的性役割観)の両方もが不明確になっていた。

考 察

アイデンティティ探求における関係性のレベルの変化

性役割を除く3つの領域、すなわち職業、友情、デートにおいて、高レベルの関係性への移行が示された。この結果は、女子青年のアイデンティティ探求における関係性のレベルが、大学時代を通して上昇しうることの意味する。Josselson (1994) は、アイデンティティの発達

とは、自己と他者の欲求や興味の間でバランスを取ることや、葛藤を持ちながらも他者との関係を維持することを学ぶプロセスであると指摘した。本研究が焦点を合わせた自己と他者の視点の認識のしかたの洗練は、このプロセスの一側面と見ることができるので、結果はJosselsonの指摘と一致するといえる。また、変化の時期については、とりわけ3年生前期から4年生前期までが重要な時期であることが示された。この結果は、この時期にアイデンティティ体験が顕著に強まるという加藤(1989)の知見を、関係性という観点から支持する。

アイデンティティ・ステータス・アプローチによる先行研究(Kroger, 1988; Waterman, 1993参照)を踏まえて、女子青年においては、職業と性役割の領域で高レベルへの移行が示されると推測したが、結果は必ずしもそれを支持しなかった。つまり、職業では高レベルへの移行が見られたが、性役割ではそのような変化は見られず、むしろ友情とデートにおいて高レベルへの移行が見られた。このような各領域における変化の特徴については、後に、変化の要因との関連で考察する。

関係性のレベルの変化に関わる要因

以下の2種類の要因が、レベルの変化に中心的な役割を果たしていた。第1に、「就職活動・職業決定」が、高レベルへの移行と低レベルへの移行の両方に最も共通に報告された。この結果は、職業的な要因が大学生のアイデンティティ形成にとって重要な意味を持つと指摘した先行研究(下山, 1986; 高村, 1997)を支持する。また、同じ要因が、視点が明確になる場合だけではなく曖昧になる場合の契機としても報告されたことは、この要因が多重の意味を持つことを示唆する。

職業的な要因が、職業以外の領域の変化にも関わっていたという結果は興味深いものであった。浦上(1996)は、女子短大生について、就職活動の中で自己や職業についての情報を集め、それらを統合する活動や、自分の就職活動について振り返り、それを吟味するという思考的活動は、自己成長力を高めることを見いだした。就職活動は、職業を得ることのみではなく、青年期の自己形成に寄与するのである。本研究の結果は浦上の知見と一貫しており、就職までの一連の作業が、大学生のアイデンティティ形成の幅広い領域において意義を持つことを示唆する。

本研究の対象者が高学歴であることも、職業的な要因の影響の大きさに関与しているかもしれない。一般に女性の場合、高等教育機関で学ぶことが、継続就業の意欲や可能性を高める(若松, 1998)。実際に、本研究の対象者も、ほぼ全員が明確な就職または進学希望を持って就職活動を行い、大半がいずれかの進路に内定した。このことから、これらの女性たちは、職業を当面の人生設計の中心に位置づけており(また成功裏に内定を得たこ

とで、それがさらに可能となり)、そのため職業的な要因がレベルの変化に強く関連したとも推測できる。異なる教育的背景を持つ女性では、別の要因がインパクトを持つ可能性があることを考慮すべきだろう。

第2に、「友人・恋人との関係の変化」は、友情とデートの領域での高レベルへの移行に顕著に見られた。この結果は、友人や恋人との関係がアイデンティティ発達に深く関わるとする先行研究 (Josselson, 1994; 加藤, 1989; 大野, 1999) と一致する。

青年期後期における友人や恋人との関係は、長期にわたるコミットメントと親密さの程度の増大によって特徴づけられる (Kroger, 2000)。加えて、とくに女性のアイデンティティ発達は、これらの他者との関係によって支えられたりうながされるのが指摘されている (Josselson, 1996)。それだけに、この要因が、本研究の対象者にとって大きな意味を持つことは十分に理解できる。

また、関係の変化がアイデンティティに対してインパクトを持つことは、社会的アイデンティティ理論 (Hogg, & Abrams, 1988/1995) から支持される。この理論によると、アイデンティティは所属する社会的カテゴリーや親密な他者との関係から引き出されるので、これらが変化すれば、個人のアイデンティティの構造にも変化が見られると考えられるからである。友人や恋人との出会いや別れ、関係の深まりや希薄化の中で、青年は新しい視点を学んだり、自己と他者の視点の間の新しいバランスを構築すると思われる。

なお、家族関係に関わる要因は、大学生のアイデンティティ探求にとって重要であると予測したが、本研究においては出現しなかった。先行研究からは、家族関係の中でもとりわけ独自性と結合性のコミュニケーションが、アイデンティティ形成を促進することが見いだされている (Kroger, 2000)。こうした家族関係の質的な特徴は、アイデンティティ形成のプロセス全般にわたって根底にあるために、具体的なイベントとしては認識されにくかったのかもしれない。変化の要因としてではなく、関係性のレベルの特徴に埋め込まれた形で存在していると考えられる。このことを確かめるためには、関係性をとらえる項目への回答にあらわれた、対象者の家族関係の質を詳細に分析する必要がある。

要因との関連から見た各領域における変化の特徴

ここでは、各領域で見いだされた要因のうち主なものに焦点を合わせ、それらとレベルの変化との関連について考察する。

職業では、3年生前期から4年生前期においてのみ、高レベルへの移行が顕著に示された。これは、職業におけるアイデンティティ探求が、他の領域よりも限定された期間に行われる、青年にとって差し迫った課題であることを示唆する。

要因についての結果から、これらの対象者は、就職活動の本格化や職業の決定を契機として、両親からの期待に直面したり、さまざまな他者の職業に対する関心や考えに触れ、同時に自己の視点を明確化していたことが分かる。自己の視点が、自分の欲求や関心からのみではなく、他者の期待、関心、考えとの関わりにおいてあらわれたことは、日本の大学生における職業選択が、周囲からの期待や評価をいかに自己の中に組み込むかという問題を含むという下山 (1996) の主張と一致する。その意味で、この結果は、わが国の大学生のアイデンティティ形成に見られる典型的な関係性を示しているのかもしれない。

ただし、レベルの上昇は一時的であり、その後の期間においては、有意ではなかったもののレベルの低下を示した対象者が目立った。この変化のほとんどは、職業が決定し、この問題に取り組む必要がなくなったために起こっていた。このように、職業におけるレベルの変化は、就職活動や職業決定によって明確に区切られる。

友情とデートでは、3年生前期から4年生後期までの約1年半にわたる期間について高レベルへの移行が顕著に示された。対人関係領域のアイデンティティ探求は、職業に比べると差し迫っておらず、また社会的な圧力も小さいと思われる。そのため、対象者は、比較的長い時間をかけて自己と他者の視点を認識するしかたを身につけたのではないだろうか。

要因についての結果から、この変化の多くは、友人や恋人との日常的な関わりを通して起こったことが分かる。また、これらの対象者が、関係の変化に対する評価や意味づけを行っていたことも特徴的であった。自己認識の発達にとって、他者との関わりの中で起こったことを分析したり検討することや、そこでの感情を適切に処理することは重要である。というのは、他者が自分に対してどのようなはたらきかけをしてきたのかを吟味することを通して他者を認識し、そして、その他者と区別するプロセスにおいて自己のイメージが作られるからである (守屋, 1982)。

性役割では、有意ではなかったが、低レベルへ移行した者が目立っていたという予測と異なる結果が示された。先行研究 (Kroger, 1988; Waterman, 1993 参照) は、この領域が女子にとって問題であることを男子と女子の比較によって見いだしているの、女子だけを対象にした本研究の結果と単純に比較できないが、次のようなことが示唆される。まず、変化の要因は多岐にわたっていたが、中でも将来の職業生活を展望した時に自己の視点が曖昧になるという、一見矛盾した特徴が見いだされたことは注目される。ここでは、職業的な要因が、自分の理想や考えだけでは性役割のイデオロギーが決定できないことを対象者に認識させている。参考として、積極的

関与 (commitment) をとらえる項目 (例えば「あなたの回答が違ったものとなるような場面があると思いますか」) に対する回答を内容分析すると、「相手 (パートナー) によって」、「結婚したら」、あるいは「社会に出たら」違ったものになるかもしれないという回答が目立った。日本の場合、女性は男性よりも他者との相互依存性を強く期待される (柏木, 1997)。そのため、自己の視点は、結婚生活で性役割観を共有する未知のパートナーや、社会における性役割期待の現実に委ねられ、対象者の主体的な探求によって明確にされにくいと推測される。本研究の結果は、このような現実の壁にぶつかる対象者の状況を反映しているのかもしれない。

この結果のもうひとつの示唆は、本研究の枠組みの中で Ego Identity Interview を用いることの問題である。Ego Identity Interview の性役割に関する質問項目の中心は、結婚した夫婦が家庭の役割をどのようにこなすかについてである。したがって、教育環境において男女平等を享受する大学生にとっては、この問題が現実的に差し迫っておらず、この時期にあらためて明確な視点を持つ必要性が乏しい可能性がある。これらの質問項目がとらえる関係性は、成人期で焦点化されるのかもしれない。そうだとすれば、今回の結果の意味は、質問項目を大学生に適合したものにして検討したうえで判断されるべきであろう。

最後に、職業と性役割で、レベルの低下した対象者が目立っていたことに触れる必要がある。これらの対象者が示した変化の特徴は、関係性のレベルにおける発達とは何かという重要な問題を含むからである。この問題については、次の指摘が参考になる。Kroger (1996) は、アイデンティティ発達における退行 (regression) には、発達のさらに上昇するための危機にあるタイプや、現状に固執して新しい体験を避けるタイプなど、いくつかの種類があると指摘している。また、Selman, & Demorest (1984) も、Interpersonal Negotiation Strategies が状況によってはより未熟なレベルに低下する者がいることを見いだしている。彼らは、この結果を踏まえて、自我や社会的認知能力の発達は、年齢に伴うものであると同時に文脈によっても大きく規定されるものであると主張している。本研究で示されたレベルの低下は、この見解に一致するのではないかと考える。

実際、職業と性役割におけるレベルの低下には、それ以上の探求を行う必要がなくなったり、現状の他者との関係性では解決できない問題に直面したために起こったと思われるものが含まれていた。こうしたレベルの低下は、自己と他者の関係が認識できなくなったことではなく、認識を文脈に適合させたことを意味すると解釈できる。このことを確認するためには、関係性のレベルを、個人が置かれた状況との関連で評価する必要があるだろ

う。例えば、対象者にとってのその領域の重要性や探求の必要性を押さえることが有効かもしれない。また、身近な他者だけでなく、より幅広い他者や社会文化的文脈との関係性を考慮した調査も考えられる。

本研究は、アイデンティティ研究の最近の動向 (例えば Archer, 1993; Graafma et al., 1994; Josselson, 1994; Kroger, 1989) に基づき、関係性の観点から見たアイデンティティ形成のプロセスについていくつかの実証的な証拠を提示することができた。しかし、この分野の研究は始まったばかりであるため、課題は少なくない。考察で述べたいいくつかの課題に加えて、対象者が比較的少数で、特定の大学・学部 に在籍しているため、結果の一般化には注意を要することも触れておかなければならない。とくに、本研究に参加した教育学部の学生は、一般に講義などを通して心理的発達や個人の特徴について学ぶ機会が多いため、他学部の学生よりも自身の関係性を明確に認識している可能性がある。したがって、今後も他の対象者による検討を続け、知見を積み上げる必要がある。そうした検討を重ねることにより、関係性の観点から見たアイデンティティ形成の理論の構築が期待される。

文 献

- Archer, S. L. (1993). Identity in relational contexts: A methodological proposal. In J. Kroger (Ed.), *Discussions on ego identity* (pp.75-99). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Erikson, E. H. (1973). *アイデンティティ：青年と危機* (岩瀬庸理, 訳). 東京：金沢文庫. (Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton.)
- Fischer, K. W. (1980). A theory of cognitive development: The control and construction of hierarchies of skills. *Psychological Review*, 87, 477-531.
- Gilligan, C. (1986). *もうひとつの声：男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ* (岩男寿美子, 監訳). 東京：川島書店. (Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.)
- Graafma, T. L. G., Bosma, H. A., Grotevant, H. D., & de Levita, D. J. (1994). Identity and development: An interdisciplinary view. In H. A. Bosma, T. L. G. Graafma, H. D. Grotevant, & D. J. de Levita (Eds.), *Identity and development: An interdisciplinary approach* (pp.159-174). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Grotevant, H. D., & Cooper, C. R. (1981). Assessing adolescent identity in the areas of occupation, religion, politics, friendships, dating, and sex roles: Manual for administration and coding of the interview. *JSAS Cata-*

- log of Selected Documents in Psychology*, 11, 52 (ms. no. 2295).
- Grotevant, H. D., & Cooper, C. R. (1985). Patterns of interaction in family relationships and the development of identity exploration in adolescence. *Child Development*, 56, 415-428.
- Hogg, M. A., & Abrams, D. (1995). 社会的アイデンティティ理論：新しい社会心理学体系化のための一般理論 (吉森 護・野村泰代, 訳). 京都：北大路書房. (Hogg, M. A., & Abrams, D. (1988). *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes*. London: Routledge.)
- Josselson, R. (1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- Josselson, R. (1992). *The space between us: Exploring the dimensions of human relationships*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Josselson, R. (1994). Identity and relatedness in the life cycle. In H. A. Bosma, T. L. G. Graafsma, H. D. Grotevant, & D. J. de Levita (Eds.), *Identity and development: An interdisciplinary approach* (pp.81-102). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Josselson, R. (1996). *Revising herself: The story of women's identity from college to midlife*. New York: Oxford University Press.
- 柏木恵子. (1997). 行動と感情の自己制御機能の発達：育児文化との関連で. 柏木恵子・北山 忍・東 洋 (編), *文化心理学：理論と実証* (pp.180-197). 東京：東京大学出版会.
- 加藤 厚. (1989). 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究. *心理学研究*, 60, 184-187.
- Kroger, J. (1988). A longitudinal study of ego identity status interview domains. *Journal of Adolescence*, 11, 49-64.
- Kroger, J. (1989). *Identity in adolescence: The balance between self and other*. London: Routledge.
- Kroger, J. (1996). Identity, regression and development. *Journal of Adolescence*, 19, 203-222.
- Kroger, J. (1997). Gender and identity: The intersection of structure, content, and context. *Sex Roles*, 36, 747-770.
- Kroger, J. (2000). *Identity development: Adolescence through adulthood*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Kroger, J., & Green, K. E. (1996). Events associated with identity status change. *Journal of Adolescence*, 19, 477-490.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Marcia, J. E. (1993). The status of the statuses: Research review. In J. E. Marcia, A. S. Waterman, D. R. Matteson, S. L. Archer, & J. L. Orlofsky (Eds.), *Ego identity: A handbook for psychosocial research* (pp.22-41). New York: Springer-Verlag.
- Marcia, J. E., & Archer, S. L. (1993). Identity Status Interview: Late adolescent college form. In J. E. Marcia, A. S. Waterman, D. R. Matteson, S. L. Archer, & J. L. Orlofsky (Eds.), *Ego identity: A handbook for psychosocial research* (pp.303-317). New York: Springer-Verlag.
- 守屋慶子. (1982). *心・からだ・ことば*. 京都：ミネルヴァ書房.
- 無藤清子. (1979). 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性. *教育心理学研究*, 27, 178-187.
- Noam, G. G., & Fischer, K. W. (1996). Introduction: The foundational role of relationships in human development. In G. G. Noam, & K. W. Fischer (Eds.), *Development and vulnerability in close relationships* (pp.ix-xx). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 落合良行・佐藤有耕. (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化. *教育心理学研究*, 44, 55-65.
- 大野 久. (1999). 人を恋するということ. 佐藤有耕 (編), *高校生の心理：1 広がる世界* (pp.70-95). 東京：大日本図書.
- Phinney, J. S., & Goossens, L. (1996). Identity development in context. *Journal of Adolescence*, 19, 401-403.
- Schultz, L. H., Yeates, K. O., & Selman, R. L. (1989). *The interpersonal negotiation strategies interview manual*. Unpublished manuscript.
- Selman, R. L., & Demorest, A. P. (1984). Observing troubled children's interpersonal negotiation strategies: Implications of and for a developmental model. *Child Development*, 55, 288-304.
- Selman, R. L., Beardslee, W., Schultz, L. H., Krupa, M., & Podorefsky, D. (1986). Assessing adolescent interpersonal negotiation strategies: Toward the integration of structural and functional models. *Developmental Psychology*, 22, 450-459.
- 下山晴彦. (1983). 高校生の人格発達状況と進路決定との関連性についての一研究. *教育心理学研究*, 31, 157-162.
- 下山晴彦. (1986). 大学生の職業未決定の研究. *教育心理学研究*, 34, 20-30.
- 下山晴彦. (1996). スチューデント・アパシー研究の展望. *教育心理学研究*, 44, 350-363.
- Skoe, E. E. (1998). The ethic of care: Issues in moral

development. In E. E. Skoe, & A. L. von der Lippe (Eds.), *Personality development in adolescence: A cross national and life span perspective* (pp.143-171). London: Routledge.

Sugimura, K. (1997). A preliminary study on identity exploration among female adolescents from a viewpoint of relatedness. *愛知学泉大学研究論集*, 32, 305-313.

杉村和美. (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し. *発達心理学研究*, 9, 45-55.

杉村和美. (1999). 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達. 岡本祐子 (編), *女性の生涯発達とアイデンティティ：個としての発達・かかわりの中での成熟* (pp.55-86). 京都：北大路書房.

Sugimura, K. (2001). A preliminary study of proposed levels of relatedness in identity exploration among female late adolescents in Japan. *Psychological Reports*, 88, 749-758.

高村和代. (1997). 進路探求とアイデンティティ探求の相互関連プロセスについて：新しいアイデンティティプロセスモデルの提案. *名古屋大学教育学部紀要 (心理学)*, 44, 177-189.

浦上昌則. (1996). 就職活動を通しての自己成長：女子短大生の場合. *教育心理学研究*, 44, 400-409.

若松素子. (1998). 女性の仕事・ライフコースと大学. *発達*, 76, 41-49. 京都：ミネルヴァ書房.

Waterman, A. S. (1993). Developmental perspectives on identity formation: From adolescence to adulthood. In J. E. Marcia, A. S. Waterman, D. R. Matteson, S. L. Archer, & J. L. Orlofsky (Eds.), *Ego identity: A handbook for psychosocial research* (pp.42-68). New York: Springer-Verlag.

山本里花. (1988). 女子学生の自我同一性に関する研究：自我の二指向性の観点から. *教育心理学研究*, 36, 238-248.

ださい、その時あなたは何と言ったのですか；あなたはその時、なぜそうしたのですか。

・どんな人や体験があなたの将来の計画に主な影響を与えましたか；{その人(たち)は、あなたが職業を決めていくうえで、どのような役割を果たしていると思いますか；彼らの存在は、あなたが職業を決めていくうえでどのような意味を持っていますか}2)。

・ご両親との間で職業について意見が食い違ったことはありますか。どんなふうに。この意見の不一致は何らかの形で解決されましたか。どのように。(相互調整)。

友情

・友達とはこういうものではなくてはいけない、という大切なものは何ですか。

・友達とはどのようなものか、あるいはどのようにあるべきかというあなたの考えは以前、例えば、中学生の時と同じですか。どのように。変化したのはいつ頃ですか。この問題をどのように解決したのか教えてください。その時、どんな人や体験が考え方の変化に影響を与えましたか；(機能)。(相互調整)。

・あなたは今までにご両親が賛成しないような友達関係を始めたり続けたりしたことがありますか。この意見の不一致は何らかの形で解決されましたか。どのように。(相互調整)。

デート

・あなたはデートの相手に何を求めますか。あなたがこのように考えるようになったのには、どんな人や体験が影響を与えましたか；(機能)。(相互調整)。

・デートの相手がどのような性質を持っていたら嫌ですか。あなたがこのように考えるようになったのには、どんな人や体験が影響を与えましたか；(機能)。(相互調整)。

・ご両親は、今まであなたがデートした相手にがっかりしたことがありますか。なぜですか。この意見の食い違いは何らかの方法で解決されましたか。どのように。(相互調整)。

役割

・結婚した夫婦においては、だれが小さな子どもを世話すべきですか；だれが金銭的な面で家族を養うべきで

付 録 1

面接項目 (概要)

職業

- ・将来の職業についてはどのように考えていますか。
- ・ になろうということを、どのようにして決めましたか。[探求の過程で、自己と他者の視点の間に食い違いや相互調整が確認された場合:] その人との意見の食い違いやあなたの迷いの内容について、もう少し説明してください；どのようにその問題を解決しましたか；その人との具体的なやりとりの例を挙げてく

1) 自己と他者の相互調整をとらえる一連の項目。各領域での選択をめぐり、自己と他者の間で意見・欲求の不一致・対立、自己の欲求・関心と他者からの期待の間のずれなどが確認された場合に用いられた。全領域でほぼ同様の形式で質問したので、以下「相互調整」と略記した。

2) 探求のプロセスに関与した他者と彼らの機能を特定する一連の項目。他者の機能をとらえるための{ }部分は、全領域でほぼ同様の形式で質問したので、以下「機能」と略記した。

すか；自動車や家を買うといった主な決定はどのようになされるべきですか。

- ・ご両親は、私たちが今話し合ってきた家族の責任をどのようにこなしていますか。この問題についてご両親と意見が食い違ったり、ご両親に反発したことはありますか。いつですか。なぜですか。この意見の食い違いは何らかの方法で解決されましたか。どのように。(相互調整)。
- ・これまで話し合ってきたような男性と女性の役割について、あなたはこれまでに疑問を感じたことがありますか。いつですか。どのようなことを疑問に思ったのですか。この問題をどのように解決したのか教えてください。この問題を考えるうえで、どんな人や体験が影響を与えましたか；(機能)。(相互調整)。

付 録 2

関係性の6つの下位レベルの定義(概要)

低レベル

レベル1：重要な人生の選択・決定のプロセスにおいて、関係性をまったく持たない。

レベル2：重要な人生の選択・決定のプロセスにおいて、関係性が乏しい。

レベル3：重要な人生の選択・決定が、他者の影響によって行われている。

高レベル

レベル4：重要な人生の選択・決定のプロセスにおいて、関係性を十分に持つ。自己と他者の視点の間の食い違いや、それを解決するための自己と他者の間の相互調整は見られない。

レベル5：重要な人生の選択・決定のプロセスにおいて、自己と他者の視点の間の食い違いを体験している。この食い違いはまだ解決されていないにもかかわらず、自己と他者の間の相互調整を行っていない。

レベル6：重要な人生の選択・決定のプロセスにおいて、自己と他者の視点の間の食い違いを体験し、両者の間の相互調整を通して解決している。具体的には、両方の視点を統合したり、どちらか一方を選択する。

付記

本研究の一部は、平成10-11年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)(課題番号 10710069)の助成を受けた。

本研究を進めるにあたりご指導を賜りました蔭山英順教授と久世敏雄教授に深く感謝いたします。長峰伸治先生、小塩真司氏、北川喜子氏、野崎あゆみ氏には研究を補助していただいたことを、若松養亮先生、浦上昌則先生、高村和代先生、杉村伸一郎氏、そして査読者の先生方には有益な助言をいただいたことをお礼申し上げます。最後に、調査に参加してくださった対象者の皆さんに謝意を表します。

Sugimura, Kazumi (Faculty of Humanics, Otomon Gakuin University). *A Longitudinal Study of Relatedness in Identity Formation of Female Adolescents*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2001, Vol.12, No.2, 87-98.

This longitudinal study examined changes of relatedness levels in identity exploration and identified the factors associated with changes in relatedness levels among female adolescents. The expanded Ego Identity Interview, which covered four domains of occupation, friendships, dating, and sex roles, was administered to female university students ($N=31$) three times: the first semester as juniors and seniors, and the final semester as seniors. Significant progression to the higher relatedness level was observed in three domains, but sex roles levels changed slightly more often to the lower level than to the higher level. The main factors that precipitated changes were "job seeking/career decision", which was the most common predictor of the movement to both higher and lower levels, and "changes in relationships with friends/dates", which was remarkably found in the movement to the higher level. The results supported the recent tendency in theory to emphasize relational aspects of identity, and provided evidence that identity formation is indeed associated with relatedness.

【 Key Words 】 Identity formation, Relatedness, Females, Adolescence, Longitudinal study

中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連： 父母評定の一致度からの検討

平山 聡子

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

本研究では中学生の精神的健康が、父親の家庭関与についての父母評定の一致度とどのように関連しているかを検討した。中学1・2・3年生の家族161組を対象とし、中学生の精神的健康（神経症傾向・怒り・非協調性）については中学生が、父親の家庭関与については父親と母親が評定した。中学生の精神的健康と父親の家庭関与との相関を算出したところ、男子では神経症傾向・怒り・非協調性全てが、母親の評定した父親の家庭関与と相関を示した。一方女子では神経症傾向が父母評定ともに父親の家庭関与と相関を示していた。次に父母評定の一致度により4群（父母ともに父親の家庭関与を高く評定した一致群、父母ともに低く評定した一致群、父親は高く母親は低く評定した不一致群、父親は低く母親は高く評定した不一致群）を設定し、一元配置の分散分析を行った。その結果、父母ともに一致して父親の家庭関与を高く評価している時に中学生の神経症傾向が最も低かった。中学生の神経症傾向が最も高くなるのは、父親が自分の家庭関与を高く自己評価している一方で母親は低く評定している不一致群であった。父親が自分の関与の低さを自覚している時以上に母親のストレスが溜まり、それが中学生に伝わると推察される。また、過去に父親の家庭関与が高くても、現在の関与は低いと母親が見なしている場合にはかえって中学生の神経症傾向が高い結果が得られた。過去も現在も一貫して父親が家庭に関与することが中学生の精神的健康にとっては望ましいと考えられる。

【キーワード】親子関係, 中学生, 精神的健康, 人格発達, 父親

問 題

従来の家族研究は、圧倒的に母子関係に関するものが多く、父親に焦点を当てた研究は数少ない。また、父親を取り上げている場合でも、「両親」として母親とひとまとめに扱っている研究が大半である（牧野・中野・柏木, 1996）。それは、母性や母親への愛着といった観念により、母親が子どもに与える影響の大きさが注目されてきたためであると言える（Shulman, & Seiffge-Krenke, 1997）。しかし、核家族化や女性の社会進出など近年の時代的变化により、母子密着、父親不在の悪影響が指摘されており（柏木, 1993）、父親の家庭関与の重要性が増していることは否めない。父親の家庭関与とは、子どもや妻、家族全体に対する絆を父親が深めようとする行動を指す。長い間、仕事をして家を経済的に支えるのは父親、家事や育児など家を守るのは母親という役割が定着してきたが、今や従来の役割構造の変化が余儀なくされていると言えよう。そうした父親の役割の変化が子どもたちにどのような影響を持つのかについて研究することには意義があると思われる。ここ20年間でもようやく子どもの発達における父親の役割が注目されてきている（Shulman, & Seiffge-Krenke, 1997）。

これまでの父親に関する研究を大別すると、子どもから見た父親像に関するもの（深谷, 1990; Shek, 1995; 小

野寺, 1984等）、父親の育児参加の実態に関するもの（Parke, 1995; 土谷, 1992; 加藤, 1992; 福丸・無藤・飯長; 1999等）、父親自身の成長・発達に関するもの（柏木・若松, 1994; 小野寺・青木・小山, 1998; 福丸, 1997等）、父親の家庭不在に関するもの（Beaty, 1995; Munsch, Woodward, & Darling, 1995; Bereczkei, & Csanaky, 1996; Kurtz, Bunnell, & Nagler, 1993等）、父親の養育態度と子どもの様々な特性との関連に関するもの、例えば幼児の社会生活能力（尾形, 1995）や臨床的問題（DeKlyen, Biernbaum, Speltz, & Greenberg, 1998）、青年の適応（Schultheiss, & Blustein, 1994）、アイデンティティ（Bhushan, & Shirali, 1992）、向上心（Marjoribanks, 1997）、性役割観（伊藤, 1980）、娘の人格発達（三宅, 1993）、学校適応感（谷井・上地, 1994）などとの関連にまとめることができた。しかし、これらの研究を見ていくと、青年期前期にあたる中学生の精神的健康との関連について研究が少ないように思われる。

他の年齢の子どもと比べ、青年期の親子関係の研究が出てきたのはつい最近のことであり（Holmbeck, Paikoff, & Brooks-Gunn, 1995）、その中でも、多くが回答を得やすい大学生に焦点を当てていると言う（Paikoff, & Brooks-Gunn, 1991）。Shulman, & Seiffge-Krenke (1997)の調べによると、1984年から1991年までの間に出版された親と青年の精神病理に関する文献は577件を超え、

そのうち母親のみを扱ったものが48%、父親と母親を別々に分析したものが26%、父母を「両親」と一括して扱ったものが25%、そして父親のみを扱ったものは1%にすぎなかったという。けれどもTannenbaum, & Forehand (1994)は母親が鬱状態の場合、青年もその影響を受けて鬱状態になりやすいことを指摘した上で、父子関係が良いと青年に対する母親の鬱状態の影響を防ぐことができるとしており、青年の精神的健康に対する父親の関与の重要性がうかがえる。中学生は男女とも40%近くが何らかの神経症的サインを持っており、30%は心理的な葛藤を抱き、対人関係に悩んだり緊張状態にあって非社会性に陥っていることを認めている(作田・猪股, 1985)ことを考えると、臨床例だけでなく一般の中学生においても父親の果たす役割は大きいと思われる。

そこで本研究では中学生の精神的健康と父親の家庭関与との関連について検証していきたい。父親の関わりを測る尺度に関して、従来の研究では育児参加に関するものや青年への関わりについて母親と同じ次元で父親を測っているものが多いため(Shulman, & Seiffge-Krenke, 1997)、新たに父親の家庭関与尺度を作成する。また、親子関係と子どもの要因との関連を調べる際には特に性別要因が重要である(Russell, & Saebel, 1997)ことから、中学生の性別によって、精神的健康と父親の家庭関与との関連の仕方がどのように異なるかについても検討する。そして、以下の2つの視点から研究を行っていく。

まず第1点目として、評定者を誰にするかという問題を考慮すべきと思われる。多くの研究では子どもが評定者であるものが大半を占めており、親が評定している場合でも母親が多く、父親自身が回答している研究は少ない(牧野ほか, 1996)。更に父親と母親の認知を比較した研究はほとんど見られない。Shwalb, Kawai, Shoji, & Tsunetsugu (1997)は、平均年齢4.4歳の就学前の子どもをもつ中流階級の日本の父親について調査を行っているが、その際、父親と母親双方に父親の役割等について質問している。母親にも評定させている理由として彼らは、父親の自己評定を確認するため、そして妻が夫の変化を最もよく把握していると思われるため、と述べている。牧野・中西(1985)も、父親の家事育児についての分担意識や参加状況を母親自身が好意的に受け止めていると母親の育児不安が低いことを示している。これらのことから、中学生の精神的健康と父親の家庭関与との関連をより正確につかむためには、父親の家庭関与に関して、父親本人だけでなく母親にも問う必要があると思われる。更に、これまでの研究で特に注目されてこなかった「父親と母親の認知の不一致」という要因も重要であると考えられる。Johnson, Shulman, & Collins (1991)は、両親の養育態度が不一致である場合(すなわち一方

は権威的・拒否的な養育態度を示し、他方は受容的・奨励的な養育態度を示す場合)に、両親の養育態度が一致している場合と比べて青年の自尊心が最も低かったという。両親のきょうだいに対する異なる扱い方についての実証研究(Kowal, & Kramer, 1997; McHale, Crouter, McGuire, & Updegraff, 1995)では、一方の親がきょうだいを平等に扱うのに対し、他方の親はきょうだいの一方を差別的に扱うという家庭の場合、両親が自らの結婚を否定的に捉えていたという。すなわち、父親と母親の間で養育態度が一致していない場合に、そこには父母間の葛藤や問題が存在し、青年の精神的健康とマイナスの関連を見せることが示唆されている。これらはみな、両親の養育態度の違いについての研究であるが、父親の家庭関与という同じ事象に対して父親と母親で評価が異なる場合についても調べていく必要があるだろう。尾形・宮下(1999)も、父親の家庭での協力についての研究の中で、今後の課題として父親と母親の認知のズレを考慮し、母親が父親の協力的な関わりをどのように受け止めているかという視点から検討することの必要性を述べている。

第2点目として、過去における父親の家庭関与のあり方と現在の関与との違いについて注目したい。父親の育児参加が家族に与えるよい影響として牧野ほか(1996)は、子どもとの親密度が高まること、父親としての有能感が高まること、子育てへの肯定的態度・親としての満足度が高まること、母親の育児不安やストレスが軽減し、母親がより望ましい育児態度をもつこと、子どもの情緒・社会性の発達を母親と違った側面で促進するといったことを挙げている。また、父親との遊びを通して子どもは情緒の制御を学んでいくこと(Parke, 1995)や、父親が育児に関与するほど幼児の社会生活能力は高くなる(尾形, 1995)といった指摘もある。しかし、父親の育児参加がその後の子どもに与える長期的影響については調べられていない。牧野ほか(1996)が指摘するように、子どもが中学生になる頃には、父親自身も社会的責任を負わされる立場に置かれ、必ずしも子どもが小さい時のように家庭に関与することが難しくなる。そのため、現在と過去では父親の家庭関与のあり方が異なる可能性が推察される。現在だけでなく過去における父親の家庭関与の高さは、現在の中学生の精神的健康に関連を持つのだろうか。

目 的

以上より、本研究では中学生の家族を対象に調査を実施し、(1)父親の家庭関与尺度の作成、(2)中学生の精神的健康と父親の家庭関与との相関を父母評定別に検討すること、(3)中学生の精神的健康と父母評定の一致度及び、過去と現在の父親家庭関与の一致度との関連につ

いて検討することを目的とする。

仮 説

仮説Ⅰ：青年の鬱状態や行為障害 (Tannenbaum, & Forehand, 1994), 非行 (Shulman, & Seiffge-Krenke, 1997) などが父子関係の良さによって良好になるという関連が見出されていることから, 中学生の精神的健康は父親の家庭関与度が高いほど良好になるという関連を持つことが予想される。

仮説Ⅱ：母親は子どもを男女平等に扱う傾向があるのに対し, 父親は娘に対しては甘く, 優しく扱う傾向があるという (Shulman, & Seiffge-Krenke, 1997)。このように父親の関わりの質が男女によって異なれば, 子どもに与える影響も男女によって異なることが考えられる。息子は父親との同一視によって良くも悪くも影響を受けるが, 娘の場合は父親の女性的な面に関してのみ影響を受けるという (Shulman, & Seiffge-Krenke, 1997)。従って, 中学生の精神的健康と父親の家庭関与との関連には性差が見られることが予想される。

仮説Ⅲ：父親の家族システム機能認知は青年の抑うつ感にあまり影響しないのに対し (西出・夏野, 1997), 母親からの報告は父親を捉える上で有効である (Shwalb et al., 1997) ことから, 母親が評定した父親の家庭関与の方が中学生の精神的健康との関連が強いのではないだろうか。

仮説Ⅳ：父親と母親の養育態度が不一致であった場合に青年の自尊心が最も低かったとの報告 (Johnson et al., 1991) や, きょうだいに対する扱い方が父母間で異なる家庭では夫婦関係の問題が見られた (Kowal, & Kramer, 1997; McHale et al., 1995) とのことから, 父母間で養育態度の不一致が青年や家族の問題と関連することが示唆されている。従って, 父親の家庭関与について父親と母親の評定が不一致であった場合にも, 中学生の精神的健康とマイナスに関連することが予想される。

仮説Ⅴ：夫婦関係の満足度がその時点だけでなく6年後の青年の適応との関連も示すことから (Feldman, Fisher, & Seitel, 1997), 過去から現在にかけて父親が家庭によく関与していることが中学生の精神的健康と関連するのではないか。

方 法

調査対象 埼玉県Y中学校1・2・3年生の父親・母親・中学生161家族 (男子中学生77組, 女子中学生84組)。中学生の平均年齢=13.98歳 (12-15歳, SD=.87)。学年は, 1年生が52名, 2年生が52名, 3年生が57名。父親の年齢は, 30代15名, 40代115名, 50代29名, その他2名, 母親の年齢は, 30代35名, 40代115名, 50代9名, その他2名であった。父親の職業は, 公務員30名, 会社

員97名, 自営業29名, その他5名, 母親の職業は, 公務員7名, 会社員11名, 自営業13名, パート勤務64名, 専業主婦58名, その他8名であった。

手続き Y中学校の教育相談担当教師を通し, 各学年の生徒に質問紙 (中学生用・父母用) を配布した。生徒には自宅に質問紙を持ちかえり, 記入後学校へ提出してもらうという形式を取った。質問紙の配布数は321部, そのうち回収できた質問紙は225部 (回収率70.1%), 父親・母親・中学生3者の回答が全て揃っているものは195部 (回収率60.7%) であった。各組のうち, ひとつでも欠損値のあるデータを除いたところ, 最終的に本研究にて使用できたのは161部 (有効回答率82.6%) であった。調査時期は1998年2~3月であった。

測定尺度

(1) **父親の家庭関与尺度** 「家庭関与」といっても実際には仕事が忙しくて家族と一緒に過ごす時間がなかなかとれない父親は多いと思われる。しかし, 父親が家族と接する時間の長さよりも, むしろ家族との絆を大切に, 家族と関わろうとする意識の方が重要であるとの指摘 (加藤, 1992) もある。そこで, 今回は父親の家庭関与尺度として, 家族に関わろうとする意識的な行動に焦点を当てた尺度を作成することにした。また, 父親が母親に情緒的な支援と育児や家事労働など物理的な支援を十分に与えている場合, 母親は安定した母親役割を果たすことができ, 子どもにとってもプラスである (濱田, 1995) ことから, 父親の家庭関与は父子の二者関係だけでなく, 家族全体や母親に対しての関わりも含まれると考えられる。その上で, 今回は過去の父親の関わりとの比較も目的であるため, 子どもが小さい時 (0歳から6歳) と, 中学生の時と双方に共通して用いることのできる項目を考えた。これらの考えに基づき, 父親の家庭関与の定義を前述の通り, 「子どもや妻, 家族全体に対する絆を父親が深めようとする行動」とした。

まず項目を作成するにあたり, 予備調査として大学生・大学院生14名に「中学生の頃, 父親が家族とどのような関わりを持つことが出来るか」を回想法で自由記述にて回答してもらった。また, 斎藤 (1996) の「第3章: 家庭において求められている父親の存在感とは」や「第6章: いま父親は子どもにどう対処すればいいのか」の中の文章も参考にした。そして, 家庭関与の定義に従い項目を整理した。そのため, 項目内容は父親が家族と接触を持つ, コミュニケーションをとるなど父親の家族や子どもに対する直接的な関わりばかりでなく, 夫婦関係や家事労働の分担なども含んで構成されている。全20項目を「いつもそう」から「全くない」の5段階評定にて父親と母親が回答した。過去 (子どもが0歳~6歳の頃) の父親家庭関与についても回想法にて評定した。

(2) **精神的健康** 今回は中学生の精神的健康の指標と

して「神経症傾向」「怒り」「非協調性」の3つの尺度を取り上げた。近年、中学生の多くが何らかの神経症的サインを持っている(作田・猪股, 1985)こと、父親の敵意ある行動と中学生女子の怒りやすさが関連すること(Ge, Conger, & Elder, 1996)、及び、最近の中学生は腹を立て突発的に暴力を振るうという「キレる」状態になりやすいこと、また最近の青年たちの特徴として、「人との関係の取り方がわからない」「人と共感する能力が失われてきている」といった指摘もあること(斎藤, 1996)から、いずれの3尺度も近年の中学生の精神的健康を捉える上で最も適切であると考えた。

神経症傾向の尺度: CMI (Cornell Medical Index-Health Questionnaire) 日大変法(桂, 1991)の一部を使用した。CMIは身体的自覚症状、精神的自覚症状からなる全195項目より成り立っており、精神的自覚症状のうち、特に9項目が神経症の判別方法として用いられている。9項目あるうち、神経症の既往、精神病院入院既往、家族精神病院入院既往に関する3項目は、一般の中学生に対する質問項目として適切ではないと判断し、省いた。そのため残りの6項目(憂うつ、希望の無さ、自殺傾向、易怒性、強迫観念、理由のないおびえ)を採用した。以後、この6項目を「神経症傾向」と呼ぶ(付表1)。

怒りの尺度: CMI健康調査表の精神的自覚症状の「怒り」尺度(9項目)。全項目のうち、「よく考えてから物事をするのでなく、いきなり思いつきでやる方だ」という項目は、今回行った主成分分析にて因子負荷量が低く(0.062)、直接的に「怒り」を表している内容ではないと思われたため、この項目を省いて8項目を採用した(付表2)。

非協調性の尺度: Y-G性格テストの「協調性」尺度(10項目)。この尺度は社会的不適応の指標ともいわれており(桂, 1991)、他者への不信や協調性のなさを表している。なお、「スパイのような人がたくさんいる」という項目はスパイという言葉が不適切であるとの中学校側の指摘により、「私の秘密を探ろうとする人がたくさんいる」と変更した(付表3)。

評定の際には「神経症傾向」「怒り」「非協調性」の3尺度の項目を全てランダムに並べ、「あてはまる」から「あてはまらない」の5段階評定にて中学生が回答した。また、評定の平均得点を3尺度それぞれの指標とした。

結 果

1. 父親の家庭関与の主成分分析

父親の家庭関与と項目の記述統計量(平均値・標準偏差・最小値・最大値)を算出し、平均値±標準偏差が回答選択肢の上限または下限を超えた4項目を除外した後、現在および過去における父親の家庭関与について父親評定、母親評定別に主成分分析を行った。本研究では

付表1 神経症傾向を測定する項目

何か恐ろしい考えがいつも頭に浮かんでくる
いつも不幸で憂鬱である
人生は全く希望がないように思われる
いっそ死んでしまっただけ世の中のゴタゴタから離れたい
と思うことがよくある
よく何の理由もなく急におびえたりする
すぐかあつとなったり、いらいらしたりする

付表2 怒りを測定する項目

すぐかあつとなったり、いらいらしたりする
ちょっとした事がかんにさわって腹が立つ
ひどく腹を立てることがよくある
人の言動が気にさわっていらいらすることがよくある
自分のほしいものがすぐ手に入らなかつたり、物事がす
ぐ自分の思うようにならないと、かあつとなつて怒る
たえず用心して心を落ち着けていないととりみだす
人から指図されると腹が立つ
友達にも気を許さないたちである

付表3 非協調性を測定する項目

不満が多い
人の親切には下心がありそうで不安である
人は結局利欲のために働くのだと思う
人は私を十分認めてくれない
親友でも本当に信用することはできない
たびたび人の気持ちを確かめてみたい
私の秘密を探ろうとする人がたくさんいる
自分はいつも運が悪い
世の中の人は人のことなどかまわないと思う
人が見ていないとたいいてい人は怠けると思う

父親の家庭関与という構成概念の構造を見るのが目的ではなく、父親の家庭関与度に対する全体的な父母評定での一致度を測ることを目的として尺度を作成したため、第一主成分のみを抽出した(Table 1)。第1主成分と第2主成分との固有値の差は大きかった(3.50~4.79)。なお、信頼性係数(Cronbachの α 係数)は現在の父親家庭関与について父親評定が.89、母親評定が.89、過去の父親家庭関与について父親評定が.88、母親評定が.86であり、信頼性の高い尺度であることが示された。項目分析として各項目と全体の尺度得点との相関係数を求めたところ、父親評定現在で $r=.371\sim.682$ 、母親評定現在で $r=.362\sim.654$ 、父親評定過去で $r=.362\sim.604$ 、母親評定過去で $r=.345\sim.619$ と比較的安定しており、内的整合性が示された。次にGP分析を行うため、それぞれの尺度得点の上位25%、下位25%を上位群、下位群として分け、 t 検定を行った。その結果、父親評定現在・過去、母親評定現在・過去それぞれ16項目全てに0.1%水準で

Table 1 父母評定による父親の家庭関与尺度主成分分析結果 (N=161)

項目	父親評定		母親評定	
	現在	過去	現在	過去
家族みんなで何かをしようとしたり、家族行事を行っている	.733	.670	.669	.635
仕事が進む時には、父親は子どもと付き合う	.719	.683	.705	.678
父親は子どもと、日常の社会現象や出来事、事件などを話題にする	.703	.562	.660	.558
夫婦でお互いを思いやっている	.685	.607	.693	.714
父親は子どもに自分の体験談を話す	.653	.630	.554	.426
父親は家族と過ごす時間を作っている	.649	.628	.722	.641
父親は夫婦の会話を大切にしている	.645	.605	.700	.695
夫婦でお互いの考え方を尊重している	.641	.610	.616	.599
父親はスポーツやアウトドアといったもので子どもと付き合う	.638	.675	.658	.644
父親は、家族と一緒に参加できる趣味を持っている	.633	.661	.560	.524
母親が悩んでいる時には父親が相談にのる	.625	.671	.646	.662
父親は子どもを大人の会話に交ぜてやる	.613	.533	.612	.539
家族で旅行に行く	.609	.614	.612	.617
父親は子どもに自分の仕事の話をする	.582	.570	.457	.388
父親は時間のある時には家事を手伝っている	.446	.515	.518	.509
母親のいない時には父親が代わりに家事をする	.412	.406	.408	.384
固有値	6.34	5.89	6.14	5.48
寄与率 (%)	39.64	36.80	38.39	34.22

有意差が見られ、尺度項目の弁別力が示された。また、各データを正規確率紙上にプロットしたところ、直線をあてはめることができた。したがって、得点分布はほぼ正規分布に従っていると判断した。

2. 中学生の精神的健康と父親の家庭関与との相関

まず、男女別に父親の家庭関与度と中学生の精神的健康との相関係数を算出した。その結果、男子の神経症傾向、怒り、非協調性全ての尺度において母親が評定した現在の父親家庭関与度と弱い負の相関が得られた。過去の父親家庭関与度に関しても母親評定にて男子の神経症

傾向、非協調性と弱い負の相関が見られた。一方、女子においては神経症傾向が、父親評定の現在の父親家庭関与度、母親評定の現在と過去の父親家庭関与度とそれぞれ弱い負の相関を示していた。

また、父親評定と母親評定は中程度の正の相関を示していた。同一評定者内の現在と過去における評定は強い正の相関を示していた。精神的健康の3尺度間はいずれも中程度から強い正の相関が見られた (Table 2)。

3. 父母評定の一致度と中学生の精神的健康

次に、父親評定と母親評定が一致している場合、ある

Table 2 男女別中学生の精神的健康と父親の家庭関与度との相関

	父親の家庭関与度				精神的健康		
	父親評定		母親評定		神経症傾向	怒り	非協調性
	現在	過去	現在	過去			
父親評定現在		.839**	.691**	.633**	-.086	-.077	-.123
父親評定過去	.744**		.603**	.679**	-.102	-.036	-.115
母親評定現在	.689**	.461**		.885**	-.330**	-.265*	-.287*
母親評定過去	.623**	.641**	.832**		-.313**	-.198	-.268*
神経症傾向	-.230*	-.153	-.287**	-.248*		.620**	.652**
怒り	-.119	-.058	-.082	-.007	.597**		.679**
非協調性	-.083	-.087	-.105	-.028	.674**	.726**	

注. 上段は男子、下段は女子の結果。

* $p < .05$, ** $p < .01$

いは不一致である場合における中学生の精神的健康度を検証する。父母評定の一緻度について、ここでは父親評定における父親の家庭関与度と、母親評定における父親の家庭関与度の平均値を基準にして、父母評定が共に高い、あるいは共に低いことを操作的に「一致」とみなす。従って、本研究では父親評定と母親評定の父親家庭関与度を独立に扱って2元配置の分散分析を行うのではなく、父母評定が共に高い一致群、父母評定が共に低い一致群、父親評定が高く母親評定が低い不一致群、父親評定が低く母親評定が高い不一致群の4群に分類し、1元配置の分散分析を行った。

まず現在の父親家庭関与について分析を行った結果、神経症傾向において群の効果が有意であった ($F(3, 160) = 5.73, p < .001$)。LSD法による多重比較の結果、父親評定が高く母親評定が低い不一致群が他の3群よりも高い神経症傾向の値を示した。また父母評定が共に高い一致群は父母評定が共に低い一致群よりも低い値を示した (Figure 1)。

過去の父親家庭関与について同じ分析を行ったところ、同様に神経症傾向において群の効果が有意であった ($F(3, 160) = 3.01, p < .05$)。LSD法による多重比較の結果、父母評定が共に高い一致群が父母評定共に低い一致群、及び父親評定が高く母親評定が低い不一致群よりも低い値を示した (Figure 2)。

4. 現在と過去の一致度と中学生の精神的健康

次に現在と過去の父親家庭関与についての評定の一緻度と中学生の精神的健康との関連を検討する。現在及び過去の父親の家庭関与度の平均値を基準にして、現在過去共に家庭関与が高い一致群、現在過去共に家庭関与が低い一致群、現在の関与が高く過去は低い不一致群、現

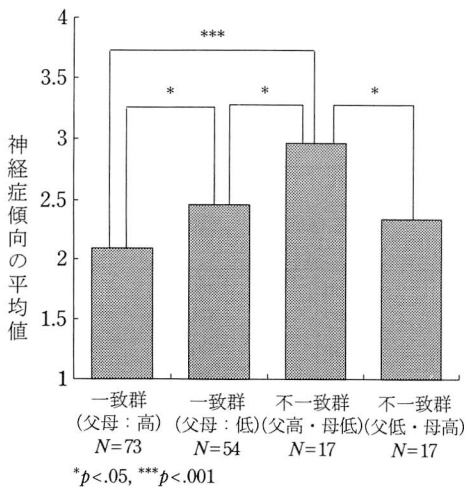


Figure 1 現在の父母評定一致不一致別中学生の神経症傾向平均値

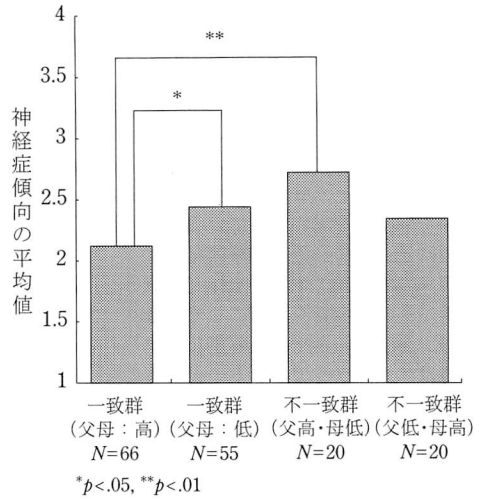


Figure 2 過去の父母評定一致不一致別中学生の神経症傾向平均値

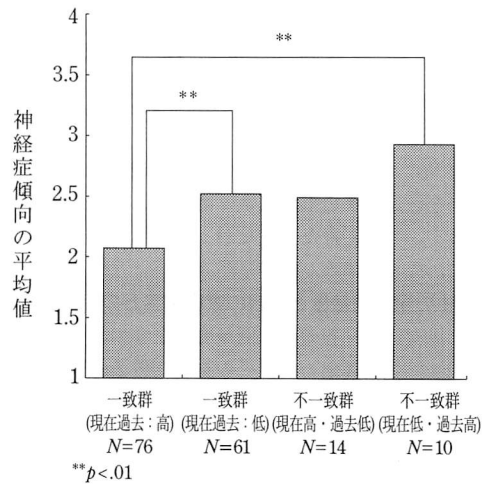


Figure 3 母親評定の現在と過去の一致不一致別中学生の神経症傾向平均値

在の関与が低く過去は高い不一致群の4群に分類し、1元配置の分散分析を行った。その結果、父親評定では有意な結果が得られなかったが、母親が評定した父親の家庭関与では神経症傾向において群の効果が有意であった ($F(3, 160) = 5.40, p < .001$)。LSD法による多重比較の結果、現在過去共に家庭関与が高い一致群が、現在過去共に家庭関与が低い一致群、及び現在の関与が低く過去は高い不一致群よりも有意に低い神経症傾向を示していた (Figure 3)。

考 察

1. 父親の家庭関与と中学生の精神的健康

まず、全体的に中学生の精神的健康（特に神経症傾向）は父親の家庭関与度が高いほど良好になるという関連が見出され、仮説Ⅰが支持された。高橋（1998）も、「中学生は、リーダーシップのモデルとしての父親に親和性を抱きながら自己同一性形成の過程を歩むことによって、精神的に安定するのではないかと」考察しており、中学生に対する父親の関与の重要性が示唆される。

男女別に分析を行ったところ、男子においては全ての精神的健康の尺度（神経症傾向、怒り、非協調性）と、母親が評定した父親の家庭関与度との間に負の相関が見られた。父親は男子に対して友人関係、ライバル関係にあり（宗内, 1989）、父息子関係が男子の対人関係形成に役立つ（Russell, & Saebel, 1997）ことから、人に対してキレル状態を表す「怒り」や、他者への不信や協調性のなさを表す「非協調性」といった対人関係面に関する問題が、より内面的な神経症傾向と並んで父親の家庭関与度との関連を示したのではないかとと思われる。一方、女子の神経症傾向は、母親評定だけでなく父親評定の父親家庭関与度と負の相関を示していた。女子は男子と比べ、父親自身の家庭に対する意識に敏感であり、そのため母親の認知と並んで父親の認知も女子の神経症傾向に関連したのではないかとと思われる。父親がちゃんと自分や家族のことを思ってくれているかどうかは、母親が父親の関与についてどう認知しているかと同様に女子にとって重要なことなのではないだろうか。このように、父親の家庭関与度に対する父母の認知と中学生の精神的健康との関連の仕方は性別によって異なることが示唆され、仮説Ⅱが支持されたと言えよう。

また、男女共に（特に男子において）父親の家庭関与についての母親の評定がより強い意味を持っていたことが指摘できる。父親が評定した夫婦関係の満足度よりも母親が評定したものの方が青年の適応をよりよく予測することが指摘されているが、（Feldman et al., 1997）今回の結果からも、全体的に母親評定の方が中学生の精神的健康との関連が強いことが明らかになり、仮説Ⅲが支持された。これは母親の方が父親の家庭関与について客観的な事実を評定しているため（Shwalb et al., 1997）のみならず、母親が父親をどう見ているかということが中学生に強く関連してくることを意味すると考えられる。過去の父親の家庭関与に対する母親の評価も同様に男子の神経症傾向や非協調性、女子の神経症傾向と相関を示したことから、母親にとっては、子どもが中学生になった現在も、子どもが小さい頃に父親がどれだけ家庭に関わっていたかということは重要であり、それが中学生に伝わると考えられる。父親は子どもに対し、母親を通し

ての間接的な影響力を持つ（Vogel, 1991）ことから、母親が父親の肯定的なイメージを中学生に伝えることが重要であると言えよう。特に日本の母子関係は密着していることが多くの研究（高橋, 1970；飛田, 1989等）から指摘されており、父子関係における媒介者としての母親の重要性が示唆される。

また、父親の家庭関与に関する母親の認知は父親自身の自己評定と相関が高く、母親の評定は父親の家庭関与度をかなり正確に反映していると思われる。

2. 父母評定の一致度と中学生の精神的健康

次に父母評定の一致度について考えてみたい。父親評定と母親評定が一致している場合（両方とも父親の家庭関与を高く評価している、あるいは低く評価している場合）と父親評定と母親評定が不一致である場合（父親が自身の家庭関与を高く評価しているのに対し、母親が低く評価している場合とその逆に父親が低く、母親が高く評価している場合）の4群の比較を行って見たところ、父親評定、母親評定ともに一致して父親の家庭関与を高く評価した群で最も中学生の神経症傾向が低いことが示された。Johnson et al. (1991)も述べているように、父母が一致して父親の家庭関与を良く評価していることが中学生の神経症傾向を低減させるのに重要であることが示唆される。そして、中学生の神経症傾向が最も高いのは、父親が自身の家庭関与を高いと自己評価しているのに対し、母親は逆に父親の関与を低く見ている場合であったことが示された。これは、父親評定、母親評定ともに一致して父親の家庭関与を低く評価している群よりも、中学生の神経症傾向が高いことを意味している。従来は、父親の家庭関与が高いほど子どもの精神発達も良く、逆に父親の家庭関与が低いほど子どもの精神発達は悪いといった一方向的な知見のみが取り上げられていたこと（Schultheiss, & Blustein, 1994; 尾形, 1995等）を考えると、この結果は大変興味深い。つまり、単に父親が家庭との関わりを持っているかどうかの程度だけが中学生の神経症傾向と関連しているわけではなく、むしろ父親の家庭関与に対する「父母認知の不一致」といった要因が最も重要なのである。このことから仮説Ⅳが支持されたと言えよう。

この不一致は父親に対する家庭関与の要求水準が父母で異なっていることから生じると考えられる。父親の家庭関与という同じ事象に対し、評定者によって評価が異なるのは、評定の基準がその人それぞれの主観によって異なるからに他ならない。父親の家庭関与について父親が高く母親が低く評定している場合、父親自身は十分に関与していると思こんでいるのだが、母親は父親の関与を十分とみなしていないというズレが生じていることが考えられる。本研究で行った自由記述からもこの群では父親と母親の考え方のズレを読み取ることができた。例

えばあるケースでは、父親は「父は子どもを中心として生活しているわけではない」との考え方を持っているが、母親は「自分の仕事と趣味中心の父親に苛立つこともある。妻の趣味や友人関係に関心がないのが不満」と述べていた。また、この父親は自分の趣味を家族と共有しようとしているのだが、それに対して子どもは「父親は自分の趣味に家族を巻き込む」と否定的に捉えている。このように、母親が父親に対し否定的なコメントをしていると、中学生も父親に対してネガティブに捉えていることが示唆された。つまり、父親が自分の関与を低いと自覚している時以上に母親のストレスが溜まり、それが中学生に伝わるのではないかと思われる。尾形・宮下(1999)も父親の家庭での協力、とりわけ夫婦間のコミュニケーションが母親の精神的ストレスを軽減させ、子どもの社会性の発達へも好影響を及ぼすとしており、父親の関与の背後に母親のストレスが介在している可能性が推察される。父親と母親で養育パターンが不一致である場合に青年に悪影響を及ぼす(Johnson et al., 1991; McHale et al., 1995)ことや、夫婦間の葛藤や不和が青年の不適応に結びつくということがこれまでの研究(Harold, Fincham, Osborne, & Conger, 1997; Harold, & Conger, 1997; King, Radpour, Naylor, Segal, & Jouriles, 1995)で示されていることから、今回の父母評定の不一致が中学生の神経症傾向につながるものが支持されよう。

また本研究では、父親の家庭関与は中学生の神経症傾向、怒り、非協調性全てと何かしらの関連を持っていたが、全体的に神経症傾向が父親の家庭関与と最も強く関連することが明らかになった。特に、父母評定の不一致との分析では中学生の神経症傾向のみと関連が見られていた。このような父母の不一致における母親の不満やストレスは、憂鬱感や不安、希望の無さなどの神経症傾向の性質に近いものではないかと推察される。母親が鬱状態の場合、青年も鬱状態になりやすいと言われる(Tannenbaum, & Forehand, 1994)。今回の結果も母親の状態を受けて中学生の神経症傾向に最も関連が見られたのではないだろうか。

しかし、単に父母評定の不一致が中学生の神経症傾向につながるわけではない。父母の不一致群でも父親の家庭関与について父親が低く母親が高く評定している場合には、中学生の神経症傾向とのつながりは見られなかった。この場合、父親は自分の関与を不十分であると捉えているが、母親は父親の関わりを十分だと感じていると考えられる。自由記述においても母親のコメントの中で「家族が協力して家のことをやっている」「普段は話し合う時間はないが、何か決定するときには父親のアドバイスを受けるようにしている」「わりと家族で話し合っている方だと思う」など肯定的な意見が見られた。そうい

う場合は父母評定が不一致であっても母親が肯定的なので中学生への悪影響は見られなかったと思われる。つまり、母親がどう認知するかということが中学生の神経症傾向と関連していると考えられる。

3. 現在と過去の一致度と中学生の精神的健康

現在の父親家庭関与だけでなく過去についても尋ねたところ、現在と過去の父親の関わりには父親評定、母親評定それぞれに高い相関が得られており、全体的に父親の家庭関与度は一貫している傾向がうかがえる。

現在の中学生の精神的健康との関連を見ると、母親が過去の父親家庭関与についてどう評価しているかということが関連してくることが明らかになった。現在と過去の父親家庭関与度の一致度からの検討によると、たとえば子どもが青年期に入った時点で父親が家庭によく関わっていたとしても、過去の関わりが薄ければ、中学生の神経症傾向は昔から家庭関与の低い父親の家庭ときほど変わらないと言える。しかも過去に父親の家庭関与が高くても、現在関与が低いと母親が見なしている場合にはかえって中学生の神経症傾向が高い結果が得られている。父親が評定した場合には関連が見られなかったことを考えあわせると、母親が父親に対して過去はあれだけ関わってくれたのに今は関わってくれていない、という母親の不満が中学生に悪影響を及ぼすと推察される。ここでも過去も現在も一貫して父親が家庭に関与することが中学生の神経症傾向の低減にとっては望ましいことが示されていると考えられ、仮説Vが支持された。子どもが幼少時期に父親が育児参加することの重要性を示す研究は多々あるが(牧野ほか, 1996; Parke, 1995)、継続することの重要性も見逃してはならないようだ。ただし今回は過去の父親家庭関与について回想法にて評定を行っている。そのため、現在の状況が過去の回想に影響を及ぼしている可能性は否定できない。過去の関与が中学生へ与える長期的影響を見るためには縦断的研究により確認する必要があるだろう。

4. 今後の課題

本研究では、子どもが幼少時から中学生にかけて一貫して用いることのできる尺度として父親の家庭関与と尺度を作成したが、今後、より多面的に父親の関与を捉えていくことが必要と考えられる。被検者数の関係上、検定力の低下(タイプIIエラーの可能性)が懸念されたため相関分析以外では性別毎の分析ができなかったが、父母評定の一致度と中学生の神経症傾向との関連も男女で異なる結果が得られることが予想され、今後被検者数を増やして性別毎の比較も行いたい。

いずれにせよ、今回の結果からは中学生の神経症傾向に象徴される精神的健康と父親の家庭関与との関連を見る際に、母親の評価が大きな意味を持つことが明らかになった。これは、家族関係を見る上で単に2者関係のみ

を扱うのではなく、家族成員の相互性に着目する家族システム論においても(岡堂, 1991; Goldenberg, & Goldenberg, 1996; Paikoff, & Brooks-Gunn, 1991) 役立つ視点となるのではないかとと思われる。父母評定の不一致がどのようなメカニズムに基づいて中学生の精神的健康に関連しているかについて解明していくことは今後の大きな課題としていきたい。

文 献

- Beaty, L. A. (1995). Effects of paternal absence on male adolescents' peer relations and self-image. *Adolescence*, 30, 873-880.
- Berezckei, T., & Csanaky, A. (1996). Evolutionary pathway of child development: Lifestyles of adolescents and adults from father-absent families. *Human Nature*, 7, 257-280.
- Bhushan, R., & Shirali, K. A. (1992). Family types and communication with parents: A comparison of youth at different identity levels. *Journal of Youth and Adolescence*, 21, 687-697.
- DeKlyen, M., Bierbaum, M.A., Speltz, M. L., & Greenberg, M. T. (1998). Fathers and preschool behavior problems. *Developmental Psychology*, 34, 264-275.
- Feldman, S. S., Fisher, L., & Seitel, L. (1997). The effect of parents' marital satisfaction on young adults' adaptation: A longitudinal study. *Journal of Research on Adolescence*, 7, 55-80.
- 深谷和子. (1990). 子どもの中の父親像・母親像: 二人親の時代へ. *児童心理*, 44 (12), 36-41.
- 福丸由佳. (1997). 子どもとの関わりと父親の発達 — 都市部と郡部の地域差の検討. *母子研究*, 18, 60-68.
- 福丸由佳・無藤 隆・飯長喜一郎. (1999). 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観, 子ども観: 父親の育児参加との関連. *発達心理学研究*, 10, 189-198.
- Ge, X., Conger, R. D., & Elder, G. H. Jr. (1996). Coming of age too early: Pubertal influences on girls' vulnerability to psychological distress. *Child Development*, 67, 3386-3400.
- Goldenberg, I., & Goldenberg, H. (1996). *Family therapy an overview* (4th ed.). Pacific Grove, California: Brooks/Cole Publishing Company.
- 濱田庸子. (1995). 乳幼児精神医学における父親研究. *精神療法: <特集> 現代の父親*, 21 (5), 439-444.
- Harold, G. T., & Conger, R. D. (1997). Marital conflict and adolescent distress: The role of adolescent awareness. *Child Development*, 68, 333-350.
- Harold, G.T., Fincham, F. D., Osborne, L. N., & Conger, R. D. (1997). Mom and dad are at it again: Adolescent perceptions of marital conflict and adolescent psychological distress. *Developmental Psychology*, 33, 333-350.
- 飛田 操. (1989). 親子関係における対人機能の交換と満足度との関連について — 女子青年を対象として. *家族心理学研究*, 3, 75-84.
- Holmbeck, G. N., Paikoff, R. L., & Brooks-Gunn, J. (1995). Parenting adolescents. In M.H. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting: Vol.1 Children and parenting* (pp.91-118). Mahwah, NJ.: Lawrence Erlbaum Associates.
- 伊藤裕子. (1980). 女子青年の性役割観と父母の養育態度 — 大学生の職経歴選択を中心に. *教育心理学研究*, 28, 67-71.
- Johnson, B. M., Shulman, S., & Collins, W. A. (1991). Systemic patterns of parenting as reported by adolescents: Developmental differences and implications for psychosocial outcomes. *Journal of Adolescent Research*, 6, 235-252.
- 柏木恵子. (編). (1993). 父親の発達心理学: 父性の現在とその周辺. 東京: 川島書店.
- 柏木恵子・若松素子. (1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, 5, 72-83.
- 加藤邦子. (1992). 父親の性意識と父子かかわりの関連について. *家庭教育研究所紀要*, 14, 117-123.
- 桂 戴作. (1991). やさしい心身症 (ストレス病) の診かた. 東京: チーム医療.
- King, C. A., Radpour, L., Naylor, M. W., Segal, H. G., & Jouriles, E. N. (1995). Parents' marital functioning and adolescent psychotherapy. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 63, 749-753.
- Kowal, A., & Kramer, L. (1997). Children's understanding of parental differential treatment. *Child Development*, 68, 113-126.
- Kurtz, C., Bunzell, M., & Nagler, S. (1993). Anxiety and autonomy in adolescence among father-orphaned kibbutz children. *Journal of Adolescence*, 16, 457-462.
- 牧野カツコ・中西雪夫. (1985). 乳幼児をもつ母親の育児不安: 父親の生活および意識との関連. *家庭教育研究所紀要*, 6, 11-24.
- 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子. (編). (1996). 子どもの発達と父親の役割. 京都: ミネルヴァ書房.
- Marjoribanks, K. (1997). Family contexts, immediate settings, and adolescents' aspirations. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 18, 119-132.
- McHale, S. M., Crouter, A. C., McGuire, S. A., & Updegraff, K. A. (1995). Congruence between mothers' and

- fathers' differential treatment of siblings: Links with family relations and children's well-being. *Child Development*, **66**, 116-128.
- 三宅裕子. (1993). 精神分析理論を通して見た「父-娘関係」の理解. 京都大学教育学部紀要, **39**, 336-346.
- 宗内 敦. (1989). 父の役割・母の役割 — 子どもにとっての親, 子どもにとっての父親. *児童心理*, **43** (12), 78-80.
- Munsch, J., Woodward, J., & Darling, N. (1995). Children's perceptions of their relationships with coresiding and non-custodial fathers. Special feature: Fathers and divorce. *Journal of Divorce and Remarriage*, **23** (1-2), 39-54.
- 西出隆紀・夏野良司. (1997). 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか. *教育心理学研究*, **45**, 456-463.
- 尾形和男. (1995). 父親の育児と幼児の社会生活能力 — 共働き家庭と専業主婦家庭の比較. *教育心理学研究*, **43**, 335-342.
- 尾形和男・宮下一博. (1999). 父親の協力的関わりと母親のストレス, 子どもの社会性発達および父親の成長. *家族心理学研究*, **13**, 87-102.
- 岡堂哲雄. (1991). *家族心理学講義*. 東京: 金子書房.
- 小野寺敦子. (1984) 娘からみた父親の魅力. *心理学研究*, **55**, 289-295.
- 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓. (1998). 父親になる意識の形成過程. *発達心理学研究*, **9**, 121-130.
- Paikoff, R. L., & Brooks-Gunn, J. (1991). Do parent-child relationships change during puberty?. *Psychological Bulletin*, **110**, 47-66.
- Parke, R. D. (1995). Fathers and families. In M. H. Bornstein(Ed.), *Handbook of parenting: Vol.3 Status and social condition of parenting* (pp.27-63). Mahwah, NJ.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Russell, A., & Saebel, J. (1997). Mother-son, mother-daughter, father-son, and father-daughter: Are they distinct relationships?. *Developmental Review*, **17**, 111-147.
- 斎藤茂太. (1996). *いま家族しか子どもを守れない*. 東京: KKベストセラーズ.
- 作田 勉・猪股丈二. (1985). *思春期対策*. 東京: 誠信書房.
- Schultheiss, D. E. P., & Blustein, D. L. (1994). Role of adolescent-parent relationships in college student development and adjustment. *Journal of Counseling Psychology*, **41**, 248-255.
- Shek, D. T. L. (1995). Chinese adolescents' perceptions of parenting styles of fathers and mothers. *Journal of Genetic Psychology*, **156**, 175-190.
- Shulman, S., & Seiffge-Krenke, I. (1997). *Fathers and adolescents: Developmental and clinical perspectives*. London & New York: Routledge.
- Shwalb, D. W., Kawai, H., Shoji, J., & Tsunetsugu, K. (1997). The middle class Japanese father: A survey of parents of preschoolers. *Journal of Applied Developmental Psychology*, **18**, 497-511.
- 高橋恵子. (1970). 依存性の発達の研究Ⅲ — 大学・高校生との比較における中学生女子の依存性. *教育心理学研究*, **18**, 1-11.
- 高橋直美. (1998). 両親間および親子間の関係と子どもの精神的健康との関連について. *家族心理学研究*, **12**, 109-123.
- 谷井淳一・上地安昭. (1994). 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係. *教育心理学研究*, **42**, 185-192.
- Tannenbaum, L., & Forehand, R. (1994). Maternal depressive mood: The role of the father in preventing adolescent problem behaviors. *Behaviour Research and Therapy*, **32**, 321-325.
- 土谷みち子. (1992). 父親の生活実態と父子かかわりについて. *家庭教育研究所紀要*, **14**, 108-116.
- Vogel, E. (Ed.). (1991). *Japan's new middle class* (3rd ed.). Berkeley, California: University of California Press.

付記

本論文は平成10年度お茶の水女子大学大学院修士論文として提出したものの一部を加筆、修正したものです。本論文の作成にあたり、ご指導いただきましたお茶の水女子大学の伊藤美奈子先生、無藤隆先生、楡木満生先生、上智大学助手 林真一郎氏に厚く御礼申し上げます。また、調査にご協力いただきました中学校の先生方、生徒の皆様とそのご両親に心より感謝いたします。

Hirayama, Satoko (Ochanomizu University, Doctoral Research Course in Human Culture). *Adolescent Mental Health and Father's Involvement in Families: The Incongruent Rating of Fathers and Mothers*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2001, Vol.12, No.2, 99-109.

The goals of this research were to investigate incongruent maternal and paternal ratings of father's involvement in family life, and to study whether such discrepancy was related to adolescent's mental health. Participants were 161 adolescents (7th-9th grades) and their fathers and mothers. Correlation analysis related adolescent mental health to maternal and paternal ratings on a Father's Involvement in the Family (FIF) scale. Mother's FIF ratings correlated with 3 indexes of adolescent boy's reported mental health; neurotic tendency, anger, and uncooperativeness. In addition, both paternal and maternal FIF ratings correlated with reports of girl's neurotic tendency. Analysis of variance was also performed on indexes of adolescent mental health. Adolescent neurotic tendency was low when both fathers and mothers rated paternal involvement as high. For adolescents who were rated high for neurotic tendency, mothers made low FIF ratings and fathers gave high FIF ratings. In this sense, incongruent mother and father FIF ratings were strongly associated with adolescent's neurotic tendency. Finally, when mothers reported that fathers were highly involved in the past but not involved in the present, their adolescents were highly neurotic.

[Key Words] Parenting, Adolescence, Mental health, Personality development, Fathering

2000. 4. 10 受稿, 2001. 2.19 受理

2～3歳時の子どもの存在/自己のありようを記述する試み： 主体間の両義的な力動的関係という観点から

石野 秀明

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

保育の場に関与しつつ縦断的に観察を行っているとき、子どもが2～3歳ともなれば、それ以前とはまた異なる独特の存在/自己のありようが浮き立ち、またそのようなものとして保育者と観察者の下に感じられるようになってくる。本稿では、子どもと保育者双方の心の動きにまで踏み込んで事例記述を行い、この時期の子どもの存在/自己のありようの内実を明らかにすることを目的とした。結果は以下の通りである。① 2～3歳児は「自立-依存」という一見逆向きの態度を表裏一体に抱え込み、それは、保育者の「導く-受け入れる」という両義的な対応に絡み合っただけで表面化する。② 保育者の対応も、子どもの「自己」の「押し出す-萎縮する」という両義的な出方と絡み合うかたちで紡ぎ出される。③ 2～3歳時の子どもに特有の存在/自己のありようの内実とは、この「子ども-保育者」の絡み合った力動的関係の中で、子どもが「一個の自己」として浮き立ち、保育者と観察者の下に感じられるその都度の具体的な様相に他ならない。以上の結果を踏まえ、自己関係の基本的構造として、「主体間の両義的な力動的関係」という枠組みを提示した。

【キー・ワード】 2～3歳児の自己, 保育者, 自己関係, 関与観察

問 題

保育の場に関与しつつ乳児期から縦断的に観察を行っているとき、子ども達が2～3歳ともなれば、それ以前とはまた異なる独特の「存在のありよう」、あるいは「自己のありよう」（以下、存在/自己のありよう）が浮き立ち、そのようなものとして保育者の下に感じられるようになってくる。それは子どもが「しっかりしてきた」「幼いながらも自分を強く押し出してくる」といった感じに要約できるものである。それに伴って、子どもと保育者、子ども同士の関係にそれまでにない難しさを感じる局面が多くなってくる。

では、このような保育の場での人間関係に根差した2～3歳時の子どもに特有の存在/自己のありようの内実とは、どのようなものであろうか。またそれを整合的に理解し記述するための理論的枠組みは、いかなるかたちで概念化されるべきであらうか。まずは、こうした問題意識を共有している先行研究の知見を取り上げて検討しよう。

1) 従来の見解：「自己意識の体制」としての子どもの「自己」

従来子どもの社会性の発達に注目した諸研究においては、子どもが2～3歳になると、周囲の他者の意向を顧みることなく「わがまま」や「反抗」と見なされるような振る舞いを多く示すようになることが指摘されている(e.g., 本郷, 1994)。反面、2～3歳児は、保育者や他の子ども達との関わりにおいて、意図やプランの共有、役割

の分化等、多様な自己理解、認識を交わし始めるようになることも知られている(e.g., Howes, Unger, & Seidner, 1989)。このような現象は、それまでの保育者への依存性を脱し、子どもがある程度の自立性を主張し始めるようになったこと、いわば2～3歳児が、それまでの自己未分化な共生的段階から、他者を意識し始め、同時にそれとは異なる自己を意識し始めるようになったことを示すものとして解釈されてきた(Braman, 1988; 柏木, 1994)。

上述のような2～3歳児の「自己」のありようを、その構造的特徴に注目し、より明確に示してきたのが、「自我二重性」という理論的枠組みに基づく諸研究である(e.g., 浜田, 1992: Figure 1参照)。それらは、近年の「心の理論」研究の観点を吟味し、それを乗り越えようとする志向をも示しつつ(木下, 1998; O'Neill, 1996; Sabagh, & Callanan, 1998)、1歳過ぎから2～3歳時に現れる様々な事象を取り上げ、子どもの「自己」のありようを詳細に記述しようとしている(麻生, 1985, 1992; 百合本, 1981)。

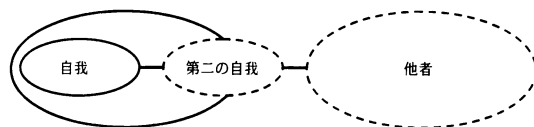


Figure 1 自我二重性モデル (Wallon (1963a, 1963b) の訳者浜田が作成した図を一部改変)

子どもは1歳を過ぎると、自分や他人の「名前」を使用するようになり、自らの「所有物」を巡るこだわりを他者に対して顕にするようになるが、これらは、子どもの自己の体制に、表象的・言語的次元が備わり、ある程度対象化された自己と他者についての意識や概念を獲得したことを示している。さらに、1歳半から2歳半ぐらいまでに観察される「一人二役的な会話」などの特徴的な現象は、それまでの現実の自他関係を表象的・言語的次元上に取り込み、<「自我」-「第二の自我=内的他者」>の内的関係を有する「自己意識の体制」を獲得しつつあることを示すものである。そして2～3歳頃からは、子どもと周囲の他者との関わりに難しさが感じられようになるが、それはこの時期の子どもの「自己意識」において「自我」が特権化したかたちで構成される一方で、他者を意識しつつもその働きかけを十分には受け止め得ないこと、すなわち「第二の自我=内的他者」が真の意味で形成されていないことに拠っている。こうした多分に葛藤を孕んだ段階を経て、子どもは現実の自他関係を安定したかたちで取り入れ、<「自我」-「第二の自我=内的他者」>の対話性に基づいて、多様な自我理解、認識を付度しつつ、自他関係を織りなすことが可能になってゆく。そして、このようにして成立し、生涯を通じて機能する「自己意識における内的関係」と「現実の自他関係」との二重性こそが、生活の場の間人間関係に根差した「自己、及び自他の基本構造」であるとされる(麻生, 1985, 1992; 浜田, 1992)。

まとめると、2～3歳時の子どもに特有の「自己」のありようは、「反抗」や「自立」といった言葉で端的に示されるように、他者を意識しつつも等身大に収まらない「自己意識」の拡大として、またそれが招く自他関係の葛藤を経て徐々に他者を受け止め、理解、あるいは認識を共有し合う「自己意識の体制」の獲得の様相として、記述されてきたものと言えよう。かくして2～3歳時は、このような自己意識の体制化過程の過渡的情況として解釈され、「自己主張期」と称されてきたのである(浜田, 1992)。

さて、この時期の子どもがこのような「自己」のありようを示すとき、それに関わる保育者もそれ以前と同じ対応ではいられない。それまでは保育者との一対一の関わりが基調をなすが、この時期になると子どもは周囲の他の子ども達とも頻繁に関わるようになる(Ellis, Rogoff, & Cromer, 1981)。多くの子ども達が集団生活を送る保育園で、各々の子どもが他者を顧みずに自己を主張すれば、当然諍いやトラブルが目立つことになり、それに対して、保育者は子ども達の関わりを促進、あるいは制限するかたちで調整的に働き掛けることが必要になる。こうしてこれまで、保育者の調整的活動の記述とその活動の有効性の検討がなされてきた(本郷・杉山・玉井, 1991; 鹿島, 1995, 1996; Russon, Waite, & Rochester,

1990)。先述のように、この時期の子どもは、保育者や他の子ども達と理解や認識を共有しあうかたちで関わるようになってくるが、それにはこのような保育者の「導き」が重要な役割を果たしている。そして、こうした共有経験を基盤として、子どもは認知・社会的な発達(社会化; socialization)を遂げるとされる(Rogoff, 1990)。

これまでの議論をまとめると、2～3歳時の子どもと保育者の関わり合いは、「自己主張」する子どもとそれを「調整」する保育者、さらにそれを「自己意識」に取り入れ、他者や広義の社会通念を受け止め理解、認識するようになる子ども、という構図が見出せる。つまり、この時期の子どもの「自己」のありようは、こうした子どもと保育者の関わりの中で、子どもが「自己意識」を体制化していく過程として記述されてきたのである。

2) 本稿の立場：子どもの存在/自己のありよう

従来の諸研究は「自己意識の体制」という観点から、子どもと保育者の関わり合いをも視野に入れつつ、2～3歳時の子どもの「自己」のありようについて、確かに興味深い知見を数多く導き出してきたと言える。そして、それらが少なからず、生活の場での人間関係に根差した子どもの「自己」のありようを記述すること、さらには自他関係一般について、その基本構造を概念化することを目指していることも周知の通りである。

しかし、それにも関わらず、保育の場に関与しつつ観察を行う中で感じられる2～3歳時の子どもに特有の存在/自己のありようを、この「自己意識の体制」という観点で果たして十分に掬い取ることができるだろうか。以下では、従来の見解に対して三つの問題点を指摘し、本稿の立場を明らかにしてゆこう。

第一に、Figure 1で示されるように、保育者を始めとする周囲他者との関係が射程に入れられつつも、子どもの「自己」の存在が「意識=主体内」に捉えられ、そこから分析が進められている点である。「意識」というものは、子どもの存在/自己が宿るところであり、それこそが子どもの「人となり」であると通常は理解されている。しかし、それがまさにその子どもの「人となり」として落ち着き、子どもがそのような存在/自己として立ち現れるかどうかは、保育者を始めとする周囲他者が、それをその都度どのように受け止め映し返すかに懸かっているのではないだろうか。

今一度保育の場での「感じ」に立ち返ると、子どもの存在/自己のありようは、子どもの示す様々な振る舞いや主体的な能力に基づいて浮き立つものであり、またそれ故に保育者にまさにそのようなものとして感じられるものである。さらに、その場に補助的保育者として関与している観察者にとっては、保育者と同じく子どもの下に感じられるものであると同時に、保育者に感じられたそれが、保育者の表情や時に吐露される思いに映し出さ

れ、そこから感じることでできるものでもある。そして子どもは、そのように保育者に感じられ映し出されたものを取り込むかたちで、その都度「一個の自己」として立ち現れ、さらに保育者との微妙な関係に巻き込まれてゆくことになる¹⁾。

このように、子どもの存在/自己のありようは、単なる子どもの生長の事実に還元されるものではないし、だからといって、保育者の思いの中のみ存するものでもない。それは、まさに「子ども-保育者」を一つの系とする主体間の力動的関係の中で、子どもの下に浮き立ち、保育者と観察者に感じられるものであろう。

第二に、従来の諸研究では、子どもの「自己意識の体制」が詳細に記述されてきたものの、保育者の経験の記述がほとんど試みられておらず、適応的な相互作用へと子どもを導く調整活動を示すに留まっている点である。それは結局、先に指摘したように、子どもの「自己」のありようが「意識=主体内」に帰属されて論じられてきたためであろう。

一般に保育場面において、保育者は、複雑な思いや感情を経験し、子どもの受け止め方や働きかけ方にそれが映し出されるものである(鯨岡, 1998; 津守, 1997)。そして先述の「子ども-保育者」の力動的関係からすれば、子どもはそれくを取り込む-に取り込まれる>かたちで、その都度の存在/自己のありようを立ち上げてゆくものと考えられる。したがって、子どもを前にした保育者の経験を詳細に記述することが必要不可欠であろう。

これまで述べてきたような観点から、子どもと保育者の関係を問題にすると、2~3歳児の存在/自己のありようの個別的特性も捉え直されることになる。すなわち、従来の諸研究の第三の問題点は、この時期の子どもにとっての保育者を始めとする周囲他者の存在の重要性が、十分に取り上げられていない点にある。

Wallon (1963b/1983) は、2~3歳から5歳までの子どもの存在/自己のありようの一面を、“新たに発見した自己の人格の自律性を守ることが、唯一自分の心にかかることだというふうなのです”と述べている。ここで示されている見解は、従来の諸研究とほぼ一致するものである。2~3歳児は、「他者」とは際立つかたちで「自己」(人格)を意識し始め、徐々に自立の度合いを高めてゆく。その過程で、子どもは「他者」の存在を十分に受け止めることなく「自己」を強く押し出してゆく。また保育者は、そのような子どもの振る舞いを生長の証と喜びつつも、「他者」の存在を受け止めるよう導き、子どもの「自己」の押し込みを図るであろう。

しかし、Wallon は、先に引用した箇所でも、続けて以下のようにも述べている。“このように自ら自律的でありたいという欲望を持つ一方で、いつも子どもは自分を直接取り囲む人々に強く依存しています。……(周囲の

「他者」に) 深く組み込まれたままです”(Wallon, 1963b/1983)²⁾。ここで示されている2~3歳時の子どもにとっての「親しき他者」(自分を直接取り囲む人々)への依存的様態が、従来の諸研究ではほとんど記述されてこなかった。この時期の子どもは、依然として保育者を始めとする「親しき他者」に深い依存を向けており、その支えの下で初めて「一個の自己」であり得るような脆弱さを抱えているように思われる。保育者は、その情態を自立に向けて乗り越えるべきものと感じつつも、子どもが「自己」を立ち上げてゆけるよう、まずはその依存を受け入れてゆくだろう。

ここで、留意されなければならないのは、上述の子どもの側の「自己」の「押し出し」と「脆弱さ」、および保育者の側の「導き」と「受け入れ」は、一見逆向きの態度を示しているが、決して「あれかこれか」の関係にあるのではないということである。2~3歳時の子どもが強く「自己」を押し出せるのは、保育者への依存的関係に、それまでのように深く入り込むわけではないにしても、いつでも何らかのかたちで回帰できるという信頼感があるからであって、ただだからこそ、未だこの時期の子どもの「自己」は脆弱さをも抱えているように思われる。このような子どもの両義的な「自己」のありように相即するかたちで、保育者も両義的に対応し、子どもの過剰な「自己」の押し出しに対しては調整的に働き掛けつつも、どこかその背後にある脆弱さに配慮して情緒的に受け入れるであろう(Ausubel, 1950)。要するに、2~3歳時の子どもの存在/自己のありようは、こうした「子ども-保育者」の絡み合った両義的な力動的関係の中でく浮き立ち-感じられる>ものではないだろうか。

1) ここから分かるように、子どもの存在/自己のありようは、厳密には「子ども-保育者-観察者」の三角測量(Emde, 1994)の中で、く浮き立ち-感じられる>ものである。以下では、それを「子ども-保育者」関係の中で記述、考察を行っている。ここには一つのステップが存在し、方法論的な議論を別途要するであろう。ここでの議論からして、少なくとも、関与観察者が保育の場に馴染み、子どもと保育者にとっていわば「補助的保育者」として参入することが必要である。

2) 周知のように先述の「自己主張期」とは、ここでの引用で示されるような2~3歳から5歳までの子どもの存在/自己のありようを言い当てるためにWallonが充てた“personalisme”の訳語である。しかしここでのWallonの記述を参照したとき、personalismeという概念は、子どもの「主張」の背後に響く保育者への深い「依存」を念頭に置いて読まれる必要がある。そしてこのような二面性は、従来のように子どもの「自己=主体内」に注目した「自己意識の体制」や「自我二重性」という枠組みではうまく捉え得ない。Wallon (1941/1982) は、この時期の子どもが、保育者や他の子どもといった周囲他者との“具体的な人格(person)間の関係における危機”を経験すると述べている。この点を踏まえるならば、2~3歳児の存在/自己のありようは、本稿のように「子ども-保育者」の主体間の関係の中で記述されるべきであり、また、その主体間の関係を概念化した理論的枠組みを提示してゆく必要があるだろう。

目 的

これまでの議論から明らかのように、2～3歳時の子どもに特有の存在/自己のありようは、先行研究において示されてきた「自己意識の体制」という観点では、その全体像を捉えきれないように思われる。本稿は、この時期の子どもの存在/自己のありようについて、その詳細な記述が先行研究においてほとんど見られないことに鑑み、幾つかの具体的な場面を取り上げて分析し、その内実について新たな見解を示すことを第一の目的とする。

また、子ども（と保育者）の様相を記述する際に、従来のように「自己意識の体制」に注目するか、本稿のように「存在/自己のありよう」に注目するかは、自他関係をいかなるかたちで概念化するかに拠っているように思われる。そこで、従来自他の基本構造とされてきた「自我二重性」という枠組みを視野に入れながら、新たに「主体間の両義的な力動的関係」という理論的枠組みを提示することを第二の目的とする。

方 法

これまで述べてきたように、2～3歳時の子どもの存在/自己のありようは、まづもって「子ども－保育者－観察者」関係の中で＜浮き立ち－感じられる＞ものである。それゆえ観察者の方法的態度としては“目下進行中の対人作戦に巻き込まれ……観察者と被検者との間に創造される場”における観察・記述を旨とする関与観察(participant observation)が要請される(Sullivan, 1954/1986)。

著者は、京都市内の保育園で、週に一度概ね9:30～18:00の保育に参加させて頂いている。そして、本稿で取り上げる子ども達のクラスを0～1歳時より現在まで縦断的に観察を行っている。約四年にわたる長期の参入によって、著者は、子ども達とは「補助的保育者」として自然に関われるようになり、保育者からもそれを認められている。こうした関わりの積み重ねの中で培われた、いわば「現場感覚」によって、観察者は、ある程度妥当なかたちで「子ども－保育者」関係の内実を捉えることが可能になるように思われる(e.g., Fine, & Sandstrom, 1988)。ただし「保育者」と「補助的保育者としての関与観察者」との間には、むしろ子どもと関わる姿勢に質的な差異がある(後藤・石野, 1999)。また保育日誌の記載や集団保育の設定など保育の組織的な活動は、著者には任されてない。記録については、保育時間中は、日常の保育の妨げにならない範囲で、印象に残ったエピソード場面について、適宜メモを取った。保育終了後、できるだけ早くメモを基に事例として文章化した。本稿で事例を提示するにあたって、「子ども」の呼称は、提示順にAからEを割り当てた。「保育者」については「先生」と表記し、複数登場する場合、イニシャルを充てて区別した。「著者＝補助的保育者＝関与観察者」については「私」と表記した。

結果と考察

まず、子どもの反抗的、自己主張的振る舞いとされてきた典型的な事例を提示する。これまでこうした振る舞いは、従来2～3歳児を対象とした諸研究において多く取り上げられてきたものである(Braman, 1988; 柏木, 1994; 本郷, 1994)。一見「主張」と映る振る舞いの裏面に、実は保育者に対する深い「依存」が響いていることが見て取れるだろう。保育者もまた、その双方に配慮して関わらざるを得なくなっていることが分かる。

【事例1】午前中の自由保育の時間が終わる。初秋でまだ日中は暑くシャワーで汗を流すことになっている。子ども達は服を脱いで並び始める。Aちゃん(2歳8カ月21日)は、一旦シャワーの列に入るが、すぐさま園庭を走り回り、時折こちらを向いて笑う。先生方は「Aー！ こっち来て服脱いで！」「シャワーするよー」などと声をかけるが、お構いなしに駆け回る。しばらく先生方は仕方ないといった感じで、Aちゃんの様子を笑って見守っていた。ほとんどの子どもがシャワーを終えた段になって、Y先生は、意を決したように「しゃあないなあ」と独り言を言って、Aちゃんを追いかけ、「A, こっちおいで、そんな毎日いつまでもダメです」と言って、手を引き、シャワーの列まで連れてこようとする。Aちゃんは「イヤー！」と鋭く声を上げ暴れ回る。Y先生は一旦手を離し、Aちゃんの正面に回って、「暴れてもダメ。毎日こうでしょう」といささか強く諭すように言い、さらに「先生も付き合おう！」と言ってじっと見つめる。Aちゃんは黙って下を向く。Y先生が「はい、服脱いで」と言うと、Aちゃんは、シャツを気乗りしない様子で脱ぎ始める。それを見届けて、Y先生は、シャワーを待つ子ども達のところへと戻る。Aちゃんはシャツを脱いだが、ズボンは脱ごうとせず、下を向いたままじっと座り、時折周りの様子を窺うように見ている。そばにいて、シャワーを終えた子ども達をバスタオルで拭いていたM先生は、時折「Aー、ズボンも脱いで」「シャワー終わっちゃうよ」などと優しく声をかける。少し手が空くと、Aちゃんの正面に回り「Aちゃんががんばれ！」などと明るく声をかける。それでも埒があかないと見るやM先生は「ほな、てつだおか」と手を差し伸べるが、Aちゃんはその手を払いのける。私が「なかなか強情やねえ」と声をかけると、M先生は苦笑して、いかにも困ったという表情で「そうなんですよー。最近自分でこうしたい、ってゆうのがあると、絶対譲らないんですよ」と嘆く。そうこうしているうちに、シャワーを終えた子ども達が、園庭を駆け回り始める。Aちゃん

は、その流れに乗るように歓声を上げ大笑いしながら駆け回る。M先生は「コラー、Aちゃん！」と声を上げ追いかけて、Aちゃんの手を引いてシャワーの列に連れ戻す。Aちゃんは今度は抵抗することなく戻ってくるが、いざ戻ると、ズボンを脱ぐこともなく先程のようにじっと座る。何度か先生方が声をかけるが応じない。しばらくして、またAちゃんは駆け回る子ども達を追いかけて、歓声を上げて走り回る。私達は思わず苦笑する。Y先生は「A！ もう知らんでー」と大きな声をかける。M先生は「もう、ほっとこ」と独り言のように言う。先生方は、走り回っていた子ども達に「お部屋、戻るよお！」と声をかける。子ども達は「ハイ！」と歓声を上げ、戻ってくる。しかしAちゃんは、相変わらず嬉々として駆け回っている。全員が園室に戻ると、先生方は「じゃあ、バイバイ、A！」と快活にしかし毅然と言って手を振る。Aちゃんは先生方の方を見て笑っている。先生方は「笑ってる場合とちゃうで」と言って苦笑する。Y先生は「このぐらいいないと分からへん」と自らに言い聞かせるように言い、園室のドアを開け、様子を窺う。Aちゃんは、程なくいそいそと園室の前にやって来て、今にも泣き出しそうな顔で「シャワー、シャワー……」と力無く言う。先生方は笑って「分かっているんやんか」と言い、Y先生は園庭に出てAちゃんを迎える。

【考察1】 Aちゃんは、この年4月に入園し、クラスの中では新参者ということもあって、保育者はそれまで支持的な関わりを続けてきていた。Aちゃんは、保育者のこうした配慮に依存し、比較的自らの意向を実現しやすい状況にあったと考えられる。この頃になると、私の慨嘆に対するM先生の言葉（「絶対譲らない」Aちゃん）にもあるように、Aちゃんの保育者や周囲の子ども達に対する振る舞いに、「わがまま」と映るような場面が増えてきた。保育者も、その言葉を借りれば、「そろそろ分かってくれない」という思いを重ねてきた。比喩的に言えば、こうした関わり合いの積み重ねが風船のように膨れ上がり、この局面において弾けたという感じである。

本事例で、Aちゃんは保育者の度重なる求めにも関わらず、ズボンを脱ぐこと、シャワーの列に並ぶことを拒否し、嬉々として駆け回っている。例えば、前半のY先生との対峙において、Aちゃんは指示に従ってはいるが、到底矛盾を収めたとは言えず、一筋縄ではゆかない存在/自己のありようが感じられる。①すなわちAちゃんは、保育者という「親しき他者」を巻き込んで止まず、「わがまま＝際限なき自己主張」とも映る振る舞いで、「他者」とは異なる「自己」を際立たせ、強く押し出すさまが見て取れる。こうした解釈は、従来の知見とも重なることが多い。ただし、ここで指摘しておくべき点は、Aちゃんが、保育者の意向を恐らく理解していたということである。本事例より以前に、同様の状況下で、先生

方がシャワーの準備を始めるや、Aちゃんは率先してシャワーの列に並び、シャワーに向かわない他の子ども達を激しく叱責するなど、過剰に保育者の意向くを取り込んだーに取り込まれたかのように映る振る舞いを見せていた。つまり、ここでのAちゃんの「自己」の押し出しの強さは、他者の意向を受け止め得ない、あるいは「第二の自我」が形成されていないという従来の見解では、十分にその意味を捉えきれないのである。

ここではむしろ、Aちゃんの力強さの裏側で響いている保育者に対する深い依存と信頼を考慮に入れる必要があるように思われる。一見傍若無人に駆け回る最中にも、Aちゃんは何度も保育者の支持を求めるように視線を向け、笑いかけている。前半のY先生との対峙に際しても、一旦抗うものの、すぐにY先生を直視できなくなり「すねた」振る舞いを示すのが精一杯である。最後の局面においてドアを開められたとたん、Aちゃんは萎んだようになり、保育者に対する依存を顕にする。②すなわちAちゃんは、保育者という「親しき他者」、皆の集う園室に象徴されるような「親しみある環境」に取り込まれ、受け入れられることによるのみ、「自己」であり得るような脆弱さを抱えているのである。ここまでの記述から、Aちゃんの「積極的な拒否」は、「自己」のく押し出しー脆弱さの表裏一体性を示していることが分かるだろう。Ausubel (1950) は、保育者に対する反発、自立の宣言とも映る子どもの「拒否」の背後に、保育者に対する「依存」「同一化」が働いていることを指摘している。またSpitz (1957) は、「拒否」を意味する首振り、乳房という部分対象によって象徴される保育者に対する探索行動から派生したものであることを指摘し、「拒否」の背後には保育者を求める欲望が働いていると論じている。こうした知見は、本事例でのAちゃんの「自己」の二面性を上手く言い当てている。

このような、Aちゃんの二面性を踏まえれば、保育者としてのY先生、M先生の振る舞いも、従来のように、単に調整的活動とは言えないはずである。確かにここでのAちゃんの奔放な振る舞いに対して、保育者は、他の子ども達の手前、何らかのかたちで調整的に関わらざるを得ない。しかしAちゃんは、これまでの関わりの積み重ねによって、このように振る舞えるようになったのであり、保育者にとって、それは喜ばしいことであって、どこかで受け入れようとするものである。このような二面性は、保育者の度重なる苦笑いや、毅然とした個々の対応とその直前に感じられるためらいや自らに言い聞かせるような言葉などに、よく現れている。つまりここでは、保育者がAちゃんの「自己」を押し込むという「調整」を直線的に行っていないことが重要なのである。詳しく記述してゆこう。

Y先生は、シャワーをしている他の子ども達に配慮し

なくてはならない情況下で、Aちゃんの奔放な振る舞いに巻き込まれ、関わらざるを得なくなっている。それでもしっかりとAちゃんの「わがまま」を受け止めて、皆と同じようにシャワーの列に並んで、服を脱ぐよう諭し、周囲の状況を受け止めるよう根気よく導いている。M先生もまた、他の子ども達の体を拭く手をしばしば止めて、様々なかたちで声をかけるなど、Aちゃんとの関わりはかなり入れ込まざるを得なくなっている。そして一貫して、Aちゃんに「譲る」よう持ちかけている。さらに最後の場面で保育者は、Aちゃんの等身大に収まらぬ「自己」の拡がりを断ち切るかのように、意を決してドアを閉め、じっと様子を見守る。①すなわち保育者は、Aちゃんの「わがまま＝際限なき自己主張」に巻き込まれつつも、しっかりと受け止めて、Aちゃんの過剰に押し出された「自己」の押し込みを図っているのである。こうした解釈は、従来の知見の延長上にあるものと考えられるが、さらに調整を行う保育者の葛藤を孕んだ心の動きにまで踏み込んだものである。

しかしこうした情況下にあっても、保育者は、一貫してAちゃんの出方に合わせ、それを尊重しつつ対応している。前半でY先生は忙しい最中にあっても、遠巻きに指示するのではなく、Aちゃんの「わがまま＝依存性」に配慮し、意を決して一対一で向き合い、しかも、依存的な情態を乗り越えることを期待して、Aちゃんに敢えて簡単に手を貸すことなく一つ一つ手順を踏むように丁寧に関わっている。M先生は、Aちゃんの情態に合わせて自らの態度を細やかに変奏させ、何とかAちゃんが「自らの手」で服を脱ぎシャワーに向かうきっかけとなるよう働き掛けている。総じて保育者は、Aちゃんの向けてくる依存性に配慮しつつ、さらにAちゃんがそれを乗り越え「自己」を立ち上げることを期待して、ためらいと決心を重ねながら、ゆっくりと関わっていることが分かるだろう。最後の局面でも、保育者はためらいつつドアを閉め、帰ってきたAちゃんを暖かく迎え、その後給食の配膳が忙しくなる情況下で、Y先生は周囲に構わずにAちゃんと一対一の関わりを重ねている。②すなわち保育者は、Aちゃんの依存性に配慮しながら、彼女を保育の流れの中にく取り込みつつ受け入れるかたちで、Aちゃんが「一個の自己」として自立してゆけるよう働き掛けているのである。

以上のような両者の両義的な力動的関係の中で、ここでのAちゃん存在/自己のありようが浮き立ち、また保育者と観察者にそれとして感じられるのである。

* * *

次に事例1とは対照的に、「消極的な拒否」が全体の基調となっている事例を挙げる。こうした場合は保育場面ではよく観察されるものであるが、2～3歳児を対象

とした先行研究においてはほとんど取り上げられてこなかった。Ausubel (1950)はこの時期の子どもが、「自己」の拡大を主張するような振る舞いを見せる反面、「自己」の切り下げを経験することもあると述べている。本事例もそうした局面であろう。子どもは保育者への依存と信頼を背景に、一見「脆弱」な振る舞いを見せるものの、その裏面で保育者を我がものにして止まない「強さ」が響いていることが見て取れるだろう。それゆえ、保育者もその双方に配慮して関わらざるを得なくなっているのが分かる。

【事例2】Bちゃん(2歳8カ月14日)は、登園後お母さんと別れてから、メソメソと泣いて園室の隅でじっとしていた。M先生が慰めつつ抱きかかえていたが、機嫌を直す様子はない。M先生は抱きかかえたまま、朝のお集まりの用意をしていた。しばらくして、お集まりの時間になる。先生方は「お集まりだよ、おしっこ行つて」と声をかける。子ども達はトイレに向かい、順次椅子を用意して座っていく。M先生はBちゃんを下ろし「Bちゃん、おしっこ行こうか」と優しく尋ねる。しかしBちゃんは「イヤーヤ」と力無く言う。M先生は「でも、行つとかなないと、後でおしっこたれちゃうよ」と促すが、Bちゃんはパイと横を向いてしまい、ペタリと両手をついて下を向く。何とも言えぬ不快感が漂い居たたまれない様子である。M先生は「そっか、じゃあ、しばらくそうしとき」と静かに言って、その場を離れる。子ども達は皆席に着くが、Bちゃんのことが気になる様子だ。I先生が「B、どうしたん、こっちおいでよ」と誘いかけるが、Bちゃんは全く応じない。I先生は「そっか、しゃあないな」とBちゃんに、また自らに言い聞かせるように言って、子ども達の輪の中に入る。M先生は「Bちゃん、あっち行こか」と言って手を差し伸べる。Bちゃんは力無く抱きかかえられ、ピアノの側の床にペタンと座る。M先生はピアノの席に着き、子ども達に「じゃ、お歌うたおな」と明るく声をかけ、皆がお気に入りの曲を弾き始める。ところが、歌が始まってまもなく、その活気の前に居たたまれないように、しかし、自らの存在を訴えるように、BちゃんはM先生の方を向いて激しく泣き始める。M先生は曲の途中ということもあってか、構わずに「みんな、Bちゃんの泣き声に負けないように歌ってなあ」と子ども達に明るく声をかける³⁾。しかし、子ども達もBちゃんのことが気になるよ

3) ここで指摘しておくべきことは、M先生はBちゃんの意向を全く無視して、いつもの保育の流れに沿って機械的に振る舞っているわけではないという点である。無論この局面は設定場面なので、「皆と一緒に」という側面が前面に出たのだと言えなくはない。しかし、反面こうした「居たたまれなさ」を示す子どもが、本事例のようにその情態とは無関係に保育の流れが進行して行く場面で、その流れがそれまでの園生活の中で慣れ親しんだものであるが故に、それを足場にして「自己」を立ち上げてゆく状況がしばしば見受けられる。M先生のここでの関わりは、こうした二面性を念頭に置いて読まなければならない。

うで、何となくちぐはぐな感じで歌が終わる。歌が終わってもBちゃんは激しく泣いている。子ども達はBちゃんのことが気になる様子で、I先生や私に「Bちゃん泣いてるなあ」と小さな声で告げる。私達も「そうだねえ」と言いつつ、Bちゃんの様子を見守る。間近にいたCちゃん(2歳11カ月0日)が、「B一」と呼びかけつつ慰めるようにBちゃんの背に手を当てる。しかし、Bちゃんはかえって激しく泣く。M先生は「Cちゃん有り難う、そっとしといたげて」と微笑みつつ言う。Cちゃんは席に戻る。M先生がBちゃんに顔を近づけ「Bちゃん、泣いてばかりいてもしゃあないよ。みんな悲しい」と優しく声をかけ、絵本を取り出しBちゃんの方に向け「お話読もうと思ってんにゃけど」と語りかける。しかし、Bちゃんは泣き止まない。M先生はついに折れて「しゃあないなあ、おいで」とBちゃんを抱き取る。Bちゃんは嗚咽しながらも、何とか泣き止む。そしてM先生は皆の方を向き、「これやお歌歌えないし、先にお話読もうかー」と言い、絵本を読み始める。M先生がお話を読んでいる間、Bちゃんは親指を吸ってじっとしている。お話が終わって、M先生はBちゃんの様子を見て、何とかかなりそう思ったのであろう、「Bちゃん、おイス座って」と優しく言う。Bちゃんは立ち上がり、ピアノの側にI先生が用意した椅子に座る。お集まりも何とか終わり、先生方は「おイス片づけて、お外行こか」と声をかける。子ども達は順次椅子を片づけ、園庭に出る。ところがBちゃんは、先生方の呼びかけにもじっと下を向いて動こうとしない。M先生は「あれ、Bちゃん、お外に行けないよ」と誘いかける。Bちゃんは「イヤヤ」と力無く言う。M先生は、「じゃあ、おイス片づけよか」と誘うが、Bちゃんはまたもや「イヤヤ」と言い、動かさず泣き始める。M先生は「困ったねえ、じゃあ、しばらくそうとき」と優しくしかし毅然と言い、雑用を始める。雑用を終えると、M先生はBちゃんを抱いて園庭に出てくる。園室の側のところで二人で腰掛け、M先生はそこから子ども達の様子を見守る。Bちゃんはその場で、M先生が持ってきた玩具で砂遊びを黙々としていたが、20分ほど経ってようやく立ち上がり、子ども達の砂遊びの輪に加わってゆく。

【考察2】Bちゃんはこのクラスに最も幼少時から居て、園生活にも慣れており、しっかりとした印象を受ける子どもでもある。しかしこの頃からしばらく、こうした居たたまれなさを感じさせる「消極的な拒否」を度々見せるようになった。これは、Bちゃんがこのような振る舞いを示し始めた時期の状況である。

本事例でBちゃんは、母親と別れた後、一貫して居たたまれなさを感じさせる。保育者の暖かい慰めに、何度か泣き止み立ち直るかと思いきや、歌を歌うとか外に遊びに出るといった場面の变化毎に、その流れに気圧され

るように泣いてしまう。そしてBちゃんは、I先生やCちゃんの慰めではなく、あくまで「最も親しき他者」としてのM先生の支持を求め続けている。そして、そのM先生に文字通り抱えられ取り込まれることによって、そこに居場所を得て何とか束の間、落ち着くという感がある。Bちゃんは、かなりの時間にわたる一对一の親密な状況を糧として、ようやく立ち直ってゆく。①すなわちBちゃんの振る舞いには、「親しき他者」としての保育者によって抱え込まれることによるのみ、何とか「自己」を立ち上げてゆくような脆弱さ、「か弱さ」が感じ取れるだろう。確かに本事例では、このようなBちゃんの消極性、「自己」の「か弱さ」が表向き目立つ。しかしその「か弱さ」の裏側には、保育者への依存と信頼を断固として当て込み、巻き込み続ける「強さ」も見て取れるだろう。BちゃんはM先生以外の慰めは拒否し続け、果ては設定場面の保育の流れそのものをも拒否している。そして、周囲の子ども達の存在を受け止めることもなく、M先生を文字通り独占しようとし続けている。②すなわちBちゃんの振る舞いには、周囲の「他者」の存在や「情況」をしっかり受け止めることなく、また本来「別の自己」である「親しき他者」としての保育者を自らの一部でもあるかのように扱い続け、そのようにして「自己」を際立たせる「強さ」をも見て取れるだろう。

保育者としてのM先生にとっては、「しっかりしていた」はずのBちゃんのこのような振る舞いは、最近しばしば見受けられ始めたとはいえ、まずもって手を差し伸べるべきものとして映ったのであろう。多くの子ども達に配慮しなくてはならない立場にはあるが、Bちゃんの向けてくる依存をここでは特別なものとして文字通り抱え込んでいる。登園後はBちゃんを抱き続け、その後「トイレ」「お集まり」と、「皆で一緒」という側面が前景化しやすい状況下にあっても、通常の保育の流れの変更も含め、可能な限り一对一の関わりを作り出すことを試みている。少しの流れで動じてしまうBちゃんの「居たたまれなさ」を前に、Cちゃんを始めとする周囲の子ども達に「そっとしておく」よう指示し、自らの心身でBちゃんを取り込んで覆い、流れに対する堰となっているかのようなのである。この姿勢は一貫して変わることなく、Bちゃんが立ち直るまでかなりの時間を割いている。①すなわち保育者は、Bちゃんの向けてくる依存と信頼を受け入れつつ、抱え込むかのように振る舞い、彼女が「一個の自己」として立ち上がるよう支持し続けている。他方でこうした情況は、多くの子ども達に配慮して関わらなければならない保育者にとっては、そのままにしておけない性質を有している。Bちゃんからひっきりなしに向けられてくる依存によって、M先生は一对一の関わり合いへと絶えず巻き込まれ、そのあるべき立場を保留

しなければならぬ。そのような状況下にあるために、M先生はBちゃんの依存的情態に対し、全面的には受け入れることはなく、抱いていたBちゃんを、様子を見て折々下ろし、何とか周囲の状況を受け止めるよう、また「皆と一緒に」に振る舞うよう導いている。②すなわち保育者は、Bちゃんの依存と信頼に巻き込まれ、ある程度受け入れながらも、Bちゃんが周囲の「他者」と「情況」を受け止めるよう導いている。

冒頭に述べたように、ここではBちゃんの「消極的な拒否」が、全体の基調を成している。この「拒否」が、ある種の「強さ」や「主張」を孕みつつも、保育者に対するBちゃんの強い「依存」を示していることが分かるだろう。それにしても、本事例でのM先生は、「甘え＝主張を孕んだ強い依存」とも映るBちゃんの振る舞いを比較的、直線的に抱え込んでいる。これは、こうしたBちゃんの振る舞いが、特に目立ち始めた時期に属するからであろう。この後、Bちゃんは「甘え」をエスカレートさせてゆくことになった。それに呼応するように、保育者は徐々に支持の側面を背景化してゆき、導くことを基調とした強い関わりが表立つようになった。先述のようにAusubel (1950) は、この時期の子どもが、「自己」の切り下げ (devaluation) を経験し、それまでの依存的関係への回帰を求めることを指摘している。さらに彼は、保育者による周到な配慮と導きによって、子どもは周囲他者を「別の自己」として受け止め「自己」を再び押し出す (revaluation) ことができるようになるとも述べている。本事例もこうした時期に相当するものと考えられる。つまるところ、こうした両者の両義的な力動的関係によって、ここでのBちゃんの存在/自己のありようが浮き立ち、保育者と観察者にそれとして感じられるのである。

* * *

ここまでは、子どもと保育者との一対一の関わりを基調とした局面を記述してきた。しかし、従来の諸研究でも指摘されているように、2～3歳時には、子ども同士の関わり合いも多く観察され、そこに保育者が関与する場面が比較的多い (Ellis, Rogoff, & Cromer, 1981; 鹿島, 1995, 1996)。次の事例では、2～3歳児の保育場面において頻りに観察される「玩具の所有」を巡る関わり合いを取り上げる。「所有」は、この時期の子どもと保育者、子ども同士の関わり合いにおいて、特に問題となるものであり、情況に即した詳細な記述が求められる (山本, 1991)。次の事例では、子ども同士が向かい合い、また保育者の存在を絶えず意識しながら「自己」の<押し出し-萎縮>を表裏一体に経験し、保育者がそれぞれの子どもを<導き-受け入れる>さまを見て取ることができるだろう。

【事例3】Dちゃん (2歳9か月25日) は、ハンカチを回して遊んでいる。先生や私に「見て、見て!」と自慢げに言う。先生は「いいなあ、グルグルグルー!」と笑って声をかける。そこにE君 (2歳2か月25日) がやってきて、ハンカチをいきなり引っ張る。Dちゃんは「イヤー! Dちゃんの一!」と声を上げる。構わず、E君はDちゃんを叩いて、ハンカチを取ってしまう。Dちゃんは「アーン!」と訴えるように泣き叫び、私の方へやってくる。先生は「もう、すぐ甘えるんやから」と言って立ち上がり、「ちょっとおいで」とDちゃんの手を取り、E君に対面させる。そしてDちゃんに「すぐ泣かんと、ちゃんとアカン! って言い」と諭すように声をかける。Dちゃんは、E君に向かって「アカン!」と投げつけるように言う。E君は、ハンカチを手にとりじっとそちらを見ている。先生は笑いながら続けて「メッ! て言い」と声をかける。Dちゃんは「メッ!」と言ってE君を指さす。Dちゃんの表情は硬く、先生を背に一生懸命抗う感じである。E君は、ムツとしてDちゃんを叩く。再び、Dちゃんは、地団駄踏んで「アーン!」と泣き叫ぶ。先生は「そこですぐ泣かんと、やり返したりー、ヤメテ! って」と半ばあきれつつ励ます。DちゃんはE君の方に向き直り「メッ!」と言いつつ、E君を少し叩く。さらに「ヤメテ!」と叫ぶ。先生は少し笑って、E君を指さし「メッ!」と同調するように言う。Dちゃんも再び「メッ!」と言う。E君はやるかたない感じで「グーム!」と声を上げ、ハンカチを投げ捨て、駆け去る。先生は「もう、E君は、誰もやり返さへんと思って、済ましてるやろ。みんなE君は小さいと思ってやり返さへんだけで」とE君の背に言葉を投げかける。

【考察3】Dちゃんは、普通の保育の中できわめて活潑な印象を与える反面、「思い通り」にならないとすぐに保育者に泣きつくことが多い。保育者の言葉を借りれば、「子どもらしくきわめて単純だが、その単純さ故に難しい子ども」である。

本事例でハンカチを取られたDちゃんは、直接E君に対し行動に出ず、真っ先に保育者の下へ泣きついてくる。ここに、①Dちゃんの依存性、つまり保育者に受け入れられることによって初めて「自己」を際立たせようような脆弱さと、②保育者の支持を当然のように当て込む、言い換えれば、保育者を「別の自己」として受け止めず全面的に巻き込んで、自らの依存を満たそうとするDちゃんのある意味での強さが見て取れる。保育者は、これを「甘え」と受け止め、E君に対し直接抗議するよう導くと同時に、ともすればもたれかかろうとするDちゃんに巻き込まれつつも巻き込んで、脆弱さを感じさせるその「自己」を支えている。E君との対面の過程には、①Dちゃんが向ける依存を敢えて全面的には引き受けず、Dちゃんが「一個の自己」として自らを

押し出すよう導く側面と、②Dちゃんの取るべき態度をまず自らの態度に引き寄せて示し、Dちゃんの「自己」をいわば背後から支えるという側面とが併存している。こうした両者の両義的な力動的関係によって、ここでのDちゃんの存在/自己のありようがく浮き立ち-感じられる>のである。

E君はクラスの中で月齢が小さいため、園生活の色々な局面で、他の子ども達や保育者はE君に対して「別の自己」として迫ることを控えるという関わりを重ねてきた。本事例でE君は、①Dちゃんとは対照的に「わがまま」というかたちで、周囲の「他者」を巻き込みつつ、それとは際立つかたちで「自己」を強く押し出している。②確かにその「自己」の過剰な押し出しは、一見力強い。しかし、それまでの関わりや積み重ねを反映した周囲の「他者」の配慮に依存している点では、やはり「自己」にある種の脆弱さを抱えたままである。保育者は、E君の「わがまま」に巻き込まれながらも、①このハンカチはDちゃんに帰すべきものであるということ、Dちゃんを介して自らの態度として示すことで、E君の過剰な「自己」の押し込みを試みると同時に、②ハンカチを取り上げるなどの直接的な指導も可能な中、E君の思い通りにならない「別の自己」としてDちゃんを対峙させるに止めている。これは「わがまま」の背後にあるE君の脆弱さに配慮した関わりと言えよう。こうした両者の両義的な力動的関係によって、ここでのE君の存在/自己のありようがく浮き立ち-感じられる>のである。

総合考察

1) 結果の総括

本稿では、2～3歳時の子どもに特有の存在/自己のありようを、具体的な事例に即して明らかにしてきた。従来、この時期の子どもと保育者の関わりの特徴として、子どもの「自己主張」と保育者の「調整的な働き掛け」が取り上げられ、分析されてきた。しかし、こうした構図では、2～3歳時の子どもの存在/自己のありようを十分掘り取ることはできない。事例1では、この時期の子どもが「他者」とは際立つかたちで「自己」を強く押し出しつつも、「親しき他者」としての保育者に受け入れられることによるのみ「自己」であり得るような脆弱さを抱えていることが明らかになった。さらに、保育者は子どもの「自己」の押し出しに対して調整的に働き掛けつつも、その背後にある「自己」の脆弱さに配慮して受け入れてゆくことを示した。事例2では、子どもが保育者に抱え込まれることによるのみ「自己」を立ち上げてゆくような脆弱さを顕にしながらも、保育者を独占し「自己」を際立たせるような強さを示すことを明らかにした。それに対して保育者は、子どもの脆弱な「自己」をある程度抱えつつも、周囲の「他者」や「状況」を受

け止めるよう導いてゆくことを示した。事例3では、子ども同士が保育者の存在を絶えず意識しながら関わり合う場面を取り上げた。それぞれの子どもの「自己」を押し出しつつも脆弱さを抱えており、それに相即して、保育者が導きつつ受け入れる様子を示した。

結論をまとめれば、2～3歳児はく自立-依存>という一見逆向きの態度を表裏一体に抱え込むのであり、それは、保育者のく導く-受け入れる>という両義的な対応に絡み合って表面化する。逆に言えば、保育者の対応も、子どもの「自己」のく押し出す-萎縮する>という両義的な出方と絡み合うかたちで紡ぎ出される。2～3歳時の子どもに特有の存在/自己のありようの内実とは、この「子ども-保育者」の絡み合った力動的関係の中で、子どもが「一個の自己」として浮き立ち、保育者（と観察者）の下に感じられるその都度の具体的な様相に他ならない。

では、何故2～3歳時に子どもはこのような存在/自己のありようを示すのであろうか。これまでの議論を踏まえれば、従来のように子どもの「自己意識=主体内」の体制化過程の中ではなく、「子ども-保育者」の主体間の関係の中で説明される必要があるだろう。

2～3歳になると、子どもはそれまでの保育者への依存的関係から徐々に出てゆくかたちで「自己」を強く押し出そうとする。保育者は、それを尊重し以前の濃密な関わりから一歩身を引いて関わるようになるが、子どもの「自己」の過剰な押し出しに対しては調整的に働き掛ける（Stern, 1985; Winnicott, 1965/1977）。しかしまた、このような生長を支えてきたのは、子どもが出てゆき、保育者が撤収する当の濃密な依存的関係に他ならない。そこで、子どもは同時に、かつての依存的関係に帰するかのような「自己」の脆弱さをも見せる。保育者はそれをある程度受け入れつつも、そのような情態はこの時期には乗り越えて欲しいと願い、自立に向けて導こうとする。このような両者の「円環的なアンビバレンツ」（Ausubel, 1950）によって、2～3歳児は、これまで見てきたような独特の存在/自己のありようを示すようになるものと考えられる。

2) 「自我二重性」と「主体間の両義的な力動的関係」

先述のように、従来、2～3歳時に成立する「自我二重性」とは、この時期の子どもの「自己意識の体制」を特徴づけるものであると同時に、生涯を通じて機能する「自他の基本構造」として位置づけられてきた。また、近年盛んに研究が行われている「心の理論」との接続が図られていることから、それは、現行の発達心理学における自他関係の捉え方の一つの基本的枠組みを示すものである。しかし、こうした枠組みでは、2～3歳時の子どもの存在/自己のありようを十分に捉えることはできず、それは「子ども-保育者」の両義的な力動的関係

の中でく浮き立ち—感じられる—ものであることを強調してきた。それでは、ここでの自他関係の様相を整合的に理解し記述するための理論的枠組みは、いかなるものであろうか。以下では、その枠組みを「主体間の両義的な力動的関係」として概念化し、新たに提示することを試みる。

ところで、周知のように「自我二重性」という観点は、元々 Wallon によって提唱されたものであり、また「主体間の両義的な力動的関係」という枠組みも、これまでしばしば Wallon の見解を引用してきたことから分かるように、Wallon に少なからず拠っている。したがって、この二つの理論的枠組みをどのように位置づけるかが、併せて問題になる。ただし、Wallon 自身は、この二つの理論的枠組みの位置づけを明示しているわけではなく、「自己」と「他者」という概念も極めて多様なかたちで用いている。したがって、以下で行う理論的枠組みの構築とその位置づけは、Wallon を参照しつつも、そこからはみ出したものであり、著者自身による自他関係一般に関する概念化の試みの一端である。

Wallon (1959/1983, 1963a/1983) は、「主体による自己の意識化」の発達過程に注目し、それがそれまでの自他未分化な情態から、2～3歳時にある程度分化したとき見出される自他関係の構造として「自我二重性」を位置づけている。それは先述のように、子どもがく「自我」—「第二の自我＝内的他者」—の二重性（またこの「内的関係」と「現実の関係」との二重性）を獲得した情態を示すものである。

さらに生活史の展開に伴って、それぞれの時期にこの構造を動かす主たるモチーフが現れ、それによって、く「自我」—「第二の自我＝内的他者」—の対の内容は変化してゆく。区別された対のそれぞれは概念として機能するようになり、その内容は、初期には例えば「家族」や「養育環境」といった具体的な生活の場をモチーフとして、後には「信条や規範」や「社会通念」といった普遍的・形而上学的な体系や社会・文化の総体をモチーフとして、構成されることになる。まさに「自己意識＝主体内」における自他関係—広義の自他認識の体制化の様式としては、「自我二重性」は自他関係の基本構造と言いうるものである (Zazzo, 1975/1978)。

しかし、Wallon (1963a/1983) によれば、こうした「自己意識」の体制化が成立した後も、生涯を通じて上述の対を結ぶ融即や同一化といった情緒的關係は消えることはなく、むしろ、社会・文化の体系の中で大きな機能を果たし続けるとしている。

これまでの一連の事例記述の中で、2～3歳児は「親しき他者」としての保育者との依存的関係に回帰しつつ「自己」を押し出し、保育者は子どもの「自己」の押し出しに巻き込まれつつ受け入れてゆくさまを確認してきた。

こうした両者の両義的な力動的関係は、Wallon (1963a/1983) の言う情緒的關係に類比的なものであると考えられる。また、この時期、その構造を動かしているのは、子どもが自らの下に発見し、保育者を始めとする他者の下に同一化を向ける「具体的な人格」というモチーフである (Wallon, 1941/1982)。そして、個々具体的な場面における「子ども—保育者」関係、敷衍すれば「主体間の両義的な力動的関係」の様相の中に、その都度の子どもの存在/自己の現れが定位される。

このような「主体間の両義的な力動的関係」は、生活上の時期に応じて主たるモチーフを変化させつつも、生涯を通じて一般的に見出される構造でもある。Wallon (1976/1983) は、一般に生を営む主体としての個人のありようについて、“常に固有の個人である”と同時に、“個人は常にある特定の集団の構成員であり、……集団の中でしか存在し得ない”と述べている。つまり一面では「自己」は「他者・社会」を固有の仕方であり取り込み体制化する存在である。しかし裏面では「自己」は、「他者・社会」に取り込まれその一員としてしか存在し得ない (Merleau-Ponty, 1962/1966)。また鯨岡 (1998) も、ほぼ同様の構造を“人間存在の抱える根源的両義性＝自他の共軛性”として概念化している。こうした観点に立ったとき、「自我二重性」という理論的枠組みは、「他者・社会」を「自己意識＝主体内」の領域において体制化する存在としてしか「自己」を捉えていないと言わざるを得ない。主体は「他者・社会」の中に住まい、その中でかけがえのない「自己」を立ち上げてゆくが、その当の「他者・社会」の中で「自己」は疎外されてゆけり。そして“現実の人間は束の間の存在であり、矛盾にとらわれている”という Wallon (1976/1983) のテーゼは、このような「主体間の両義的な力動的関係」の中で、我々がその都度の存在/自己のありようを身に纏うさまを言い当てたものと考えられる。

それでは、これまでの議論を踏まえ「主体間の両義的な力動的関係」を図式的に概念化してみよう。そこでは、く自らを押しだし相手を巻き込み、取り込もうとする力：「自己」の押し出し（「他者」の取り込み）—とく相手に巻き込まれ、取り込まれる力：「他者」への取り込まれ（「自己」の萎縮）—とが相互に絡み合いつつ表裏一体性をなしている。また、その力動的様相は固定的なものではなく、その都度の状況に応じた分析が必要になる (Wallon, 1963a/1983)。そして、このように主体間のく能動の力—受動的力—が図地反転的に絡み合う場の「接

4) 「自我二重性」に基づく諸研究の中でも、具体的な事例の分析に当たって、「他者」を前にした「自己」の疎外態を描き出しているものもある (浜田, 1992; 木下, 1998; 山上, 1992)。このような状況は「自我二重性」という枠組みをはみ出すものと思われるが、彼らは、そこに含まれる別の自他関係の捉え方を概念化しているわけではない。

合面」に、その都度の自他の現れ（存在のありよう）が定位される（Ruesch, & Bateson, 1968/1995; Merleau-Ponty, 1964/1989; Weizsäcker, 1950/1975）。言い換えれば、本稿で言う主体の存在/自己のありようとは、その都度の状況における主体間の両義的な力動的関係の中で、いわば「実践的な意味で主体的な存在者」、「一個の自己」として立ち現れる“主体化”（Deleuze, 1986/1987, 1988/1998）の具体的な様相を指すのである。

以上の議論を踏まえると、「主体内の自他関係」の基本的構造として「自我二重性」を、「主体間の自他関係」の基本的構造として「主体間の両義的な力動的関係」を位置づけることができよう。そして、前者に拠るならば広義の認識構造としての「自己意識の体制」が、後者に拠るならば個々具体的な場面での実践的な主体性としての「存在/自己のありよう」が、主体の「自己」の様相として焦点化される。このような二つの自他関係の捉え方は、Wallonが分析状況に応じて両者をともに持ち出すように、決して相容れないものではない。要は、二つの理論的枠組みは観点の違いを有するに過ぎない。二つの観点から複眼的に捉えることで、より立体的に自他関係、ひいては“生活全体”（Wallon, 1941/1982, 1976/1983）を記述することこそが肝要なのである。

3) 今後の課題

残された課題は数多いが、以下の四点を挙げておく。

第一に、記述の射程に関わる課題が挙げられる。本稿では2~3歳時の子どもに特有の存在/自己のありようについて、主として「子ども-保育者」関係、敷衍すれば自他関係という枠内で記述し、その内実について新たな見解を提示した。ただし保育の場は、「子ども-保育者」という系に限局されるものではない。今後、その系の環境をなす保育の流れ、さらには社会通念などを射程に入れた詳細な記述を試みる事が要請されるだろう。

第二に、研究と現場との関わりに関する課題が挙げられる。本稿では、「子ども-保育者」の力動的関係に注目し、子どもの側の経験の記述とともに、従来余り取り上げられてこなかった保育者の経験の記述を行い、両者の絡み合いそのものを分析対象とした。発達という事象について、子どもの下に浮き立つものに加えて、保育者にとって現れる子どもの姿を積極的に提示してゆくことで、保育や幼児教育の現場とのさらなる対話が可能になってゆくものと考えられる。今後、現場との協力関係を緊密に図りながら、その具体的方途も探りつつ、様々な事象について研究を進めてゆく必要があるだろう。

第三に、関与観察という方法に関する課題が挙げられる。本稿では、著者自身が「補助的保育者」として保育の場に長期間にわたって参入し、子どもと保育者との関わりの中での経験に基づいて、事例記述と理論的枠組みの構築を図った。こうした試みは、その重要性が次第に指摘

されつつあるとはいえ、未だ数少ないと言わざるを得ない。今後の展開の要となるのは、方法論の整備にあるように思われる。具体的な研究の積み重ねと併せて、関与観察という方法について、さらに議論を深めてゆく必要があるだろう。

第四に、今回提示した「主体間の両義的な力動的関係」という理論的枠組みに関する課題である。今後、様々な現象の記述を通して、その適用可能性を確認し、その営みの中で、さらに理論的精緻化を進めてゆく必要があるだろう。

文 献

- 麻生 武. (1985). 自己意識の成長. 原野広太郎・小嶋秀夫・宮本美沙子・木村彰道・高橋恵子・湯川良三(編), *児童心理学の進歩 XXIV* (pp.163-187). 東京: 金子書房.
- 麻生 武. (1992). すみやかに私が「私」になっていく子どもの事例から. 浜田寿美男(編著), 「私」というものなりたち (pp.41-65). 京都: ミネルヴァ書房.
- Ausubel, D. P. (1950). Negativism as a phase of ego development. *American Journal of Orthopsychiatry*, 20, 796-805.
- Braman, O. R. (1988). Oppositionalism: Clinical descriptions of six forms of telic self-negativism. In M. J. Apter, J. H. Kerr, & M. P. Cowles (Eds.), *Progress in reversal theory* (pp.213-221). North-Holland: Elsevier Science.
- Deleuze, G. (1987). フーコー (宇野邦一, 訳). 東京: 河出書房新社. (Deleuze, G. (1986). *Foucault*. Paris: Minuit.)
- Deleuze, G. (1998). 變 (宇野邦一, 訳). 東京: 河出書房新社. (Deleuze, G. (1988). *Le pli: Leibniz et le baroque*. Paris: Minuit.)
- Ellis, S., Rogoff, B., & Cromer, C. C. (1981). Age segregation in children's social interactions. *Developmental Psychology*, 17, 399-407.
- Emde, R. N. (1994). Developing psychoanalytic representations of experience. *Infant Mental Health Journal*, 15, 42-49.
- Fine, G. A., & Sandstrom, K. L. (1988). *Knowing children: Participant observation with minors*. Beverly Hills, CA: Sage.
- 後藤美和・石野秀明. (1999). 保育者の呈する「どっしり感」: 2~3歳児と保育者の関わり方の観察から. *日本教育心理学会第41回総会発表論文集*, 577-578.
- 浜田寿美男(編者). (1992). 「私」というものなりたち. 京都: ミネルヴァ書房.
- 本郷一夫. (1994). 仲間関係. 橋口英俊・稲垣佳世子・佐々木正人・高橋恵子・やまだようこ・湯川良三

- (編), *児童心理学の進歩 XXXIII* (pp.227-253). 東京: 金子書房.
- 本郷一夫・杉山弘子・玉井真理子. (1991). 子ども間のトラブルに対する保育士の働きかけの効果: 保育所における1～2歳児の物をめぐるトラブルについて. *発達心理学研究*, 1, 107-115.
- Howes, C., Unger, O., & Seidner, L. B. (1989). Social pretend play in toddlers: Parallels with social play and with solitary pretend. *Child Development*, 60, 77-84.
- 鹿島達哉. (1995). 保育園の1, 2歳児クラスにおける仲間関係の発達とその社会的構成: 大人の構成的役割と文脈としての生活との関連. *広島大学教育学部紀要 (第一部)*, 44, 123-131.
- 鹿島達哉. (1996). 1, 2歳児の仲間関係の発達の文脈としての大人-子ども-子どもの三者間のやりとり. *広島大学教育学部紀要 (第一部)*, 45, 111-119.
- 柏木恵子. (1994). 子どもの「自己」: 幼児のわがまま. 岡本夏木・高橋恵子・藤永保 (編), *講座幼児の生活と教育: 3 個性と感情の発達* (pp.47-77). 東京: 岩波書店.
- 木下孝司. (1998). 幼児が「心」に気づくとき. 丸野俊一・子安増生 (編), *子どもが「こころ」に気づくとき* (pp.33-55). 京都: ミネルヴァ書房.
- 鯨岡峻. (1998). *両義性の発達心理学*. 京都: ミネルヴァ書房.
- Merleau-Ponty, M. (1966). 人間の科学と現象学 (滝浦静雄・木田元, 訳). *眼と精神* (pp.13-95). 東京: みすず書房. (Merleau-Ponty, M. (1962). *Les sciences de l'homme et la phénoménologie: Les cours de Sorbonne*. Centre de documentation universitaire.)
- Merleau-Ponty, M. (1989). 見えるものと見えないもの (滝浦静雄・木田元, 訳). 東京: みすず書房. (Merleau-Ponty, M. (1964). *Le visible et l'invisible: Suivi de notes de travail*. Paris: Gallimard.)
- O'Neill, D. K. (1996). Two-year-old children's sensitivity to a parent's knowledge state when making request. *Child Development*, 67, 659-677.
- Rogoff, B. (1990). *Apprenticeship in thinking: Cognitive development in social context*. New York: Oxford University Press.
- Ruesch, J., & Bateson, G. (1995). *精神のコミュニケーション* (佐藤悦子・ボスパーグ, 訳). 東京: 新思索社. (Ruesch, J., & Bateson, G. (1968). *Communication: The social matrix of psychiatry*. New York: Norton & Company.)
- Russon, A. E., Waite, B. E., & Rochester, M. J. (1990). Direct caregiver intervention in infant peer social encounter. *American Journal of Orthopsychiatry*, 60, 428-439.
- Sabbagh, M. A., & Callanan, M. A. (1998). Metarepresentation in action: 3-, 4-, and 5-year-olds' developing theories of mind in parent-child conversations. *Developmental Psychology*, 34, 491-502.
- Spitz, R. A. (1957). *No and Yes: On the genesis of human communication*. New York: International Universities Press.
- Stern, D. N. (1985). *The international world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*. New York: Basic Books.
- Sullivan, H. S. (1986). *精神医学的面接* (中井久夫・秋山剛・野口昌也・松川周悟・宮崎隆吉・山口直彦, 訳). 東京: みすず書房. (Sullivan, H. S. (1954). *The psychiatric interview*. New York: Norton & Company.)
- 津守真. (1997). *保育者の地平*. 京都: ミネルヴァ書房.
- Wallon, H. (1982). *子どもの精神的発達* (竹内良知, 訳). 京都: 人文書院. (Wallon, H. (1941). *L'évolution psychologique de l'enfant*. Collection Armand Colin.)
- Wallon, H. (1983). 『自我』意識の中で『他者』はどういう役割を果たしているか (浜田寿美男, 訳). *身体・自我・社会* (pp.52-72). 京都: ミネルヴァ書房. (Wallon, H. (1959). Le rôle de l'autre dans la conscience du «moi». *Enfance*, 279-286.)
- Wallon, H. (1983). 自我の水準とその変動 (浜田寿美男, 訳). *身体・自我・社会* (pp.23-51). 京都: ミネルヴァ書房. (Wallon, H. (1963a). Niveaux et fluctuations de moi. *Enfance*, 87-97.)
- Wallon, H. (1983). 子どもにおけるパーソナリティの発達段階 (浜田寿美男, 訳). *身体・自我・社会* (pp.231-244). 京都: ミネルヴァ書房. (Wallon, H. (1963b). Les étapes de la personnalité chez l'enfant. *Enfance*, 73-78.)
- Wallon, H. (1983). *ワロン選集 上・下* (波多野完治, 監訳). 東京: 大月書店. (Wallon, H. (1976). *Lecture d'Henri Wallon: Choix de textes*. Paris: Sociales.)
- Weizsäcker, V. (1975). *ゲシュタルトクライス* (木村敏・濱中淑彦, 訳). 東京: みすず書房. (Weizsäcker, V. (1950). *Der Gestaltkreis: Theorie der Einheit von Wahrnehmen und Bewegen*. Stuttgart: Georg Thieme Verlag.)
- Winnicott, D. W. (1977). *情緒発達の精神分析理論* (牛島定信, 訳). 東京: 岩崎学術出版社. (Winnicott, D. W. (1965). *The maturational processes and the facilitating environment*. London: The Hogarth Press.)
- 山本登志哉. (1991). 幼児期に於ける『先占の尊重』原則の形成とその機能: 所有の個体発生をめぐって. 教

育心理学研究, 39, 122-132.

山上雅子. (1992). パースペクティブ性をもったやりとりの世界はどのようにして成り立つのか. 浜田寿美男 (編著), 「私」というものなりたち (pp.127-149). 京都: ミネルヴァ書房.

百合本仁子. (1981). 1歳時における鏡像の自己認知の発達. 教育心理学研究, 29, 261-266.

Zazzo, R. (1978). 心理学とマルクス主義: アンリ・ワロンの生涯と業績 (波多野完治・真田孝昭, 訳). 東京: 大月書店. (Zazzo, R. (1975). *Psychologie et Marxisme: La vie et l'oeuvre d'Henri Wallon*. Denoël/Gonthier.)

付記

本論作成にあたり, 温かい御指導を賜りました京都大学大学院人間・環境学研究科教授鯨岡峻先生に厚く御礼申し上げます。また貴重な観察の機会を与えて頂き, 今回事例の掲載を快諾して頂いた京都市メグミ幼稚園の先生方と子ども達に, ここに記して感謝の念を表します。

Ishino, Hideaki (Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University). *An Attempt to Describe 2- and 3-Year-Olds' "Being-with-Others": From the Viewpoint of Ambivalent Dynamics of Intersubjective Relationships*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2001, Vol.12, No.2, 110-122.

At the ages 2 or 3, children gain a new subjective perspective on self-engagement in interpersonal relationships, and increasingly appear to their caregivers as unique individuals. This article illustrated and analyzed 2- and 3-year olds' "being-with-others" based on longitudinal participant observation at a nursery school. Descriptions of several episodes revealed the following about both children's and caregivers' subjective experiences. (1) Children asserted themselves in relation to caregivers and other children, but they identified themselves as dependent upon their caregivers. (2) Caregivers tried to curb the excessive willfulness of children, but accepted their children emotionally. (3) Within such ambivalent children-caregivers relationships, children may experience "being-with-others", which would be grasped intersubjectively by caregivers. The findings were discussed in the theoretical terms of ambivalent dynamics of intersubjective relationships.

【Key Words】 2- and 3-year-olds' self, Caregivers, Self-other relationships, Participant observation

2000. 3. 10 受稿, 2001. 2. 20 受理

青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち

柴橋 祐子

(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科：配置大学千葉大学)

本研究では、青年期の友人関係の中での自己表明と他者の表明を望む気持ちの2側面を測定する尺度を作成し、それをもとに発達的特徴を検討した。731名の中学・高校生に質問紙調査を行った。友人への自己表明は「限界・喜びの表明」「意見の表明」「不満・要求の表明」「断りの表明」に分類された。高校生は中学生に比べて「限界・喜びの表明」「意見の表明」を多く行うことが示された。男子は女子に比べて「不満・要求の表明」を多く行い、女子は男子よりも「限界・喜びの表明」を多く行っていた。また、他者の表明を望む気持ちは「相談・依頼を望む気持ち」「率直な断りを望む気持ち」「率直な抗議・注意を望む気持ち」「独自の意見の表明を望む気持ち」に分類された。高校生は中学生に比べて「独自の意見を望む気持ち」が強いことが示された。すべての因子で男女差が認められ、女子は男子に比べて友人の率直な表明を望む気持ちを全般的に強く持っていた。さらに、2側面の関係を検討したところ、「限界・喜びの表明」「意見の表明」は他者の表明を望む気持ちのすべての因子と有意な正の相関を示し、「不満・要求の表明」「断りの表明」は、他者の表明を望む気持ちのすべての因子とほとんど有意な相関が見られなかった。これらの結果から、中学・高校生への主張性援助を行う際に考慮すべき点について論じた。

【キー・ワード】自己表明, 主張性, 他者の表明を望む気持ち, 友人関係, 青年期

問題と目的

主張性 (assertiveness) は、自他尊重に基づく自己表現のあり方を指し (Alberti, & Emmons, 1990), 「自分の気持ち, 考え, 信念などを正直に, 率直に, その場にふさわしい方法で表現し, そして相手が同じように発言することを奨励しようとする」ことと定義されている (平木, 1993)。率直に自己表現することは, 自分らしさを求める基本的な欲求であり, また, 異なる考えや感情を持つ人々が歩み寄るための手段・方法である。主張性の獲得は, 青年期においても一つの重要な課題であると考えられるが, 中学・高校生の主張性に関する実証的な研究は少ない。近年, 学校現場においても主張性能力を高めるための援助が導入されつつあり (例えば黒木, 2000), 援助を効果的に行うためにもこの年代の主張性の特徴を明らかにする必要があると思われる。

主張性は上で述べたように, 率直に自己表現し, 他者の率直な発言も受けとめようとすることと言える。しかし, これまでの主張性尺度では率直な自己表現ができるかどうかのみが測定され, 他者の自己表現の受けとめ方について検討されたものは見られない。このことは, 主張性尺度においてしばしば指摘されている, 適切な自己表現と攻撃的な自己表現の識別の問題 (Hollandsworth, Galassi, & Gay, 1977; Deluty, 1979) と関連していると考えられる。なぜなら, 攻撃的な自己表現は, 他者の発言

を軽んじたり, 無視し, 自分の欲求や考えを押し通そうとすることを指し (平木, 2000), 他者の発言の受けとめ方において, 適切な自己表現との違いが見られるからである。さらにもう一つの問題として, 自己表現が控えめでも, 他者の発言を受けとめる気持ちのある熟慮的な自己表現が, 受動的攻撃性 (Selman, Beardslee, Schults, Krupa, & Podorefsky, 1986) を持った非主張的なあり方と区別されていないことがあげられる。熟慮的な場合, 必ずしも不適切な自己表現のあり方とは言えず, 自己表現のみの測定では, こうした特徴を把握することは難しい (柴橋, 1998)。よって, こうした質的な違いを明らかにするためにも, 主張性を自己表現と他者表現の受けとめ方の2つの側面から捉える必要がある。

こうした受け手としての側面を問うことの必要性は他の社会的スキルに関する研究でも指摘されているが (菅原, 1998), その具体的な方法はまだ明らかになっていない。そこで, 本研究では, その一つの方法として, 他者の自己表現の受けとめ方を「他者が率直に自己表現することを望む気持ち」という観点から捉える。他者の率直さへの期待を持っている者は, 他者がはっきりと自分の気持ちや考えを言うことを排除, 抑圧することなく, 受けとめる気持ちがあると考えられる。また, 他者の率直な考えや気持ちを聞きたいという思いは, 相手の発言を促し, 上述の平木 (1993) の定義にある「相手が同じように発言することを奨励しようとする」態度と密接に

関わっていると言えよう。

以上のことから、本研究では、主張性のあり方を率直な自己表現と他者の率直な自己表現を望む気持ちの2側面から捉えることにした。なお、本論では以後、言語的な表現に限定するために、率直な自己表現を「自己表明」、他者が率直に自己表現することを望む気持ちを「他者の表明を望む気持ち」と記載する。

青年期は、親からの精神的な自立へ向かい、友人との関係がより重要となる。そして、一方で友人に支えられながらも、他方では友人とは異なる自分らしさを求めはじめるという状況下において、友人との親密性と自立性をいかに統合していくかという問題が生じる（近藤、1984；伊藤、1993）。親密でありながら自立的である友人関係を築くためには、自分の気持ちや考えを率直に伝え、友人の気持ちや考えを受けとめようとするのが求められる。青年期の友人関係の中では、どのような自己表明を多く行い、友人のどのような表明を望む気持ちを持っているのであろうか。また、性別や学校段階によってどのような特徴が見られるのであろうか。これらの特徴を明らかにすることにより、青年期の集団を対象とした主張性援助を行う際にどのような点に考慮すべきかが示唆されるものと思われる。本研究では、青年期の主張性のあり方の特徴を明らかにし、さらに、その特徴をもとに、主張性援助への示唆を得たいと考える。

先述したように、中学・高校生の主張性に関する研究は少なく、自己表明と他者の表明を望む気持ちの2側面を測定する尺度も見られない。そこで、本研究では、まず、この2側面を測定する尺度をそれぞれ新たに作成し、各側面の因子構造を明らかにした上で、1) 2側面の関係、および、2) 2側面の性差、学校段階の差に関して、以下の仮説を中心に検討する。

2側面の関係について

自己表明と他者の表明を望む気持ちは、どの程度同時に成り立つのであろうか。飯長（1995）は、伸び伸びと自己表現できる子どもは、他者をも認めるようになると述べている。また、平木（1993）では、相手の言い分を受けとめる気持ちがあれば、とりあえず自分の考えを伝えてみてもいいと思えることが指摘されている。これらの言及を踏まえると、自己表明と他者の表明を望む気持ちの間にある程度の正の相関があると考えられる。

しかし、自己表明と攻撃性の関連を検討した研究では、抗議の表明や不快感の表明など権利を守るための自己表明の因子と攻撃性には正の相関が見られ、肯定的感情の表明の因子と攻撃性は相関がないことが報告されている（Skatsche, & Kien, 1989；古市, 1995）。攻撃性の高い者は、他者の発言を無視したり、軽んじる態度が見られることから（平木, 2000）、他者の率直な表明を受けとめる気持ちがあまりないと考えられる。これらの結果は、

自己表明と他者の表明を望む気持ちの関係は、自己表明の内容によって異なる可能性を示唆するものと言えよう。そこで、本研究では、表明の内容によって2側面の関係は異なるという仮説を立て検討する。

2側面の性差、学校段階の差について

中学・高校生の友人関係の中での主張性のあり方は、この年代の友人関係の特徴が反映されるであろう。男子の友人関係は力・支配を重要視し、自立したつきあい方が多く、女子は自己開示や親密性をもとにした交流を中心にして、積極的に理解し合おうとする特徴が見られることが報告されている（和田, 1993；Buhmester, 1996；落合・佐藤, 1996）。榎本（1999）は中学生、高校生、大学生を対象に友人関係についての調査を行い、どの学校段階においても、女子は男子よりも自己開示や親密性を重視した活動である「相互理解活動」「親密確認活動」「閉鎖的活動」を多く行うこと、感情面で男子は女子よりも、友人には負けたくないという「ライバル意識」を強く感じていることなどを示している。これらのことから、男子は対立を恐れずに自分の権利、立場を守るための自己表明を多く行い、女子は友人との交流を求め、情緒的に結びつくような自己表明を多く行う傾向が見られることが予想される。

また、青年期の友人関係は、友人との類似性の確認による一体感を特徴とする段階（chum-group）から、友人の中に自分とは異なる面があることが許容できるようになり、違う人間として相手の言い分を認められる段階（peer-group）へと変化することが指摘されている（保坂・岡村, 1986）。斎藤（1986）はこうした変化がどの年代に見られるのかを確認するための調査を行い、中学生ではchum-group、高校生ではpeer-groupが中心となることを示している。さらに、落合・佐藤（1996）も、中学生で同調的なつきあい方が多く、高校生、大学生と年齢が上がるにつれてそうしたつきあい方が減ることを明らかにしている。こうした友人関係の質的な変化から、高校生は中学生に比べてお互いの異なる考えや気持ちを受け入れあえるようになり、率直に自己表明し合うことが多くなると予想される。

本研究の目的

以上のことから、本研究の仮説は次の4つにまとめられる。本研究では、青年期の主張性のあり方の特徴を明らかにし、主張性援助への示唆を得るために、仮説1~4の検討を行うことを目的とする。

仮説1 自己表明と他者の表明を望む気持ちの2側面の関係は表明の内容によって異なるであろう。

仮説2 男子は友人と相対峙するような自己表明を女子よりも多く行い、女子は友人と情緒的な共有を目指す自己表明を男子よりも多く行うであろう。

仮説3 友人との交流を求める女子のほうが男子よりも他

者の表明を望む気持ちが強いであろう。

仮説4 高校生は中学生よりも、自分の考えや感情を友人に表し、友人にも同じように率直な表明を望むであろう。

方 法

質問紙の作成

友人関係における自己表明 本研究における「自己表明」は、上で述べたように、これまでの主張性尺度で測定されてきた主張性を指す。主張性は多次元的に捉えられ、主に大人を対象とした尺度が数多く作成されているが、各尺度に含まれる具体的な自己表明の内容には違いが見られる。こうした状況の中で、濱口（1994）は、代表的な多次元的主張性尺度（PRI; Lorr, & More, 1980; DAI; Leah, Law, & Snyder, Jr., 1979; SIB; Arrindell, & Ende, 1985）の各因子に含まれる自己表明の内容を比較し、共通点、類似点を整理して主要な自己表明の分類を試みている。本研究では、この濱口（1994）の分類を参考にして、中学・高校生の友人関係の中での自己表明に関する質問項目を以下の手順で作成した。まず、先行研究（Rathus, 1973; Deluty, 1979; Lorr, & More, 1980; Michelson, Sugai, Wood, & Kazdin, 1983; 濱口, 1994; 古市, 1995）から友人関係の中での自己表明に関する項目を収集した。次に、これらの項目を濱口（1994）の分類を参考にして、次の6種類の内容に従って整理し、各々5, 6項目ずつを選び出した。1) 権利の防衛（自分の権利が友人の言動によって侵害されたとき、友人に対する否定的な感情を率直に伝え、行動を改めてくれるように要求する自己表明）、2) 要求の拒絶（友人の依頼や要求に応じることが自分にとって負担であるとき、無理をして引き受けずに率直に断る自己表明）、3) 意見の表明（まわりと違っていても自分の意見をはっきりと言い、まわりの人々にとって迷惑な行動に対して注意する自己表明）、4) 個人的な限界の表明（自分の過ちや限界を受け入れ、それを表す自己表明）、5) 援助の依頼（自分一人では処理できない問題に出会ったとき、友人に援助を求める自己表明）、6) 肯定的な感情の表明（感謝の気持ち、うれしさ、喜びなど肯定的な感情を表す自己表明）。

さらに、中学・高校生の日常の場面に、より即した項目となるようにするために、中学生、高校生、大学生の計15名に対して面接調査を行った。面接では、「友だちに対して、どのような場面で自分の気持ちや考えを表現することが難しかったか」について尋ね、そのときの状況や自分のとった行動について自由に話してもらった（所要時間は、約20分）。なお、大学生には中学・高校の頃を振り返って答えるよう求めた。この面接で得られた具体的な場面を参考にして、はじめに作成した項目をより身近な表現となるように修正、追加した。内容の重

複しているものや意味の曖昧な項目を削除し、最終的に30項目を自己表明尺度の質問項目とした。回答形式は、まったくあてはまらない（1点）から、とてもあてはまる（4点）までの4段階とした。

他者の表明を望む気持ち 「他者の表明を望む気持ち」については先行研究がほとんど見られない。そこで、本研究では、友人の表明も自己表明と同様に6つの具体的な内容に分けることができると考えられることから、これらの表明を友人が行うことをどの程度望むかを尋ねる項目を次の手順で作成した。まず、自己表明尺度の30項目の文章を自分が表明する場面から、今度は同じ表明を友人が行う場面に改め、次に、各々の表明をどの程度友人にしてほしいと思うかを尋ねる文章を作成した（例えば、「私は、友だちに誘われたとき、都合が悪ければはっきりそう言って断る」という断りの表明は、「私が誘ったとき、都合が悪いならば無理をしてつきあわないで、はっきりそう言って断ってほしいと思う」とした）。さらに、各項目が本研究で捉えようとしている友人の率直な表明を受けとめようとする気持ちとしての「他者の表明を望む気持ち」を表すものであるかどうかを検討した。その結果、個人的限界の表明および、肯定的感情の表明をもとに作成した8項目（例えば「私がしたこと友だちが喜んでくれたのなら、その気持ちを言ってほしい」「私に強く言い過ぎたと思ったときは、その気持ちを表してほしい」など）は、確かに友人の率直な表明を望む気持ちではあるが、それらは自分のために相手に対して率直な表明を要求するものであり、他者の率直な表明を受けとめようとする項目として相応しくないと考えられた。主張性研究者3名に意見を求めたところ、同様の見解が示されたことから最終的にこれら8項目を除外し、残りの22項目を他者表明を望む気持ちの質問項目とした。これらの項目は、行動レベルではともかく、少なくとも認知レベルでは他者の率直な自己表明を認め、受けとめようとする態度を問うものであると考えられる。回答形式は、まったくあてはまらない（1点）から、とてもあてはまる（4点）までの4段階とした。

被験者

中学1, 2年生327名（男子197名, 女子130名）、高校生1, 2年生404名（男子245名, 女子159名）の計731名。

実施手続き

授業時間を利用してクラスごとに一斉に実施した。質問紙には、「相手が同性の友だち（男子では男子の友だち、女子では女子の友だち）の時を思い浮かべて答えて下さい」と教示文が記され、調査実施者は、同様の教示を口頭でも行った。

結 果

1) 友人関係における自己表明

因子分析 自己表明に関する30項目について主因子法による因子分析を行った。自己表明の下位因子間には正の相関があることが指摘されていることから (Williams, & Akridge, 1996), 斜交回転 (プロマックス回転) を行った。固有値1以上の因子は8つ抽出され, 固有値は順に 5.14, 2.70, 1.85, 1.65, 1.25, 1.13, 1.08, 1.00 であった。固有値の落差が比較的大きく, 内容的にも解釈が可能な4因子解が妥当であると判断した。このとき, 4因子に

よる累積寄与率は37.8%であった。因子負荷量が.30に満たない4項目を削除し, 残り26項目を用いて再度因子分析を行った。回転後の因子パターン行列をTable 1に示す。

第1因子に高い負荷量を示した項目は, 個人的な限界の表明, 援助の依頼, 肯定的な感情の表明の3種類からなる8項目であった。これらは, つらさやうれしさ, 困っていることなどを隠さずに友人に伝える自己表明と解釈でき, 「限界・喜びの表明」の因子と命名した。これらの自己表明の背景には共通して友人への親密感や信頼感があり, そのために, 具体的な内容としては異なる

Table 1 自己表明のプロマックス回転後の因子負荷量

	F1	F2	F3	F4
(第1因子 限界・喜びの表明)				
友だちに強く言いすぎて悪かったと思ったときはその気持ちを伝える	.60	.00	-.15	.06
どうしていいかわからないことがあって困ったときは友だちに相談する	.59	-.14	.21	-.04
友だちに感謝しているときでも言葉にして表すことはない (R)	.56	-.02	-.14	.16
つらいときやくるしいときはその気持ちを友だちに伝える	.55	-.10	.27	-.13
友だちのしたことがいいなと思ったときはその気持ちを言葉で表す	.54	.11	-.15	-.06
友だちにほめられてうれしいときはその気持ちを素直に表す	.54	.03	-.01	-.05
おもしろいことや感動したことがあったとき友だちにその気持ちを伝える	.47	.20	-.07	-.04
一人ではできないようなことで困っているときは手伝ってと友だちに頼んでみる	.46	-.08	.12	.15
(第2因子 意見の表明)				
まわりの友だちにどう言われようと正しいと思うことは自分の信念を貫く	-.16	.70	-.14	.03
友だちに意見を求められたときは自分の考えをはっきり言う	.13	.57	.00	.03
友だちの考えに賛成できないとき「私はそうは思わない」とはっきり言う	-.01	.54	-.02	.01
みんなと違う考えを持っていても言わずにまわりに合わせる (R)	-.01	.51	.15	-.10
友だちと考え方が違うと思ったときでも話し合ったり議論しようとする	.14	.47	.01	-.14
まわりに迷惑な行動をしている友だちにははっきり注意する	.10	.45	.06	.13
分担した仕事をしようとしないう友だちにははっきり注意する	.09	.40	.11	-.03
(第3因子 不満・要求の表明)				
友だちに怒りや不満を感じたときでもその気持ちを表さないようにする (R)	-.05	.03	.63	-.12
友だちにかかわられて不愉快になっても怒ったりしない (R)	-.02	-.07	.50	.00
友だちの無神経な言い方で傷ついたときは自分の気持ちをはっきり言う	.11	.03	.45	-.01
友だちのしていることに不満を感じたときはその気持ちを友だちに言う	.00	.29	.37	-.01
友だちの行動が自分にとって迷惑だと思うときはその友だちにやめてと言う	-.08	.29	.36	.11
貸したものをいつまでも返してくれない友だちには返してとはっきり言う	-.04	.12	.31	.24
(第4因子 断りの表明)				
友だちに誘われたときは都合が悪くても断らない (R)	.02	-.04	-.15	.61
友だちから頼まれたことはやりたくないことでも断らない (R)	-.13	-.15	.30	.49
友だちに遊びにいこうと言われても一人でいたいときはそう言って断る	.01	.13	-.06	.43
友だちにノートを貸してと頼まれても使う予定があるときはそう言って断る	.15	-.00	-.01	.41
友だちに頼まれたことがやっつけはいけないことだと思っても引き受ける (R)	.10	.02	.03	.37

(R) は反転項目

因子間相関	F2	F3	F4
F1	.35	.21	.12
F2		.42	.25
F3			.34

3種類の自己表明が一つの因子としてまとまったものと推測される。また、第2因子は意見の表明に分類された7項目からなり、「意見の表明」と命名した。第3因子は、権利の防衛に分類された6項目で、表明の内容を具体的に表すために「不満・要求の表明」と命名した。第4因子は、要求の拒絶に分類された5項目で、「断りの表明」の因子と命名した。

各下位尺度の内的整合性を検討するため、下位尺度内でのI-T相関を調べたところ、各項目の相関係数は、第1因子が.40～.48、第2因子が.42～.55、第3因子が.37～.43、第4因子が.31～.40であった。また、尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を調べたところ、第1因子が.77、第2因子が.74、第3因子が.70、第4因子はやや低めで.60であった。Spearman-Brownの修正を施したところ、各因子の信頼性係数は、第1因子が.79、第2因子が.76、第3因子が.72、第4因子が.65でほぼ満足できる値が得られた。以上の結果から、自己表明尺度の因子内整合性と内的一貫性が認められたと判断した。

学校段階・性別による違い 各因子に属する項目得点の総和を項目数で除したものを各因子の得点とした。Figure 1に4つの因子の学校段階、性別の得点を示す。

自己表明の4つの因子の得点ごとに、学校段階と性別を2要因とする分散分析を行った。その結果、第1因子「限界・喜びの表明」では、学校段階の主効果 ($F(1, 724) = 8.9, p < .01$)、性の主効果 ($F(1, 724) = 92.7, p < .01$) がともに有意であった。高校生が中学生よりも、女子が男子よりも高かった。第2因子「意見の表明」では、学校段階の主効果が有意で ($F(1, 724) = 19.8, p < .01$)、高校生が中学生よりも高かった。第3因子「不満・要求の表明」では、性の主効果が有意で ($F(1, 724) = 6.7, p < .01$)、男子が女子よりも高かった。第4因子「断りの表明」では、交互作用が認められた ($F(1, 724) = 7.0, p < .01$)。学校段階別に性の単純主効果を検定した結果、中学生で男子が女子よりも高く ($F(1, 324) = 4.0, p < .05$)、高校生では差が有意ではなかった。また、男女別に学校

段階の単純主効果を検定した結果、女子では高校生が中学生よりも高く ($F(1, 287) = 4.8, p < .05$)、男子では差が有意ではなかった。

これらの結果から、高校生は中学生よりも「限界・喜びの表明」「意見の表明」を多く行うこと、「断りの表明」は、女子で、高校生が中学生よりも多く行うことが示された。また、女子は男子に比べて「限界・喜びの表明」を多く行い、男子は女子に比べて「不満・要求の表明」を多く行うことがわかった。

さらに、4つの因子のうち、どの自己表明が行われやすいかを明らかにするために、学校段階の男女別に繰り返しのある一要因の分散分析を行い、各因子の得点を比較した。その結果、中学生、高校生男女のすべてで、4つの因子の得点間に1%水準の有意差が見られた (中学男子 $F(3, 582) = 50.47$; 中学女子 $F(3, 387) = 68.57$; 高校男子 $F(3, 714) = 16.50$; 高校女子 $F(3, 474) = 99.06$)。LSD法を用いた多重比較によると、中学男子では「断りの表明」が他の3つの因子の得点よりも有意に高く、「限界・喜びの表明」、「不満・要求の表明」は「意見の表明」よりも有意に高かった ($MSE = .27, p < .05$)。中学女子では、「限界・喜びの表明」が他の3つの因子の得点よりも有意に高く、「断りの表明」が「意見の表明」「不満・要求の表明」よりも有意に高かった ($MSE = .25, p < .05$)。高校男子では、「断りの表明」が他の3つの因子の得点よりも有意に高く、「限界・喜びの表明」が「不満・要求の表明」、「意見の表明」よりも有意に高かった ($MSE = .40, p < .05$)。高校女子では、「限界・喜びの表明」が他の3つの因子の得点よりも有意に高く、「断りの表明」が「意見の表明」「不満・要求の表明」よりも有意に高かった ($MSE = .31, p < .05$)。

これらより、4つの自己表明のうち、中学・高校ともに男子は「断りの表明」を最も多く行い、女子は「限界・喜びの表明」を最も多く行うことがわかった。また、最も行われにくい自己表明は中学・高校の男女すべてで「意見の表明」であった。さらに、「不満・要求の表明」も中学男子以外では「意見の表明」と同様に最も行われ

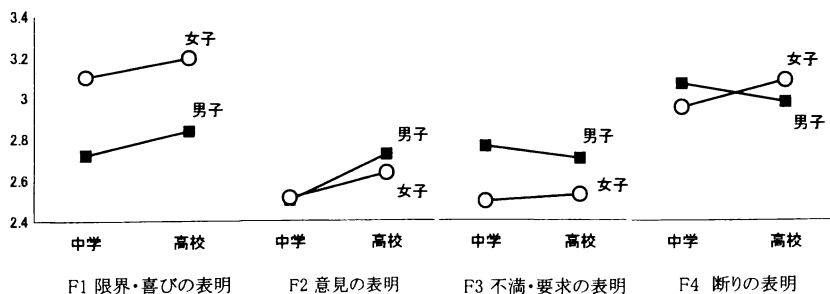


Figure 1 自己表明4因子の得点

ない自己表明であることが示された。

2) 他者の表明を望む気持ち

因子分析 友人の率直な自己表明を望む気持ちに関する22項目について主因子法による因子分析を行ったところ、固有値1以上の因子が4つ得られた。このとき、4因子による累積寄与率は54.5%であった。そこで、因子数を4としてプロマックス回転を行い、さらに、因子負荷量が.30に満たない4項目を削除して再度因子分析を行った。回転後の因子パターン行列をTable 2に示した。

第1因子は、「友だちがづらいときや苦しいことがあるときはそう言ってほしいと思う」などの5項目で、友人の個人的な限界の表明や援助の依頼を望む気持ちであった。そこで、「相談・依頼を望む気持ち」の因子と命名した。第2因子は、「私から頼まれたことができないときははっきりそう言ってほしいと思う」などの4項目で、友人の要求の拒絶に関する項目であることから、「率直な断りを望む気持ち」の因子と命名した。第3因子は、「私が言った言葉で腹が立ったり不愉快になった

ときはそう言ってほしいと思う」などの5項目で、友人の権利の防衛および意見の表明（特にその中の注意）を望む気持ちからなり、「率直な抗議・注意を望む気持ち」の因子と命名した。第4因子は、「私が友だちに意見を求めたときは自分の考えをはっきり言ってほしいと思う」など、友人の考えや意見の表明を望む気持ちの4項目であることから、「独自の意見の表明を望む気持ち」の因子と命名した。

各下位尺度の内的整合性を検討するために、下位尺度内のI-T相関を調べたところ、各項目の相関係数は、第1因子が.55~.65、第2因子が.42~.69、第3因子が.53~.66、第4因子が.46~.52であった。また、尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を調べたところ、第1因子「相談・依頼を望む気持ち」は.81、第2因子「率直な断りを望む気持ち」は.76、第3因子「率直な抗議・注意を望む気持ち」は.82、第4因子「独自の意見の表明を望む気持ち」は.70であった。これより、他者の表明を望む気持ち尺度の因子内整合性と内的一貫性が

Table 2 他者の表明を望む気持ちのプロマックス回転後の因子負荷量

	F1	F2	F3	F4
(第1因子 相談・依頼を望む気持ち)				
友だちがづらいときや苦しいときは私にそう言ってほしいと思う	.71	-.06	-.06	.15
私に迷惑がかりそうなことでも困っているときは頼んでみてほしいと思う	.70	.01	.07	-.16
1人でできないことで困っているときは「手伝って」と言ってほしいと思う	.68	.02	.05	.02
友だちにとって嬉しいことがあったときはその気持ちを伝えてほしいと思う	.62	.02	-.08	.15
困っているときや何か手伝ってほしいことがあるときは言ってほしいと思う	.59	.20	.08	-.06
(第2因子 率直な断りを望む気持ち)				
私から頼まれたことができないときははっきりそう言ってほしいと思う	.01	.96	-.13	-.05
私が誘ったときもし都合が悪ければ無理してつきあわないでそう言って断ってほしいと思う	-.02	.66	.04	.03
私が頼んだことでもやりたくないときははっきりそう言ってほしいと思う	-.08	.57	.22	-.01
私が借りたものを返し忘れていたときは「返して」と言ってほしいと思う	.09	.39	-.04	.16
(第3因子 率直な抗議・注意を望む気持ち)				
私が言った言葉で腹が立ったり不愉快になったときはそう言ってほしいと思う	-.03	-.02	.78	-.03
私がしたことやいやな気持ちがしたときはそう言ってほしいと思う	-.01	.04	.68	-.12
分担した仕事を私がしていないと思ったときはそう言ってほしいと思う	.07	.07	.64	.05
私の行動が友だちにとってめいわくなときはそう言ってほしいと思う	-.04	.04	.60	.17
私の無神経な言い方で傷ついたときはそう言ってほしいと思う	.16	.11	.54	.01
(第4因子 独自の意見の表明を望む気持ち)				
私が友だちに意見を求めたときは自分の考えをはっきり言ってほしいと思う	.01	.01	-.13	.78
私の意見に賛成できないと思ったときは自分の考えを言ってほしいと思う	.06	.04	.08	.51
私と考え方が違うと友だちが思っても話し合ったり議論してほしいと思う	-.04	.20	.15	.41
まわりの人と違った考えをもっているときは自分の考えを言ってほしいと思う	.14	-.11	.20	.37

因子間相関	F2	F3	F4
F1	.39	.58	.58
F2		.56	.42
F3			.56

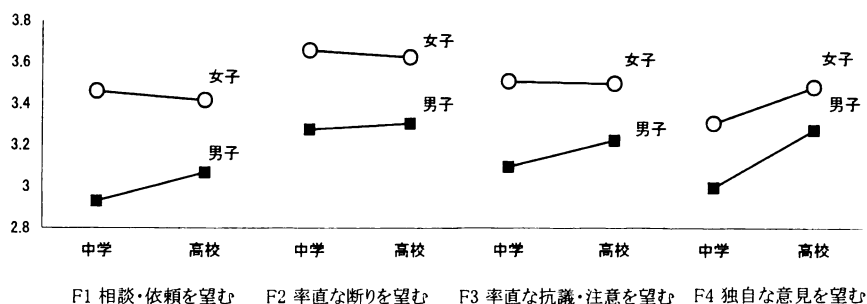


Figure 2 他者の表明を望む気持ち4因子の得点

認められた。

学校段階・性別による違い 各因子に属する項目得点の総和を項目数で除したものを各因子の得点とした。Figure 2に、他者の表明を望む気持ちの4つの因子の学校段階・性別の得点を示した。

他者の表明を望む気持ちの4つの因子の得点ごとに、学校段階と性別を2要因とする分散分析を行った。その結果、学校段階の有意な主効果が「独自の意見の表明を望む気持ち」で見られ ($F(1,727)=23.4, p<.01$)、高校生が中学生よりも高かった。また、4因子すべてにおいて性の主効果が有意で、女子が男子よりも高かった(第1因子「相談・依頼を望む気持ち」 $F(1,726)=81.5; p<.01$, 第2因子「率直な断りを望む気持ち」 $F(1,725)=54.1; p<.01$, 第3因子「率直な抗議・注意を望む気持ち」 $F(1,725)=46.8; p<.01$, 第4因子「独自の意見の表明を望む気持ち」 $F(1,727)=32.6; p<.01$)。有意な交互作用は見られなかった。

これより、女子は男子よりも他者の表明を望む気持ちのすべての因子の得点が高く、また、高校生は中学生よりも「独自の意見の表明を望む気持ち」の得点が高いことが示された。

さらに、4つの因子のうち、どのような他者の表明を望むのかを明らかにするために、学校段階の男女別に、繰り返しのある一要因の分散分析を行い、各因子の得点を比較した。その結果、中学生、高校生男女すべてで、4つの因子の得点間に1%水準の有意差が見られた(中学男子 $F(3, 585)=8.04$; 中学女子 $F(3, 387)=14.65$; 高校男子 $F(3, 723)=11.41$; 高校女子 $F(3, 474)=4.41$)。4つの因子の得点についてLSD法による多重比較を行ったところ、中学男子では、「率直な断りを望む気持ち」の得点が他の3つの因子の得点よりも高く、「率直な抗議・注意を望む気持ち」が「相談・依頼を望む気持ち」「独自の意見の表明を望む気持ち」よりも高かった($MSE=.47, p<.05$)。中学女子では、「率直な断りを望む気持ち」が他の3つの因子の得点よりも高く、「相談・依頼を望む気持ち」「率直な断りを望む気持ち」は「独自の意見の表明を望む気持ち」の得点よりも高かった

($MSE=.25, p<.05$)。高校男子では、「相談・依頼を望む気持ち」が他の3つの因子の得点よりも低かった($MSE=.40, p<.05$)。高校女子では、「率直な断りを望む気持ち」の得点が「相談・依頼を望む気持ち」よりも高く、その他では有意な差が見られなかった($MSE=.31, p<.05$)。

これらより、中学生の男女では「率直な断りを望む気持ち」が強く、「独自の意見の表明を望む気持ち」が弱いことがわかった。また、高校男子では「相談・依頼を望む気持ち」が弱く、中学男子でも同様の傾向があることが示された。

3) 自己表明と他者の表明を望む気持ちの関係

自己表明と他者の表明を望む気持ちの因子間の相関係数の値をTable3に示した。

被験者全体で見ると、自己表明の第1因子「限界・喜びの表明」は、他者の表明を望む気持ちの4つの因子と中程度の有意な正の相関が認められた。学校段階・男女別で見ると、中学生の男女で「率直な断りを望む気持ち」と関連がなかったが、その他ではすべて他者の表明を望む気持ちと有意な正の相関が示された。

自己表明の第2因子「意見の表明」は、特に「独自の意見の表明を望む気持ち」と中程度の有意な正の相関を示した。また、その他の因子とはやや低めの有意な正の相関が認められた。ただし、学校段階・男女別に見ると、女子では「意見の表明」は「独自の意見の表明を望む気持ち」とのみ有意な相関が示された。

自己表明の第3因子「不満・要求の表明」は、他者の表明を望む気持ちのすべての因子と有意な相関が見られなかった。学校段階・男女別では、中学男子で有意な相関が示されたが相関値は低めであった。

自己表明の第4因子「断りの表明」は、中学生の男女で「率直な断りを望む気持ち」と低めの有意な相関が見られたが、その他では、他者の表明を望む気持ちと有意な相関は示されなかった。

Table 3 自己表明と他者の表明を望む気持ちの相関

(他者の表明を望む気持ち)		相談・依頼を望む	率直な断りを望む	率直な抗議注意を望む	独自の意見を望む
(自己表明)					
限界・喜びの表明					
中学	男子	.42**	.15	.39**	.37**
	女子	.52**	.13	.21**	.29**
高校	男子	.31**	.25**	.30**	.33**
	女子	.42**	.26**	.27**	.46**
全体		.46**	.27**	.36**	.41**
意見の表明					
中学	男子	.27**	.25**	.29**	.43**
	女子	.20	.18	.17	.41**
高校	男子	.29**	.11	.26**	.28**
	女子	.14	.11	.16	.28**
全体		.22**	.14**	.22**	.35**
不満・要求の表明					
中学	男子	.19**	.01	.08	.22**
	女子	-.05	-.11	-.10	.15
高校	男子	.10	-.06	.08	.08
	女子	.09	.06	.13	.15
全体		.03	-.07	.01	.09
断りの表明					
中学	男子	.06	.19**	.08	.15
	女子	-.09	.26**	.16	.21
高校	男子	.09	.11	.04	-.05
	女子	.03	.17	.19	.16
全体		-.00	.15**	.09	.08

** $p < .01$

考 察

自己表明について

中学・高校生の友人関係における自己表明は、因子分析により、「限界・喜びの表明」「意見の表明」「不満・要求の表明」「断りの表明」の4つに分けられた。これらの自己表明には、男女差、学校段階の差が認められた。男子は女子よりも「不満・要求の表明」を多く行い、女子は「限界・喜びの表明」を男子よりも多く行うことがわかった。「不満・要求の表明」は、友人との対立を招く可能性があっても自分の権利を守るためにはっきりと抗議する自己表明で、これは他者と相対峙する自己表明と考えられる。「限界・喜びの表明」は、友人にうれしさを表し、困ったことやつらい気持ちを伝える自己表明で、これらは情緒的な交流を求める自己表明と解釈することができる。これらより、仮説2が支持された。

また、高校生は中学生に比べて、「限界・喜びの表明」「意見の表明」の得点が高く、「高校生は中学生よりも、自分の考えや感情を友人に表す」という仮説4の前半部

分は、これらの自己表明において支持された。また、「断りの表明」でも女子のみではあったが、同様の傾向が見られた。これより、高校生は中学生に比べて、うれしさやつらさなどを友人に伝え、自分の意見をはっきりと言い、また、女子では、無理な要求に対してははっきりと断ることが示された。ただし、「不満・要求の表明」では学校段階による違いが見られなかった。友人に対して不満に思っている気持ちを率直に伝え、迷惑な行動を改めてくれるように要求することは、対立などの否定的な結果をもたらす可能性が高く、同調的なつきあい方が減り、異質性を認め合う高校生の友人関係の中でも、こうした自己表明は、中学生に比べて多く行われるとは言えないことが示唆された。このように、量的な変化は見出されなかったが、質的な側面を含めて今後、検討を重ねる必要があると考えられる。

さらに、どのような内容の自己表明が行われやすいのかについて検討した結果、中学、高校ともに女子では「限界・喜びの表明」の得点が最も高く、友人への親密感を表す自己表明が他の表明に比べて多く行われていた。また、男子では、「断りの表明」が最もよく行われる自己表明であった。無理をして相手の依頼に応じ、自分が辛くなるようなことはしないという結果は、自立したつきあい方が多いと言われる男子の友人関係(落合・佐藤, 1996)の一面を示唆し、男子の自己表明の特徴と言えよう。一方、最も行われぬ自己表明は、中学生、高校生男女のすべてで「意見の表明」であった。また、中学男子以外では、「不満・要求の表明」も最も行われることの少ない自己表明であった。意見や不満などの他者と直面する自己表明、すなわち、言わずにおけば、とりあえず対立は避けられるような自己表明は、あまり行われぬことが示された。この背景には、自己を主張することに伴う軋轢を避けようとする現代の青年の友人関係の特徴(福富, 1997)がうかがわれる。

他者の表明を望む気持ちについて

他者の表明を望む気持ちは、因子分析により、友人の「相談・依頼を望む気持ち」「率直な断りを望む気持ち」「率直な抗議・注意を望む気持ち」「独自の意見を望む気持ち」の4つに分けられた。

他者の表明を望む気持ちの4因子すべてにおいて男女差が見られ、女子が男子よりも高かった。この結果は、仮説3に一致していた。女子は男子に比べて、友人が率直に自分の考えや気持ちを言うことを望んでいると言える。他者の表明を望む気持ちには、相手の考えや気持ちを確かめたいという思いがあると考えられ、女子にとっては男子よりも他者の気持ちや考えを確認することが重要な意味を持っていることが示唆される。これは、女子の人間関係への関与の強さ(落合・佐藤, 1996)や他者との関係を育成したり、維持しようとする女子の特徴と

関わりがあると考えられる。

学校段階の差は「独自の意見の表明を望む気持ち」で見られた。これより、仮説4の後半部分、すなわち、高校生は中学生よりも友人の率直な表明を望むであろうという予測が、友人の意見表明を望む気持ちにおいて成り立つことが示された。異質性を認め、相互理解を求める高校生の友人関係では、友人が異なる意見を言うことを自分への攻撃としてではなく受けとめられるようになり、自分とは違う考えを知りたいという気持ちが強くなるのが推察される。ただし、意見以外の他者の表明を望む気持ちでは中学生と高校生で違いが見られなかった。その後も発達的に変化が見られないのかは、今後、高校生以降の年齢も対象にして検討することにより明らかになるであろう。

また、他者の表明を望む気持ちの4つの因子の得点を比較した結果を見ると、男子では、中学、高校ともに「相談・依頼を望む気持ち」が相対的に弱いことが共通点としてあげられる。友人から援助を求められ、相談されるということを中学、高校生の男子はあまり望んでいないことが示唆された。なぜこのような傾向が男子で見られるのかは、性役割期待の影響などが考えられるが、今回の調査では明らかにすることはできない。また、本研究では、友人一般について回答を求めているために、親しさには違いがあり、親友に限った場合は、結果が異なる可能性も考えられる。

4つの因子の比較から得られたもう一つの特徴としては、中学生で、友人の「独自の意見の表明を望む気持ち」が弱いことがあげられる。中学生にとって友人は一緒に活動し、一緒に遊ぶための存在であり、同じであることが強く求められる(高垣, 1994; 落合・佐藤, 1996)。友人の独自の意見を望む気持ちがあまりないという本研究の結果は、こうした関係を反映するものと思われる。

自己表明と他者の表明を望む気持ちの関係について

自己表明と他者の表明を望む気持ちの2側面の関係は、因子ごとに異なることが示され、仮説1が支持された。学校段階、男女別の検討も行ったが、関係性に顕著な違いが見られなかったため、ここでは全体で見た場合の2側面の関係について考察する。

「限界・喜びの表明」と他者の表明を望む気持ちのすべての因子との間に中程度の有意な正の相関が認められた。自分のうれしさを表し、困ったときには友人に相談できる者は、友人の同じような表明だけではなく、その他のさまざまな表明も望む気持ちを持っていることができる。こうした自己表明は相手への親密感や信頼感に基づくものと考えられ、そうした感情があるかどうか友人の率直な表明を望む気持ちと関わっていることが示唆された。

「意見の表明」は、他者の表明を望む気持ちのすべて

の因子と有意な正の相関を示し、中でも特に「独自の意見の表明を望む気持ち」と相対的に高い相関が認められた。これより、自分の意見をはっきりと言う者は友人の独自の意見を望む気持ちを持ち、意見には、言うことと聞きたいと思うこととの間に双方向性があると解釈できる。逆に見れば、友人が意見を言うことを望む気持ちが少ない者は、自分の意見を言えない傾向があると言えよう。西平(1992)は、「発言できないのは、他人が発言すると、でしゃばりだというように否定的に感じるために今度は自分がしゃべろうとすると相手もそう思うに違いないという気持ちがわいて、発言を抑制してしまうのでないか」と述べている。この結果の背景には、こうした感情があるのではないかと考えられるが、本研究では明らかでなく、今後さらに心理面を含めて検討する必要があると思われる。

「不満・要求の表明」と「断りの表明」は、他者の表明を望む気持ちのすべての因子とほとんど有意な相関が示されなかった。したがって、友人の迷惑な行動や無理な要求に対してははっきりと「ノー」と言えることと友人の率直な表明を望む気持ちとは独立したものであることが示唆された。

2側面の関係に以上のような多様性が示された理由として、次のことが推察される。「限界・喜びの表明」「意見の表明」は、自分の気持ちや考えを積極的に友人に伝え、友人と関わろうとする自己表明と見られる。こうした自己表明をする者は、友人にも率直に自分の気持ちや考えを言ってほしいという思いを持っていると考えられ、それが他者の表明を望む気持ちと関連性が見られた背景にあるのではないだろうか。これに対して、「不満・要求の表明」「断りの表明」は、関係が壊れる可能性があっても自分の意志をはっきりと示す自己表明であり、友人との関わりを求める気持ちとは直接繋がりがなく、そのため、他者の表明を望む気持ちとの間に関連性が見られなかったものと思われる。本研究では、他者の表明の受けとめ方を「他者の率直な表明を望む気持ち」という、いわば、相手の率直さへの期待の程度から測定しているが、例えば、他者の表明の受けとめ方を「相手の率直な表明を認める、否定はしない」といったレベルで捉えれば、また異なった結果が示される可能性も考えられる。

さらに、本研究では友人関係一般について尋ねているため、相手との親しさには幅があり、例えば、親友との間に限った場合は、お互いに受けとめ合うことができ、「不満・要求の表明」や「断りの表明」が他者の表明を望む気持ちと正の相関を示す可能性もあるであろう。これらについては、今後、更に検討を重ね、明らかにする必要がある。

主張性援助への示唆と今後の課題

以上の結果から次のことが主張性援助のあり方について示唆される。

主張性のあり方には、学校段階および性別による違いが認められ、たとえば、男子は困っていることうれしいことなどを素直に表明することが女子に比べて少なく、他者の表明を望む気持ちも少なかった。女子は、友人の行動の不満を持っていてもそれを言葉で伝えることが男子に比べて少ない。こうした特徴を考慮しながら、不足している部分を補う援助が求められよう。また、中学、高校生の友人関係の中では、「意見の表明」「不満・要求の表明」があまり行われなことが示された。友人との関係を保つことに気を遣い、他者のまなざしを強く意識する青年期では自分の考えを主張したり、いやだと思ふことを率直に表すことが難しいのは当然なことかもしれない。したがって、この年代の集団に対して主張性援助をする際には、こうした背景を考慮し、安心感の持てる場をまず作ることが重要な課題となると思われる。その中で、率直な自己表明が否定的に評価されず、かえって大切なことだと思える経験を持つことができれば、この年代においてもこれらの自己表明ができるようになるのではないかと考えられる。

また、「不満・要求の表明」「断りの表明」は、他者の率直な表明を望む気持ちと有意な相関が見られなかった。したがって、これらの自己表明については特に、表明できるかどうかだけではなく、他者の表明の受けとめ方という側面も考慮して援助を行う必要があると言えよう。

さらに、これらの一般的特徴に加え、個人差を踏まえた援助が求められる。各人の主張性の特徴、すなわち、どのような自己表明が苦手で、どのような他者の表明を受けとめられないのか、2側面のどちらが優位であるのかなど、を2側面の尺度によって明らかにし、それをもとに各人に応じた援助のあり方を考えていくことが有効であろう。

今後の課題として、各人の主張性のあり方を規定している認知的、感情的な背景を明らかにする必要がある。なぜ、自己表明ができないのかなど、心理面も含めて各人の特徴を捉えることにより、より一層効果的な援助を行うことができると思われる。

最後に、本研究に残された課題として自己表明に含まれる内容を更に検討することがあげられる。本研究では、これまでの主張性尺度に含まれる自己表明の具体的な内容を取り上げた。しかし、主張性の権利として、例えば、自分の欲しいものを欲しいと言うことや有能性を表明することなどをあげているものも見られ (Dickson, 1982; 平木, 1993)、こうした自己アピールの側面等も含めて、より広く自己表明の内容を検討していくことが求められる。

文 献

- Alberti, R. E., & Emmons, M. L. (1994). *自己主張トレーニング* (菅沼憲司・ミラー・ハーシャル, 訳). 東京: 東京図書. (Alberti, R. E., & Emmons, M. L. (1990). *Your perfect right: A guide to assertive behavior* (6th ed.). California: Impact Publishers.)
- Arrindell, W. A., & Ende, J. (1985). Cross-sample invariance of structure of self-reported distress and difficulty in assertiveness. *Advances in Behavioral Research & Therapy*, 7, 205-243.
- Buhrmester, D. (1996). Need fulfillment, interpersonal competence, and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb, & W. W. Hartup. (Eds.), *The company they keep: Friendship in childhood and adolescence* (pp.158-185). New York: Cambridge University Press.
- Deluty, R. H. (1979). Children's action tendency scale: A self-report measure of aggressiveness and submissiveness in children. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, 47, 1061-1071.
- Dickson, A. (1993). 「アサーティブネス」のすすめ (山本光子, 訳). 東京: 柘植書房. (Dickson, A. (1982). *A woman in your own right*. England: Quatered Books Ltd.)
- 榎本淳子. (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化. *教育心理学研究*, 47, 180-190.
- 福富 護. (1997). 思春期が人生の中でもつ意味. *児童心理*, 2月号 臨時増刊 (pp.3-12). 東京: 金子書房.
- 古市裕一. (1995). 児童用主張性検査の開発. *こころの健康*, 10, 69-76.
- 濱口佳和. (1994). 児童用主張性尺度の構成. *教育心理学研究*, 42, 463-470.
- 平木典子. (1993). *アサーション・トレーニング: さわやかな自己表現のために*. 東京: 金子書房.
- 平木典子. (2000). *自己カウンセリングとアサーションのすすめ*. 東京: 金子書房.
- Hollandsworth, Jr. J. G., Galassi, J. P., & Gay, M. L. (1977). The adult self-expression scale: Validation by multitrait-multimethod procedure. *Journal of Clinical Psychology*, 33, 407-415.
- 保坂 亨・岡本達也. (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討. *心理臨床学研究*, 4, 15-26.
- 飯長喜一郎. (1995). たくましい社会性を心理臨床の立場から考え直す. 二宮克美・繁多 進 (編), たくましい社会性を育てる (pp.153-170). 東京: 有斐閣選

- 書。
- 伊藤美奈子。(1993)。個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討。心理学研究, 64, 115-122.
- 近藤邦夫。(1984)。大学生の成長におけるグループ的接近。村瀬孝雄(編), 青年期危機の心理臨床(pp.139-170)。東京: 福村出版。
- 黒木幸敏。(2000)。中学校へのアサーション(自己表現)・トレーニング導入に関する研究。兵庫教育大学大学院学校教育専攻生徒指導コース修士論文(未公開)。
- Leah, J. A., Law, H. G., & Snyder, Jr., C. W. (1979). The structure of self-reported difficulty in assertiveness: An application of three-mode common factor analysis. *Multivariate Behavioral Research*, 14, 443-462.
- Lorr, M., & More, W. (1980). Four dimensions of assertiveness. *Multivariate Behavioral Research*, 15, 127-138.
- Michelson, L., Sugai, D. P., Wood, R. P., & Kazdin, A. E. (1992)。子どもの対人行動 — 社会的スキル訓練の実際(高山 巖・佐藤正二・佐藤容子・園田順一, 訳)。東京: 岩崎学術出版社。(Michelson, L., Sugai, D. P., Wood, R. P., & Kazdin, A. E. (1983)。 *Social skills assessment and training with children*. New York: Plenum Press.)
- 西平直喜。(1992)。青年分析。東京: 大日本図書。
- 落合良行・佐藤有耕。(1996)。青年期における友達とのつきあい方の発達的变化。教育心理学研究, 44, 55-65.
- Rathus, S. A. (1973)。A 30-items schedule for assessing behavior. *Behavior Therapy*, 4, 398-406.
- 斉藤憲司。(1986)。思春期における友人関係の発達的变化。東京大学大学院教育学研究科修士論文(未公開)。
- Selman, R. L., Beardslee, W., Schults, L., Krupa, M., & Podorefsky, D. (1986)。Assessing adolescent interpersonal negotiation strategies: Toward the integration of structural and functional models. *Developmental Psychology*, 22, 450-459.
- Skatche, R., & Kien, R. (1989)。A comparison of factorial dimensions of assertion obtained from anglo-american and german samples, with special reference to Eysencks' personality variables. *Personality and Individual Difference*, 10, 219-228.
- 柴橋祐子。(1998)。思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題。カウンセリング研究, 31, 19-26
- 菅原健介。(1998)。対人不安と社会的スキル。相川 充・津村俊充(編), 社会的スキルと対人関係(pp.112-128)。東京: 誠信書房。
- 高垣忠一郎。(1994)。思春期の心理。東京: あゆみ出版。
- 和田 実。(1993)。同性友人関係: その性および性別役割タイプにおける差異。社会心理学研究, 8, 67-75.
- Williams, E. R., & Akridge, R. L. (1996)。The responsible assertion scale: Development and evaluation of psychometric qualities. *Vocational Evaluation and Work Adjustment Bulletin*, 10, 19-23.

付記

本論文は、千葉大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものです。調査にご協力していただきました生徒の皆様、先生方に心より感謝いたします。

本論文の作成にあたり、懇切丁寧なご指導をいただきました千葉大学教育学部教授 中澤 潤先生、助教授 保坂 亨先生に心より御礼申し上げます。

Shibahashi, Yuko (The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University). *Self-Expression and Expectation of Friends' Expression in Adolescence*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2001, Vol.12, No.2, 123-134.

This study of adolescent friendship investigated the features of adolescent (1) self-expression, (2) expectation of other's expression, and (3) the relationship between self-expression and expectation of other's expression. Junior and senior high school students ($N=731$) filled out a questionnaire about these aspects of their friendships. Factor analysis of the data revealed 4 factors for self-expression and expectation of friends' expression, respectively, and the following was found in relation to these factors. (1) Boys reported expression of "dissatisfaction and demand for friends' behavior" more frequently than girls, whereas girls reported expression of "personal limitation and pleasure" more frequently than boys. Senior high school students reported expression of "personal limitation and pleasure" and of "opinion", more often than junior high school students. (2) Girls expected others' expression more than boys, for all factors. (3) Expression of "personal limitation and pleasure" and "opinion" correlated moderately with all factors, for expectation of friends' expression, whereas expression of "dissatisfaction and demand for friends' behavior" and "rejection of friends' request" almost did not correlate significantly with expectation factors.

[Key Words] Self-expression, Assertiveness, Social cognition, Friendship, Adolescence

1999. 12. 20 受稿, 2001. 4. 13 受理

問題行動の継続過程の分析：問題行動を巡る生徒関係のあり方から

加藤 弘通

(中央大学大学院文学研究科)

本研究の目的は、問題行動及び指導に対する生徒の意味づけを明らかにすることにより生徒同士の関係のあり方から問題行動の継続過程について検討することである。問題行動の繰り返しによって高校を中途退学した少年F(18歳)を対象に17回のインタビューを行い、彼の問題行動や指導、自己に対する意味づけを探った。また、Fと同時期に同校に在籍していた生徒4名へのインタビューから、他の生徒の問題行動や指導、及び問題行動を起こす生徒(F)への意味づけを探った。そして、Fと他の生徒の意味づけを比較し、問題行動を巡る生徒同士の関係のあり方から問題行動の継続過程について検討した。その結果、(1)問題行動・指導に対する意味づけは、生徒が置かれた状況によって異なること、それと対応して、(2)問題行動を起こす生徒も個々の生徒との関係に応じて、自らの問題行動に対して異なる意味づけをしていることが明らかになった。Fは「悪ガキ」との関係において、問題行動を肯定的に意味づけ(「格好いい」)、親密な関係を築く一方で、悪ガキ以外の生徒との関係においては、問題行動を否定的に意味づけ(「(自分は)抹消されている」)、関係を希薄化させていた。このことから、Fが問題行動を起こすほど、そして、それに対する指導を受けるほど問題行動が繰り返されやすくなる生徒同士の関係が生じるという、Fの問題行動・指導を巡る循環関係の存在が示唆された。

【キー・ワード】問題行動、継続過程、意味づけ、生徒関係、生活史法

問 題

近年、「生徒間暴力や教師への反抗といった教育上指導を要する」中高生の「問題行動」の深刻化が社会的に大きな関心を集めている。

教育現場において、こうした問題行動が深刻化するのには、それが特定の生徒によって繰り返されるときである。生徒が問題行動を起こせば、教師はやめさせようとする。一方、生徒も自分が起こした問題行動のために、また、それをやめさせるために指導がなされていることは知っている。にもかかわらず、同じ生徒によって問題行動が繰り返され、その過程で問題行動の質もエスカレートしていく。以上のようなことが指導困難な事例として多くの教師によって報告されてきた(e.g. 柿沼・永野, 1992; 稲葉, 1999)。教育現場に対して有効な知見を提示していくためには、このように教師の関わりをも巻き込み、繰り返される問題行動の継続過程のメカニズムを明らかにする必要があるだろう(堀野, 1999)。

これまでこうした問題行動の過程は、予言の自己成就によって説明され(Becker, 1963/1993; 大村, 1989)、教育場面では、教師の期待や生徒を捉える枠組み、或いはそれに基づく評価や指導といった教師の側に焦点を当てた研究がなされてきた(Brophy, & Good, 1974/1985; 木原・寺元, 1980; 近藤, 1994; 古城, 1996)。すなわち、教師の否定的な期待に基づく評価や指導が、生徒の自己

概念や彼を取り囲む関係のあり方を変化させ、心理・社会的に困難な状況(否定的な自己概念の形成、日常活動や集団からの排除)に陥らせる。その結果、否定的な期待をかけられた生徒はより逸脱傾向を深める。それに対し教師はさらに否定的な評価、指導を下す。生徒はいつそう困難な状況に追い込まれ、問題行動を繰り返すようになる(=教師の期待通りの生徒になる)というものである。

こうした研究は、問題行動の継続過程は単に個人的特性のあらわれではなく、個人を取り囲む関係のあり方に基づいているということを明らかにしたが(徳岡, 1987; 近藤, 1994)、過度に単純化されているため、それを現実の学校場面に応用する際には、次のような問題が生じる。第一に、すべての生徒が教師の期待と一致して、問題行動やそれを起こす生徒を意味づけるとは限らない(宝月, 1990)。つまり、教師が否定的な評価、指導をしたからといって、必ずしもすべての生徒が問題行動を起こす生徒に対して否定的な態度をとるとは限らない。第二に、問題行動を起こす生徒自身も教師の期待と一致して自己、或いは自らの行動を意味づけるとは限らない(樋田, 1982)。従って、教師の否定的な期待が自動的に生徒の問題行動を引き起こすとは限らないということである(Rist, 1979/1980; Zebrowitz, Andreoletti, Collins, Lee, & Blumenthal, 1998)。従来の教師の側に焦点を当てた研究では、こうした生徒同士の関係のあり方や問題

行動を起こす生徒の主観的な側面が検討されてこなかった。

しかし、発達の観点から学校内の人間関係についてみれば、児童期以降年齢が上がるにつれ、教師の影響以上に同輩集団からの影響が強くなる(近藤, 1994; 丹羽, 1995)。特に青年期においては、教師や親といった大人の規範・価値観から自律的な行動をとろうとする傾向が著しくなる一方で、同輩集団から強く影響されることが明らかにされている(寺田・片岡, 1986; 松井, 1990; 宮本, 1990)。従って、中高生が起こす問題行動の継続過程を理解するためには、教師の側に焦点をあてたアプローチだけでは不十分であり、生徒の主観的な側面(意味づけ)や生徒同士の関係といった生徒の側に焦点をあてたアプローチが必要である。

こうした生徒の側へのアプローチとして、これまでも友人関係や生徒文化、価値観といった生徒がもつ文化的特性に焦点をあてた研究がなされてきた。しかし、その多くは、問題行動を起こす生徒がもつ特性や要因を抽出するものであり、問題行動の過程自体に焦点があてられることは少なかった。また、特性を強調することで、問題行動を起こす生徒は、文脈から切り離され、非行的価値観や反学校文化といった単一の文化的特性のもとに固定化され捉えられてきた。しかし、通常、生徒は学校において、タイプを異にする様々な生徒同士の関係の中におかれている。また、Matza (1964/1986) は、非行少年は特定の文化にのみ準拠し行動するのではなく、非行的な文化と順法的な文化など複数の文化の間を揺らぎ、漂流(drift)する存在であることを指摘している。従って、問題行動に関しても、生徒は特定の関係のみに準拠し問題行動を意味づけているのではなく、複数の関係の中で意味づけていること、それを起こす生徒にとって、問題行動は同時に複数の意味をもつことが予想される。以上より問題行動の継続過程を研究するためには、対象を具体的な文脈の中に位置づけ、彼がどのような関係の中で自己、或いは問題行動やそれに対する指導をどのように

意味づけているのかを明らかにする必要がある。

以上をふまえ本研究では、問題行動の繰り返しから退学に至ったFの事例を通し、以下の3点を検討する。第一に、Fの高校生活に関する生活史を構成することで、彼がどのような関係に基づき、どのように自己、或いは自らの問題行動やそれに対する教師の指導を意味づけているのかを明らかにする。第二に、他の生徒がF、或いは彼の問題行動、指導をどのように意味づけているのかを明らかにする。最後に、Fと他の生徒の問題行動、及び指導に対する意味づけを比較対照し、問題行動を巡る生徒同士の関係のあり方を検討することで、問題行動の継続過程について検討する。

方 法

(1) 対 象

都内フリースクールの生徒で中退経験をもつF(男子, 18歳)、及びFが退学したU高校に同時期在籍していた4名(周辺対象者)(Table 1)。本研究でFの事例を取りあげるのは以下の理由による。それは本事例が①問題行動によって頻繁に指導を受けていること、にもかかわらず、②問題行動を繰り返したこと、そして③留年、④退学という問題行動事例にみられる要素を多数含んでおり、質的調査に必要とされる典型性(見田, 1965; 谷, 1995a)をより満たしていると考えられるからである。

(2) 分析資料

本研究では、生徒の問題行動の意味づけに接近するために、生活史法を用いる。生活史法は個人の意味づけに焦点をあて(佐藤, 1994)、その意味を解釈、記述することによって(青木, 1995)、外部から観察可能な出来事だけでなく、個人にとって出来事がどのような意味をもち、またどのように関係づけられているのか、その生活構造(谷, 1995b)を把握するという特徴をもつ方法である。

解釈の妥当性を高め、生活構造の理解を十全なものとするために、より広い個人史的な文脈(谷, 1995a)、複数

Table 1 周辺対象者のプロフィール

名前	プロフィール
J	Fが留年した後の1年次のクラスメイト。成績優良生徒。Fとは多少接触あった。
I	Fと違うクラスで、Fのことは知っているが、直接の接触はない。運動部に所属する生徒。
K	Fが留年した後の1年次のクラスメイト。「悪ガキ」グループに属するタイプの生徒で、4名の対象者の中でFと最も近い関係にあった。
O	Fが留年した後、2年次のクラスメイト。Fのことはよく知っているが、直接の接触は避けていた。

証言や客観的事実を示す資料 (Shaw, 1930/1998; 石原, 1995), 対象者の居住地域に精通した協力者 (西田, 1995) の必要性が指摘されている。本研究では, Fの高校生活に関する語り以外に次の資料を分析に用いた。①Fの中学校, 及び現在の生活に関する語り, ②Fと同時期U高校に在籍していた者へのインタビュー, ③U高校のホームページに掲載された資料, 同学区の他校の資料, 及びフリースクールの担任教師の所見, ④U高校と同学区の出身者 (調査協力者) へのインタビュー。

また, 分析資料の多くは, 対象者の回想によるものである。そのため現時点からの回顧的な再構成にならざるをえないという制約はあるが, これによって, 問題行動を扱う研究がもつ以下のような問題点を回避することを意図した。第一に, 問題行動や非行といった逸脱行動を扱う研究において, 時間経過に沿った調査や参与観察は道義上困難である (安倍, 1978; 森田, 1991; 徳岡, 1997)。例えば, 法律に抵触する行為を見過ごすことはできない。第二に, 逸脱を扱う研究では対象者の状況への関与が高い場合, 発言が抑制されることが予想される。例えば, 在学中は問題行動が発覚することへの恐れや問題行動をとる生徒に対する配慮や恐れから発言が抑制されることが考えられる。以上のことを考慮し, 本研究では, 卒業後, 一定期間をおいた後に調査を実施した。

(3) 手続き

Fに対して1997年5月～1998年10月まで, 約1年5カ月に渡って17回の面接を行い, 会話をカセットテープに録音した。各面接時間は1時間。日常的な相談相手になり, 学校と生徒の間をつなぐことがフリースクールでの筆者の職務であったため, 15回までの記録は会話の文脈上語られたものであり, こちらから意図的に働きかけたものではない。残り2回は明確な意図をもって上でインタビューし, 得られた記録である。15回目の面接が終了した時点で, それまでに得られた記録, U高校のホームページの資料から彼の問題行動, 及びU高校の主要行事 (文化祭, 体育祭など) をマッピングした時系列図を作成した。最後の2回の面接ではこの時系列図をFに提示し, それに基づき面接を行った。系統立て, 視覚的に提示することで, Fの記憶をより鮮明に蘇らせること, 事実関係の確認を意図した (石原, 1995)。最後に周辺対象者から得られた事実関係との整合性を確認した (Figure 1)。また, 面接に際してFからは, 「こういう機会がないと, 自分についてしゃべることないから」と, 調査意図を理解したうえで, 積極的な協力が得られた。

周辺対象者は15回目までの面接でFが高校生活について語った内容から, 彼の退学時 (留年後) の学年に理解される生徒の種類を満たすように選定した。具体的には, 留年後の1年次のクラスメイト (「同じクラスの奴」), 2年次のクラスメイト (同上), 1・2年次を通して親し

かった者 (「つるんでいた奴」, 「仲良かった奴」, 「悪ガキ」), 直接Fと接触をもっていない者の4種である (() 内はFの言葉)。彼らに対して約1時間半のインタビューを行い, 録音した。また, 周辺対象者の選定の経緯は, Fからの紹介ではなく, Fの了承を得た上で, 調査協力者の紹介をもとに上記4種の人物と接触可能になるまで迎った。

調査に際しては, 目的・方法を事前に説明し, 了承が得られた者に限って実施し, テープに録音した。研究への使用に際しては, Fを含む全ての対象者に原稿化した会話記録を渡し, 不適切な箇所がないかチェックしてもらった上で, 了承が得られた部分のみを使用した。

結 果

(1) 事例の概要

Fは1978年, 首都圏Q県q市で生まれる。家族構成は父, 母, 2人の兄とFの5人。兄2人は公立高校を卒業後, 就職しており, 家族の進学に対する期待は高くない。地元の公立小・中学校卒業後, 1994年にU高校へ進学した。高校入学後は, 第1学年の1学期終了後, 海外留学のため7カ月間休学し, 翌年4月に再び第1学年に復学 (留年) した。以後, 1年数カ月通学するが, 「度重なる問題行動」により1996年第2学年の1学期に自主退学を勧告され, 退学した。退学後, 都内のフリースクールに編入するまでは, Q県で過ごす。中退以前に転校経験はない。

(2) U高校

問題行動に対する意味づけは, ある学校においてはそれほど問題視されない行動が, 他の学校では非常に問題視されるというように, 対象者がおかれた社会的文脈と密接な関係にある。従って, まずFが在籍していたU高校について示す。

本研究では, U高校の雰囲気をも具体的に捉えるために, U高校のホームページの資料, 同学区出身者からの情報を用いて, 外側からU高校について捉えるとともに, 周辺対象者へのインタビューを用いて, 内側からもU高校の雰囲気について探った。

外側からみたU高校 県立U高校は男子校であり, Fが居住していた学区では, 2番手から3番手に位置する進学校である。生徒の9割以上が進学を希望し, 地元国公立大学や全国の私立大学への進学者を多数輩出している。ただ, 1番手の高校に比べ, 集まる生徒の学力の幅が比較的広いとため, 進学する大学の偏差値の幅も広い。

学校組織については, 2つの学科, 普通科と専門科からなっており (偏差値が高いのは普通科), Fは普通科に在籍していた。1学年には8クラスあり, その内1クラスが専門科である。1クラスの生徒数は40人弱, 1学年で320人弱の生徒が在籍する高校である。

内側からみたU高校 「U高校はどんなことに力を入れている学校ですか？」という筆者の質問に、周辺対象者は一様に「進学」をあげた。進学を重視する傾向は学校の方針というだけでなく、生徒にも指摘できる。例えば、「J1」：僕はあんまり好きじゃなかったけど、入試に役立つことを教えてくれる先生なので慕っている生徒もいた」という発言からも明らかなように、一部の生徒にとって進学は重要な問題であったようである。しかし、U高校は進学を重視する生徒だけでなく、様々なタイプの生徒が在籍する高校である。周辺対象者があげるタイプは一致しており、5つのタイプ、「勉強に精を出す人」、「オタクっぽい人」、「体育会系」、「普通の人」、「悪ガキ」があげられた。

このような様々なタイプの生徒が集まる高校の雰囲気とはどのようなものであったのだろうか。以下、U高校では特異な（「目立つ」）出来事として捉えられていた校門チェックや停学・謹慎を例にとることで、逆に多くの生徒がどのような雰囲気であったかを示す。

面接者：校門チェックではどういうことが注意されるのですか？

K1：髪を染めているとか、色をぬいているとか、ピアスです。あと〔ズボンの〕腰履きが流行ったんです。それがひどすぎて、トランクスとかが出ているような奴とかを注意している。²⁾

頭髮の脱色や染髪、ピアス、腰履きは校門チェックに関して全ての対象者が共通して語ることである。U高校では校門チェックに引っかかる生徒は決まっており、目立つ存在であった。また、停学や謹慎を受けるような生徒も少なく、目立っていたようである。

面接者：停学や謹慎は減多にあるようなものじゃないんですか？

I1：そうですね。

面接者：謹慎なんかを受けると、けっこう分かるものですか？

I2：そうですね。うち（U高校）はけっこう分かる。

これらのエピソードは、U高校にこのような生徒が少なかったこと、また逆に、多くの生徒がどのような雰囲気であったかを示すものである。つまり、U高校の大部分の生徒は髪を染めたり、ズボンの腰履きをせず、ピア

スもしない、基本的にまじめな生徒が多く集まる高校であることが理解される。以下、Fの生活史を通して、彼がこのような雰囲気をもつU高校にどのような背景をもって入学し、どのような生活を送っていたのかについて示す。

(3) 中学時の生活史

Fにとって最も親しい友達は中学時の友達である。一連の面接を通して、Fが「仲良い」という友達のほとんどは中学時の友達のことであり、現在でも遊ぶのはこの友達たちとである。筆者の「高校〔の友達〕よりもそっち（中学）の友達のほうが仲良かった？」という質問に「F1：うん、もうぜんぜん〔仲が〕良かった〈16〉³⁾」と応えるように、彼らとの関係は高校在学中においても、高校の友達以上に親しい関係が続いていた。従って、中学時の友人関係がFの高校での生活や友人関係に影響を与えていたことが推察される。以下、友人関係を中心にFの中学生生活について示す。

中学時の友人関係 Fは中学では運動部に所属し、勉強も良くできた。事実、一つランクを落としたものの、学区でも有数の進学校であるU高校に合格しており、現在のフリースクールの担任も「知的程度の高い子」と彼の学力面を評価する。

その一方で、友達にはいわゆる「不良」が多く、Fは自分を含め、彼らのことを「悪ガキ」と呼ぶ。彼らの多くは高校に進学していないか、したとしても中退している。彼らとは、Fが高校に進学してからも、「暴走族仲間」として親しい関係が続いていた。そして、Kが「K2：暴走族でもけっこう上の人で、学校、その市内でもランク的な人だった」と言うように、Fはその中でも一目置かれる存在であったようであり、「F2：俺、なめられるの嫌だから、すごい悪かったんですよ。それで、絶対、自分は強いと思ってて〈3〉」と、F自身の言葉からもそれに対する自負が感じられる。また、Fは暴走族を他の悪ガキとは区別される存在として捉えている。「F3：〔暴走族以外の悪ガキに〕踊りにいく奴らが出て、それが暴走族になれない奴になるっていうのがあったんですよ。それにみんな入ってて、そのバックには絶対、暴走族がいるんですよ〈10〉」と、自分が所属していた暴走族をいくつかある悪ガキの形態の中でも、より上位に位置するものとして捉えている。

以上より、Fの中学時の友人関係に関して次の点が理解される。すなわち、Fと最も親しい関係にあった友達は悪ガキであったこと、Fは自分を含め彼らのことを他の悪ガキとは区別される存在（「すげえ悪い奴ら」）として捉えていること、そして、その中でもFは一目置かれ

1) 「J1」のアルファベットは同一人物の語りであることを、数字はプロトコール番号を表す。以下、「F1」、「I1」、「K1」、「O1」も同様。
2) 引用した語りの〔〕内は筆者が読みやすいように補足した部分であり、（）内は対象者の言葉遣いを筆者が理解しやすいように置き換えた部分である。

3) Fの語りの末尾につけられた〈〉内の数字は、全17回の面接のうち何回目に語られたものであるかを表す。例えば、〈16〉は、その語りが16回目の面接で語られたものであることを表している。

る存在であったということである。

しかしその一方で、Fは自己と中学時の友達を単純に同一化しているわけではない。次のような語りからFが彼らに対して両義的な感情を抱いていることが理解される。

面接者：中学の同級生はみんな就職してるの？

F4：してないですよ。俺の周りの奴みんな、中卒あがりだから。そんなのばっか、みんな中退の奴とかほとんどですよ。＜中略＞友達だけど、そういう奴と一緒にじゃないと思うし…、別に馬鹿にしている訳じゃないけど。せっかく俺のほうがチャンス多いから、こういう所（U高校とフリースクール両方を指して）とか来たりできたし…。(9)

このような中学時の友達に対する語りは、U高校やフリースクール（Fは中学時の仲間内で唯一、転校先を確保できた）といった「進学校文化」に基づいてなされている。こうした両義的な語りからFが中学時の悪ガキ仲間を中心とした「暴走族文化」に親近感を抱いている反面、単純にそれに同一化しているわけではなく、「進学校文化」に準拠し一定の距離を置いていること、すなわち、Fが単一の文化のみに準拠しているのではなく、対照的な二つの文化の間を揺れ動いていることが理解される。

(4) 高校時の生活史

Fは1994年U高校に入学した。彼は希望を一つ下げたため、入試で苦勞することもなかった。また、Fの語りからすると、希望を下げたからといって、U高校への進学を不本意と捉えている様子はない（「F5：なんか運良く入っちゃった(3)」）。高校の選択に関して、彼自身はあまり執着しておらず、「どこでもいい」と周囲に任せていたようである。

Fは留年したため、その前後で、彼を取り囲む人間関係も変化した。また、それに応じて、それぞれの生活に対する評価も異なっている。従って、留年前後に分け、問題行動を中心にFの高校生活について示す(Figure 1)。留年前 Fは留年前の生活を非常に否定的に捉えている。それは教師との関係、他の生徒との関係双方に指摘できることである。入学翌日、Fの遅刻がきっかけとなり、教師との間にトラブルが生じた。このエピソードは一連の面接を通して何度も現れ、一貫した内容が語られる出来事である([ep.1])。

「F6：入学式の次の日、遅刻したんですよ、電車を間違えて。『すいません、遅れました』って言ったら、[教師から]『何で遅れたの?』って聞かれて、『電車を間違えた』って言ったら、『何で君は近くなのに、電車に乗ってくるんだ。君はそういう嘘を平気でつけるんだな』って、最初に言われたから。カチンときちゃって、教壇、パーン!とかやって、『気分悪い』とか思って。それですぐ目をつけられちゃって。学校行く気なくして、

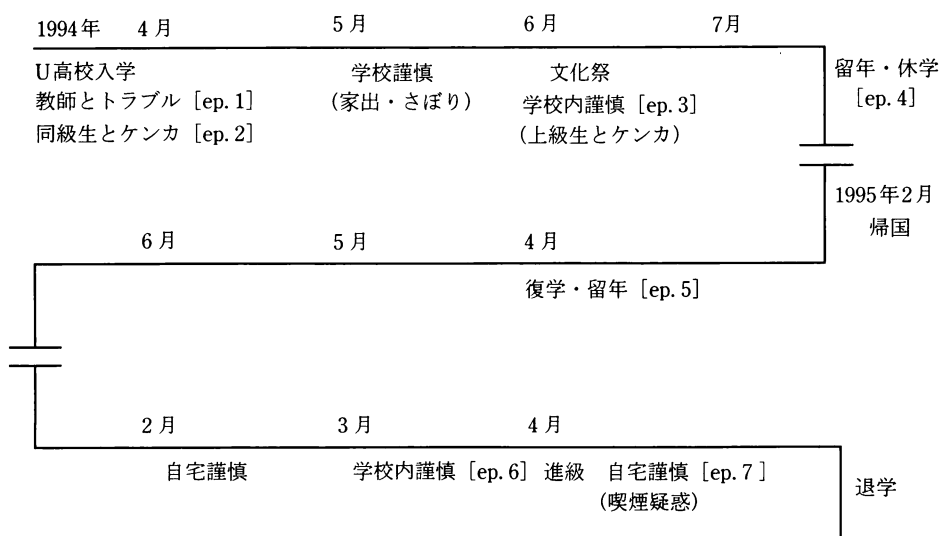


Figure 1 Fの高校生活の時系列図：問題行動を中心に
([ep.]は生活史で引用したエピソードを表している)

遅刻とか早退とかガンガンしてたら、もっと目つけられちゃって〈12〉)。

そして、同じ日に高校生活最初のケンカをした。相手は同級生の悪ガキであり、その生徒が陰で「Fよりも強い」と言っていることがきっかけとなった ([ep.2])。

「F7：入学式の次の日に、ケンカをしたんです、同じ学年の奴と。なんか違う中学が一番強いとかって。それで、『あいつが、F君よりも強いとかって言うよ』って聞くと、もう速攻、こういう細い缶で、『起きろ！』って、そのまま[相手の]髪の毛もって、ガン！〈12〉」

他の生徒に対してもFは、「F8：自分と合うタイプの人間がいなかった〈14〉」、「F9：俺にとって魅力的な話を周りの奴が一つもしてなくて〈17〉」、「F10：俺とタメ(同い年)ぜんぜんダメでしたね〈14〉」と否定的に捉えている。特に悪ガキに対しては「中途半端」という形容詞を用いて表現する。この表現は中学時の友達(暴走族仲間)との比較に基づいてなされている。

面接者：[U高校のような]まじめな学校でも、悪い奴がいる？

F11：なんか中途半端に悪ぶってる奴が多いから、俺、速攻殴ってけって。こいつ(入学翌日のケンカの相手)は、ほんと口だけっていうか、悪ぶりたいような奴で、何でこんな奴がそんなこと(Fよりも強い)言えるのかなあって思って。だから、こういう奴とか、端から見たら普通の奴が裏でそういうことを言っている、それがむかついちゃって。〈10〉

中学時「すげえ悪い奴ら」とつき合ってきたFにとって、U高校のような進学校にいる悪ガキは「中途半端」に思え、彼らが自分に衝突してくることは「許せな」かったようである。「F12：俺、つっぱってたから、すごい悪かったんですよ。だから生意気な態度とかとられると[ケンカしに]行っちゃうんですよ、すぐ〈3〉」。同様のことは同級生だけでなく、上級生との関係についても推察される ([ep.3])。

「F13：文化祭の前夜祭の時に3年とケンカして。で、[教師に]止められて、その時から『[次に]何かあったら、お前退学だぞ』って。『お前、前夜祭出なくていいから帰れ』とか言われて。帰ったら、そのケンカした奴の取り巻きが駅に5、6人いて、それがかかってきたから、俺もキレて、全部ぶん殴っちゃったんですよ。ちょっとい出されたの俺だから。でも、俺だけ[学校内]謹慎〈16〉」。

またその一方で、Fに近づいてくる悪ガキもいたようであるが、Fは彼らの態度が媚びているようで、違和感や不快感を覚えたようである。

「F14：勘違いした、なんか格好いいから悪ぶりたいのが、見え見えの奴らばっかだったから。無理矢理しゃべりかけられて、『仲良くなろうよ』って言われて、『いいよ』って言ってんだけど、でもやっぱどっか違うというか、なんか『F君、パンとか食べる？俺、買ってくるよ』、自らパシリ(=使いっ走り)、『パシリみたいに使って、それでいいから仲良くして』って感じで、そういうのが見えちゃって、『なんか嫌だな』って〈17〉」。

7月末、海外留学のため休学届けを提出し、翌年4月に復学した。Fの語りからすると、この留学前の教師の対応は、Fの教師に対する否定的なイメージを決定的なものとしたように思われる ([ep.4])。

「F15：休学する時も、生徒指導の先生がすごく『退学、退学』って親に言うんですよ。ずっと言ってんですよ。『お前、腐ってんだから、うちの学校としてはいらぬんだよ』って、はっきり言われて、5、6人の先生に囲まれて、俺、そこでまたキレて、それで首根っこ押さえられて…〈12〉」。

以上より、Fが様々な出来事を通し、留年前の学校生活、教師、他の生徒との関係双方を否定的に捉えていることが理解される。特に他の生徒との関係に関しては、中学時の「暴走族仲間」に対し「進学校文化」に準拠し距離を置いていたのとは対照的に、ここでは「暴走族文化」に準拠し否定的に意味づけ(F11)、距離を置いていることが理解される。また、こうした他の生徒との関係において、ケンカといった問題行動は、Fにとって、自己と他の悪ガキの差別化を図る、つまり、自己の優位性を示すという意味があったと推察される。

留年後 1995年4月からFは学年を一つ下げ、復学した。留年前同様、この学年においても、Fは教師のことを否定的に捉えている ([ep.5])。

「F16：[留学後]復学する時も『本当に来ちゃダメダメ]みたいな感じで、その時の主任[の先生]がそういう風に言って。俺がそれ親父に言ったら、親父が学校に来て『教育委員会の方に、私が行って話をつけてきますから』って言ったら、もう途端に[教師の]顔色が変わって、『いやいやお父さん、待って下さい』って、『すげえ格好悪い、何これ』とか思って〈16〉」。

しかし、学校生活、及び他の生徒との関係については、「F17：復学してからのの方が面白かったですよ。やっぱ、つるむ奴がいたし〈17〉」と、留年前とは逆に、肯定的に捉えている。Fが「つるんでいた」生徒とは、周囲の生徒からみれば、「不良っぽい人」、悪ガキであった。そして、Kが「K3：もうあれですよ、リーダー的存在」と言うように、Fはその中でも中心的な存在であり、また、彼らと円滑な関係を形成していたようである。

「F18：二年目の時(留年後)は、だいたい朝[友達と]一緒に、学校に通うようになって。朝一緒に行くよ

うになって、それで、途中で『かったるくない?』と
かって、[学校を] 休む時は、一緒に休むみたいな感じ
で〈17〉。

しかし、留年前の悪ガキのことは「中途半端」な存在
として拒絶していたにも関わらず、なぜ留年後の悪ガキ
とは、「つるむ」ような関係になったのだろうか。Fの
語りからすると、留年後の悪ガキの態度にも、Fが留年
前の悪ガキにそれを見て、不快感を覚えたような媚びる
ような態度が理解される。またKは、Fと他の悪ガキの
関係を、Fが留年前の他の生徒に対して否定的に用いた
ものと同じ「バシリ」という言葉を用いて表現した
(F14)。しかし、留年後の悪ガキに限って、Fはそのよ
うな態度を非常に肯定的に捉えている。

「F19：学年集会とか行くの面倒臭いから寝てたんで
すよ。[そうしたら悪ガキが]『先輩、集会ですよ』って、
『ああ本当に』って言って、[Fが] 涎たらしめて『ああ
汚ねえ』って言ったら、[その悪ガキが]『自分、ティッ
シュもってますよ』とかって。『おお何ていい奴だ』っ
て思いながら、そういう風にくれたから、仲良くな
って〈17〉。

なぜ、このような違いが生じるのだろうか。以下、F
と他の悪ガキが親しくなった過程を示すことにより、そ
れについて検討する。

面接者： [留年後の悪ガキとは] どういう風にして仲
良くなったの？

F20： それは最初、同じ中学の奴が来てて、同じ部活
の。で、そいつの兄ちゃんが俺の [中学の時の] 一
コ上の先輩だったんですよ。その兄ちゃんも中学時
代とかすげえ悪くて、「お前、兄ちゃんあんななの
に、高校来れたのか」って。それでそいつの友達を
紹介されて。〈17〉

留年後の悪ガキの中に中学時の部活の後輩がいたこ
と、そして、その後輩の兄が、Fが「すげえ悪い」と認
める人物であったことが、Fと留年後の悪ガキがつき合
うきっかけとなったと理解される。つまり、中学時の上
下関係と交友関係（「暴走族文化」）に基づき、彼らの関
係が展開していったと考えられる。特に上下関係は、周
圍の生徒がFと悪ガキの関係を「K4：[他の悪ガキが]
一歩下がった」、「O1：上の人とのつき合い方」と言う
ように、後輩以外の悪ガキとの関係においても指摘でき
る。また、こうした上下関係があったからこそ、同い年
の人にされると「嫌だな」と感じる、媚びるような態度
も留年後は受け容れることができ、円滑な関係を形成で
きたと推察される。

こうした悪ガキとともに、Fは喫煙などの問題行動を
しばしばしていたようである。そのような行動は、U高

校の中では目立っていたようであり、またFたちもそれ
を隠そうとはしなかったようである。

面接者： タバコとか吸っていたっていうのは、みんな
に見えるところで？

J2： けっこう、ベランダとかみんなの見える所で
吸ってましたね。

Fはこの学年の学校生活を「楽しかった」と言う。また、
退学に関しても「F21：辞めたくなかった〈3〉
〈16〉〈17〉」という語りが何度も現れた。

退学 校門チェックなどで注意は頻繁に受けていたよ
うだが、留年後しばらくの間は、謹慎を受けるほどの問
題行動を起こすことはなかったようである。しかし、3
学期が始まり、その中頃から2年生進級前後の短い期間
に、Fの問題行動が連続して教師に発覚した。一つは、
2月の中旬に発覚し、自宅謹慎を受け、もう一つは、3
月の初旬に「F22：単車に乗って、学校の近くまで行っ
ていたのがばれた〈16〉」ことから、春休みを返上して
学校謹慎を受けた〔ep.6〕。さらに2年生進級直後に、
同学年の後輩が校内で喫煙しているところを教師に見つ
かった。教師の疑いはFにも及び、最終的にこの出来事
が彼の退学のきっかけとなった〔ep.7〕。

「F23：うちの学校、休日に試験があるんです。俺、
それ知らなくて行かなかったんですよ。次の日、[学校
に] 行ったら、その時つるんでた奴が『タバコ見つけた』
って。俺まで [教師に] 呼ばれて、『お前もいたん
だろ』って。『俺、来てねえから分かんねえ』って言っ
てんのに、俺も『いたんだろ』って。それでぶちキレて、
『だったら、俺、[学校] 辞めるよ。ふざけんよ』って。
それで辞めたんですよ〈16〉。

Fの退学について、当時、同じクラスだったOは、
「O2：本当に何も言わずに辞めた。気づいたら辞めて
たって感じで、教師から知らされることも「O3：ぜん
ぜんなかった」と語る。

以上、Fの語りをもとに、彼の高校生活、及び教師、
他の生徒に対する意味づけを概観した。以下、留年後の
人間関係に焦点をあて、その中でFの問題行動やそれ
に対する指導がもつ意味を明らかにし、生徒同士の関係の
あり方から問題行動の継続過程のメカニズムについて検
討する。

分析及び考察

分析の焦点を留年後の人間関係に絞るのは、以下の理
由による。第一に、Fが退学した学年であること、第二
に、留年前に比べ、他の生徒との長期に渡る親密な関係
がみられること、第三に、留年が生徒同士の関係に与え
る影響を検討するためである。

まず留年後の人間関係に関して、Fが用いた呼称、及びその人物を形容する語りを規準に、3つの人間関係を抽出した (Table 2)。一つは、教師であり、「先生」、「生徒指導」などの呼称がつけられるが、形容する語りに焦点をあてれば、一様に否定的なイメージで語られる人物である。二つは、「悪ガキ」であり、「仲良かった奴」「つるんでいた奴」と形容される人物である。三つは、悪ガキ以外の生徒である。Fは彼らに対して具体的な呼称を用いることはないが、「他の奴ら」、「周りの奴」と形容される人物である (以下、悪ガキと区別し、一般生徒と表記する)。以下、それぞれの関係、及び問題行動がもつ意味について概観し、問題行動の継続過程のメカニズムについて検討する。

(1) Fを取り囲む人間関係と問題行動がもつ意味

Fと教師の関係 高校時の生活史から分かるとおり、Fは教師のことを非常に否定的に捉えている。彼は自分自身について「F24：俺は反学校派なんで〈14〉」と語り、U高校についても「F25：くされ学校〈13〉」と言う。しかし、教師から受けた退学を含む指導、及び問題行動に関しては、「F26：まあ自分が悪いんですけどね〈5〉」と語り、特に正当化はしない。つまり、教師との関係において、Fが問題行動を悪いこととして捉えていることが理解される。

一方、教師はFのことを要注意人物として捉えていたようである。Fは教師から「F27：うちの学校はじまって以来のワルだ〈3〉」、「F28：クラスの癌だ〈12〉」と言われており、特に留年後は「F29：お前がいてと〔周囲に〕悪影響だ〈16〉」ということを強調されたようである。Fの周囲に悪ガキが集まっていたこと、彼を中心としてグループ化していたこと、退学に至る出来事などから、留年後、教師のFに対する監視の目が次第に厳しくなっていたことが推察される。退学に至る過程について、Fは、「F30：何をやって、結局、〔退学が〕決まったか…、でも、自然自然に流れはそうでした〈16〉」と語る。

Fと一般生徒の関係 一般生徒は、Fのことを「怖い人」、

気軽に「話しかけられない人」と語り、彼らがFに対して一定の距離をおいていたことが分かる。

面接者：〔Fと〕実際に話をしたことはありますか？

O4：いやっ、その人は怖いって、ちょっと耳に挟んだんで。だから、しゃべらないでおこうとしてたんですよね。Fさんの友達が、言葉は悪いんですけど暴走族だってことで、やっぱ、Fさんはみんなから恐れられてた。だから、みんな、僕は話しかけるのは「ちょっときついなあ」って思ってた

面接者：〔Fと他の悪ガキとでは〕ちょっと違う感じの不良っぽさなんですか？

O5：こうなんか、自分とは住んでる世界が違うみたいな感じでしたわ。

K5：〔Fは他の悪ガキとは〕もう、ちょっと違うんですよ。

面接者：じゃあ例えば、周りにいた人たちはどう思ってたんですか？

K6：まあ「怖い」っていうのがあったんじゃないですか、やっぱり。

面接者：具体的にどういうところが〔他の悪ガキとは〕違うんですか？

(以下、先に引用したK2 (「暴走族でもけっこう上の人で…」) が続く)

以上の語りから、一般生徒がFと距離を置く理由に、彼の悪ガキとしての存在感 (= 暴走族) が関係していることが分かる。U高校では悪ガキでも暴走族に属する者は「K7：珍しく、その中で「上の人で」あったFの存在感は、他の悪ガキと一線を画するものであったようである。

一方、Fも自分が一般生徒から良くは思われていないと感じており、一定の距離を置いていたようである。

面接者：Fのように目立つ人間がいて、周りの生徒は

Table 2 U高校の人間関係：Fと他の生徒にとっての人間関係

	周辺対象者にとっての区分	Fにとっての区分
教師	好きな先生	否定的な人物としての教師
	嫌いな先生	
	その他 (部活の顧問など)	
生徒	勉強に精を出す人	一般生徒
	オタクっぽい人	
	体育会系	
	普通の人	
	悪ガキ	悪ガキ

見て見ぬふり？

F31：う～ん、ほんと見て見ぬふりって感じですかね。俺が授業中にタバコ吸ってようが何やってようが、別に関係ないって感じで、チクったりもしない。それより本当に、俺は、たぶんそういう奴の中で、俺は抹消されてるから…。〈13〉

ここでの筆者の質問（「周りの生徒は見て見ぬふり？」）には、誘導が認められるが、一般生徒との関係において、Fが距離を置いていること、自己を否定的に意味づけている（「抹消されてる」）ことは理解される。そして、自己に対する他の生徒の否定的な視線が語られるのは、問題行動に関わる場面においてである。他にも、謹慎を終え、通常に登校し始めた際の、他の生徒の自分に対する視線について、Fは「F32：『ああ来たんだ』みたいな目で…〈17〉」と否定的に語る。また「[Fは]誰とでも話をするタイプ？」という筆者の質問に、Kが「K8：そんなこともなかったですね。やっぱ向こうも来なければこっちも行かないみたいな感じで」と答えるように、実際に一般生徒と積極的に関わろうとしていなかったようである。

以上より、一般生徒がFとの間に距離を置いていたこと、Fも彼らとの間に距離を置いていたこと、そして、それらは共にFの問題行動に基づいていることが理解される。Fを取り囲む外的状況とFの主體的な関わりが交わるここに、一般生徒とFの間の距離がいつそう確実なものとなる契機を見いだせる。さらに、Kが「K9：[謹慎を]喰らったなっていうんで、『怖いな』って思うんじゃないですか」と言うように、このような関係においては、Fに対する教師の指導は、一般生徒のFに対する恐れを定着させ、距離を広げるように働いていたと推察される。また、先に述べたように、問題行動がよく目立つU高校の雰囲気は、指導がもつこのような働きをより効果的なものとしたと考えられる。

Fと悪ガキの関係 問題行動的な雰囲気から一般生徒がFと距離を置く一方で、悪ガキたちはそのような雰囲気をもつFを慕って彼のもとに集まっていた。例えば、Kは「K10：やっぱ悪そうなんだけど、本当いい人」と、Fのことを非常に肯定的に捉えている。一般生徒とFの関係に悪ガキとの関係を加えると、Fの問題行動・指導を巡り次のような関係が理解される。すなわち、Fが問題行動を起こすほど、また、それに対する指導を受けるほど、Fと一般生徒の距離は広がり、その一方でFと悪ガキたちは接近する⁴⁾という関係である。

しかし、この関係はFを取り囲んでいた状況であり、

4) 指導がFと悪ガキを「接近させる」という理解は推測の域をでないが、K3や「K：まあ[Fは]悪い奴らとはいますけど」という語りから、Fと他の悪ガキが「接近していた」ことは確認される。

Fの問題行動の発生に関しては外的状況である。生活史から明らかな通り、Fは悪ガキと接近する、しないに関わらず問題行動を起こしている。つまり、悪ガキとの接近という外的状況だけでは、彼の問題行動を説明するには不十分である。従って、Fの問題行動に対する主體的な関わり、つまり、Fが留年後の悪ガキとの関係の中で、問題行動をどのように意味づけ、それを行っていたのかを検討する必要がある。

生活史で指摘したように、留年後のFと悪ガキとの関係は、中学時の上下関係に基づき親密な関係が展開していた。しかし、このことは他方で、Fと悪ガキの間にも一定の距離があったことを示している。つまり、Fは一般生徒からだけではなく、悪ガキたちからも先輩として距離を置かれる存在なのである（K4：「[他の悪ガキが]一歩下がった」）。また、Kの語り（K5）から分かる通り、彼の悪ガキとしての存在感は、他の悪ガキと一線を画するものである。

以上のことから、留年後の悪ガキとの関係において、問題行動はFにとって、次のような二重の意味をもっていたことが推察される。一つは先輩として、もう一つは他の悪ガキと一線を画する自らの不良像に見合うものとしての意味である。この二重の立場に基づく問題行動の意味は、Fの言葉でいえば、「男気」という言葉に集約される。

面接者：ペランダとかでタバコを吸ってて〔教師に〕ばれないの？

F33：俺、巧いからやり方が。つるんでいた奴は「こんな所でやってたら、ばれますよ」とか言ってたけど、「絶対、大丈夫だよ、余裕だよ」とかって言って、妙な男気出して「大丈夫だよ」って。〈15〉

Fにとって、問題行動は「男気」に関わるもの、言い換えれば、格好良さに関わるものである。同様のことは、問題行動の結果としての退学に関しても指摘でき、Fがこの意味のもと、自らの立場に見合う態度をとっていたことが理解される。

面接者：辞めるとき、その時仲良かった奴らに何か相談しなかったの？

F34：ぜんぜん。「俺、辞めるから、お前らちゃんと学校行けよ」って。〈16〉

また、次のような語りから、周囲の生徒が、問題行動的な雰囲気からFに対し距離を置く反面、そのような雰囲気をもつFに対し一種の羨望に近い感情を抱いていたことが分かる。

面接者：〔Fは〕どんな感じの人だったのでしょうか？

O6：お洒落な感じで、けっこうみんなから「格好いい」って言われてて、でも、ちょっと話しかけられないような感じで…。

つまり、「問題行動＝格好良さに関わるもの」というのは、Fだけでなく、悪ガキを含めある程度周囲の生徒を巻き込んだ価値観であったと考えられる。問題行動へのFの主體的な関わりと周囲の期待という外的状況が変わるここに、問題行動の発生についてのひとつの契機が理解される。また、退学に関して、「F35：『学校辞めるよ』っていうのが、『格好いい』みたいな感じってあるじゃないですか（12）」とFが語るように、このような関係においては、教師の指導も彼の不良像にとって、ある種の輝かしい経歴として捉えられていたようである。

(2) 問題行動の継続過程のメカニズム：Fの問題行動を巡る循環関係

以上の分析から明らかになったことは次の点である。

① Fと一般生徒の関係において、問題行動や教師の指導は否定的な意味をもち、Fと一般生徒の間にあった距離を広げる、或いは固定化するよう働いたと推察された。一方、Fと悪ガキの関係においては、問題行動や指導は彼らの関係を阻害するようには働いておらず、逆にFと悪ガキは接近し、親密な関係を形成していた。② Fと留年後の悪ガキの関係において、問題行動、及びそれに対する指導は、格好良さに関わるものという意味をもっていた。その中でFは、先輩として、また、他の悪ガキと一線を画する存在としての立場にあり、Fはそれに見合う態度をとろうとしていた。③ 教師との関係において、Fの問題行動は、他の生徒に比べ、教師からの厳しい視線に晒されていたと推察される。従って、Fの問題行動は、他の生徒に比べ、より発見されやすい状況にあったと考えられる。

以上のことから、留年後のFの問題行動を巡り、次のような循環関係が成立していたことが示唆される。すなわち、Fが問題行動を起こすほど、それに対する指導を受けるほど、一般生徒との間に距離が生じ、同時に、悪ガキと接近する。悪ガキとの関係においては、自らの立場に見合う態度をとろうとする。従って、Fの問題行動は他の悪ガキ以上に目立つ。加えて、それまでの問題行動歴や留年、周囲へ「悪影響」を与える人物という評価によって、彼の行動に対する教師の視線は厳しく、目にとまりやすい。そして、指導を受ければ、一般生徒との距離は開き、悪ガキと近づく。再び新たな問題行動へ…、という循環関係である。

つまり、Fが問題行動を起こすほど、それに対する指

導を受けるほど、問題行動が繰り返されやすくなる関係のあり方である。このような関係の中にあつては、本来、問題行動を抑止すべきものである教師の指導も、各々の信念（例えば、一般生徒がFを「怖い」と思うこと）や関係のあり方を硬直化させ、再びFの問題行動を引き起こす、促進要因となっていたと推察される。

総合考察

本研究では、生徒の問題行動に対する意味づけ、及び生徒同士の関係のあり方という観点から、問題行動の継続過程について検討してきた。本研究の結果から次の点が明らかになった。

一つは、問題行動やそれを起こす生徒に対する意味づけは、個々の生徒が置かれた状況、或いは問題行動を起こす生徒との関係によって異なるということである。Fと近しい関係にあったKはFのことを「本当いい人」（K10）と捉え、そうでない生徒、Oは「怖い人」（O4）と恐れていた。

二つは、問題行動を起こす生徒自身も生徒同士の関係に依じて、自己や自らの問題行動について異なる意味づけをしており、問題行動は、同時に複数の意味をもちうるということである。悪ガキとの関係において、問題行動は肯定的な意味（F33）をもつ一方で、一般生徒との関係においては、否定的な意味（F31）をもっていた。また、問題行動に対する教師の指導も悪ガキとの関係においては肯定的な意味（F35）をもつ一方で、一般生徒との関係においては否定的な意味（F32）をもっていた。

そして、Fの事例では、こうした意味のもと、問題行動やそれに対する指導が、一方で生徒同士の関係の親密化を、他方で希薄化を促し、さらに新たな問題行動を引き起こすという循環関係の存在が示唆された。このことは、従来の研究においても非行・問題行動少年が非常に親密な友人関係を形成していることが指摘される（e.g, 菊池, 1991; 國吉, 1997）一方で、彼らの多くが学校生活や友人関係で疎外感をもっていることが指摘されている（e.g, 平田・渡部・相馬, 1998）ことから、本事例だけでなく、他の問題行動事例についてもあてはまる可能性をもつと思われる。

また、本研究の結果は、次の点において、問題行動に関する従来の研究の見方とは異なる。第一に、従来の研究では、教師の期待といった教師から生徒への一方向的な過程が強調されてきたが、教師の期待（指導のもつ意味）は、常に直接、影響を与えるのではなく、その意味は生徒同士の関係に応じて再解釈されるということである。Fの事例の場合、この再解釈された問題行動の意味が、Fの問題行動の生起・反復を少なからず規定していたと考えられる。従って、問題行動や指導の意味を捉え

るためには、教師-生徒関係だけでなく、教師-当事者である生徒-他の生徒という三者の関係を基本単位として捉える必要があるだろう。

第二に、従来の研究では、非行的価値観や反学校文化といった文化的特性に焦点があてられ、問題行動を起こす生徒は単一の文化のもとに固定化され捉えられてきたが、実際には、生徒は特定の文化だけではなく、複数の文化に準拠し自己や自らの問題行動を意味づけているということである。例えば、Fは中学時の悪ガキに対しては、U高校といった「進学校文化」に準拠し距離をとる(F4)一方で、U高校の悪ガキに対しては、中学時の「暴走族文化」に準拠し距離をとっていた(F11)。また留年後の他の生徒との関係においても、自己や自らの問題行動に対し、一般生徒と悪ガキそれぞれの関係において異なる意味づけをしていた(F31, F33, F35)。本研究のこうした結果は、教師から生徒への一方向的過程を強調する研究や生徒を特定の文化的特性のもとに固定化して捉える従来の研究の見方に対し、再検討の必要性を示唆するものである。

さらに本研究の結果は、問題行動の指導に関して次の点を示唆する。一つは、問題行動を起こす生徒に対して指導する際、その生徒がどのような生徒同士の関係の中に置かれているのかを考慮する必要性である。「喫煙なら、謹慎〇〇日」といったような機械的な指導(柿沼, 1995)ではなく、指導がその生徒にとって、どのような意味をもつのかを考慮する必要があるだろう。生徒同士の関係のあり方次第で、同一の指導が、問題行動の抑止要因にも、促進要因にもなりうる考えられる。

二つは、問題行動を起こす生徒だけでなく、周囲の生徒に対する働きかけの必要性である。例えば、Fはバイクで登校したため謹慎処分を受けたが([ep.6]), 一般生徒の中には、それをFがバイクで人身事故を起こしたために、謹慎処分を受けたと思っている者もいた。こうした誤った情報は、一般生徒のFに対する恐れを助長し、Fと一般生徒の間の距離を広げるように働いたことが推察される。生徒同士の関係のあり方が問題行動の継続過程に与える影響を考慮するなら、指導の内容をどのように伝えるかといったことを含め、教師が周囲の生徒へどのように働きかけるかが、問題行動の解決にとって重要な意味をもつと思われる。

こうした生徒同士の関係から問題行動の継続過程を捉える本研究の観点は、主として「教師-問題行動を起こす生徒」という関係の中で考えられてきた問題行動に対する従来の指導のあり方を、他の生徒にまで拡張して考える必要性を示唆するものである。

最後に、本研究では教師にインタビューすることができなかった。生徒同様、問題行動、及び指導のもつ意味は個々の教師によって異なることが予想される。今後の

課題として、こうした教師の意味づけやその形成過程、指導が有効に働いた事例を含め、より多角的な視点から問題行動の継続過程について検討することが必要であると考える。

文 献

- 安倍淳吉. (1978). *犯罪の社会心理学*. 東京: 新曜社.
- 青木秀男. (1995). 都市下層と生活史法, 谷 富夫 (編), *ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために* (pp.125-148). 京都: 世界思想社.
- Becker, H. S. (1993). *新装アウトサイダーズ: ラベリング理論とはなにか* (村上直之, 訳). 東京: 新泉社. (Becker, H. S. (1963). *Outsiders: Studies in the sociology of deviance*. New York: The Free Press.)
- Brophy, J. E., & Good, T. L. (1985). *教師と生徒の人間関係: 新しい教育指導の原点* (浜名外喜男・蘭 千壽・天根哲治, 訳). 京都: 北大路書房. (Brophy, J. E., & Good, T. L. (1974). *Teacher-student relationships: Causes and consequences*. New York: Holt, Rinehart & Winston.)
- 樋田大二郎. (1982). 中・高校生の問題行動に関する研究: 生徒文化研究適用による検討. *教育社会学研究*, 37, 139-150.
- 平田乃美・渡部 正・相馬一郎 (1998). 非行少年の学校環境認知とローカス・オブ・コントロール. *犯罪心理学研究*, 36, 1-11.
- 宝月 誠. (1990). *逸脱論の研究*. 東京: 恒星社厚生閣.
- 堀野 緑. (1999). 研究と教育現場との真のかかわりを求めて: 教員をサポートする研究に向けて. *発達心理学研究*, 10, 58-60.
- 稲葉守朗. (1999). 子どもが教師に頼るとき・背くとき: 正面からぶつかるか. *児童心理*, 2月号臨時増刊 710, 98-103. 東京: 金子書房.
- 石原昌家. (1995). 沖縄出稼者と定住: 異文化接触と同化過程. 谷 富夫 (編), *ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために* (pp.31-61). 京都: 世界思想社.
- 柿沼昌芳. (1995). 「甘い」指導のすすめ: 学校は24時間営業か. 東京: 三省堂.
- 柿沼昌芳・永野恒雄. (1992). *問題をくり返させない特別指導*. 東京: 学事出版.
- 木原 孝・寺元 勉. (1980). いたずらっ子とその仲間たち: 学級社会的アプローチ. *岡山大学教育研究集録第53号*, 岡山大学, 岡山, 57-67.
- 菊池和典 (編). (1991). *親・教師・友人と問題行動*. 高橋哲夫・田中英彦・原野広太郎・真仁田昭・間宮武 (シリーズ編), *実践・問題行動教育体系3: 親・教師・友人と子どもの関係*. (pp.5-46). 東京: 開隆堂出版.

- 古城和敬。(1996). 教師の指導行動. 蘭 千壽・古城和敬 (編), *対人行動学研究シリーズ2: 教師と教育集団の心理* (pp.51-76). 東京: 誠信書房.
- 近藤邦夫。(1994). *教師と子どもの関係づくり: 学校の臨床心理学*. 東京: 東京大学出版会.
- 國古真弥。(1997) 自己呈示としての非行 (1): 構造化面接の結果から. *犯罪心理学研究*, 35 (2), 1-12.
- 松井 豊。(1990). 友人関係の機能. 斉藤耕二・菊池章夫 (編), *社会化の心理学ハンドブック: 人間形成と社会と文化* (pp.283-296). 東京: 川島書店.
- Matza, D. (1986). 漂流する少年: 現代の少年非行論. (非行理論研究会, 訳). 東京: 成文堂. (Matza, D. (1964). *Delinquency and drift*. John Wiley, & Sons, Inc.)
- 見田宗介。(1965). *現代日本の精神構造*. 東京: 弘文堂.
- 宮本正一。(1990). 学校での社会化. 斉藤耕二・菊池章夫 (編), *社会化の心理学ハンドブック: 人間形成と社会と文化* (pp.297-310). 東京: 川島書店.
- 森田洋司。(1991). 「不登校」現象の社会学. 東京: 学文社.
- 西田芳正。(1995). 文化住宅街の青春: 低階層集住地域における教育・地位達成. 谷 富夫 (編), *ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために* (pp.149-178). 京都: 世界思想社.
- 丹羽洋子。(1995). 教室の中の人間関係: 教師と子ども・子ども同士の間関係. 内田伸子・南 博文 (編), *講座生涯発達心理学3 子ども時代を生きる: 幼児から児童へ* (pp.171-205). 東京: 金子書房.
- 大村英昭。(1989). *新版非行の社会学*. 京都: 世界思想社.
- Rist, R. C. (1980). 学校教育におけるレイベリング論 (藤田英典, 訳). J.カラベル・A. H.ハルゼー (編), (潮木守一・天野郁夫・藤田英典, 編訳). *教育と社会変動 上* (pp.205-255). 東京: 東京大学出版会. (Rist, R. C. (1979). On understanding the processes of schooling: The contributions of labeling theory. In J. Karabel, & A. H. Halsey (Eds.), *Power and ideology in education* (pp.292-305). New York: Oxford University Press.)
- 佐藤健二。(1994). ライフヒストリー研究の位相. 中野卓・桜井 厚 (編), *ライフヒストリーの社会学* (pp.13-41). 東京: 弘文堂.
- Shaw, C. R. (1998). ジャック・ローラー: ある非行少年自身の物語 (玉井真理子・池田 寛, 訳). 東京: 東洋館出版社. (Shaw, C. R. (1930). *The Jack-Roller: A delinquent boy's own story*. Chicago: The University of Chicago Press.)
- 谷 富夫。(1995a). ライフ・ヒストリーとは何か. 谷 富夫 (編), *ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために* (pp.3-28). 京都: 世界思想社.
- 谷 富夫。(1995b). はしがき. 谷 富夫 (編), *ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために* (pp.i-iv). 京都: 世界思想社.
- 寺田 晃・片岡 彰。(1986). 教師と児童・生徒の人間関係. 前田嘉明・岸田元美 (編), *教師の心理 (I): 教師の意識と行動* (pp.177-208). 東京: 有斐閣.
- 徳岡秀雄。(1987). *社会病理の分析視角: ラベリング論・再考*. 東京: 東京大学出版会.
- 徳岡秀雄。(1997). *社会病理を考える*. 京都: 世界思想社.
- Zebrowitz, L. A, Andreoletti, C., Collins, M. A., Lee, S. Y., & Blumenthal, J. (1998). Bright, bad, babyfaced boys: Appearance stereotypes do not always yield self-fulfilling prophecy effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 1300-1320.

付記

本論文は平成9年度中央大学大学院修士論文に、加筆・修正をしたものである。本研究に協力して下さった対象者のみなさんに心より感謝申し上げます。また、本論文の作成を指導して下さいました中央大学文学部都筑学先生、矢島正見先生、諸先生方、心理科学研究会青年分科会での発表の際、助言をいただいた会員の方々に厚くお礼を申し上げます。

Kato, Hiromichii (The Graduate School of Literature, Chuo University). *The Continuous Process of Problem Behavior: Analysis of Student Relationships*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2001, Vol.12, No.2, 135-147.

This research concerned the psychological processes associated with adolescent problem behavior that occurred over time in a school context. It consisted of a series of interviews with an 18 year-old boy named 'F' and with 4 of his school-mates. F had dropped out of high school, where he had repeatedly evidenced problem behavior. An analysis of the interview protocols showed that F engaged in two different types of relationships. The first one was his relationship with delinquent boys, and the second was his relationship with other high school students. Problem behavior and the guidance of teachers differed for these two types of relationships. In the former relationships, problem behavior had a positive sense, whereas in the latter it had a negative sense. These results indicated a circular relation between F's problem behavior and teachers' guidance, by which the more F showed problem behavior and had been given guidance about the behavior from a teacher, the more new problem behaviors he evidenced.

[Key Words] Problem behavior, Peer relations, Adolescence, Adolescent-teacher relationship, Life history

2000. 10. 30 受稿, 2001. 4. 16 受理

「気質」をめぐる質問紙研究と観察研究：荘厳論文に対するコメント

水野 里恵
(愛知江南短期大学)

筆者は、「気質」は「1. 体質的なものである, 2. 乳児期に表れ, ある程度の発達の連続性を持つ, 3. 客観的に判断できる個人差である, 4. 環境の影響を受けて変化しうる」心理学的構成概念であるという立場に立っている。この立場から水野・本城 (1998) 論文に対して荘厳 (2001) 論文より提出された疑問に答えていきたい。

母親回答による気質質問紙測定

第一の疑問として、質問紙回答者が母親であることによる問題があげられている。筆者も、回答が母親の主観的要素に影響されている可能性は否定できない (Bates, & Bayles, 1984) ことを認めるが、RITQ・BSQの質問項目は最近1カ月間の日常場面で見られる具体的な子どもの行動の仕方 (how) を母親に回答させるものであり、様々な場面を通して見られる子どもの行動様式を測定するには貴重な情報源である (Thomas, Chess, & Korn, 1982) ことのメリットの方が大きいと思っている。なぜならば、母親は、観察調査 (自然観察・実験的観察) ではカバーしきれない幅広い文脈での子どもの行動を見ることができる立場におり、信頼性・妥当性のあるデータを提供してきている (Carey, 1982) からである。それに比較すると、研究者による気質測定は数時間から数日の行動観察データに基づいて行われる。事実こうした制約が、NBASは新生児の行動上の成熟レベルを測定するには有益だが、新生児の気質測定法としては安定性を支持するだけの実証データが不十分であり、その後の気質の予測性も不十分である (Goldsmith, & Campos, 1982) という指摘に結びついていると考えられる。すなわち、新生児期に研究者自身が行うNBASは気質測定法としての信頼性・妥当性が保証されたものではないことを附言しておきたい。

被験者の平均年齢

第二の疑問として指摘されている第2回調査時点の子どもの平均年齢については、回答項目の「年齢」をデータとしたために起きた問題である (すべて満年齢での集計となった) ので、改めて回答項目の「生年月日」と「記入年月日」をデータとして集計し直した結果、平均年齢：4歳0カ月 ($SD = 2.6$ カ月) となった。この場を借りて訂正し、指摘に対して謝意を表明したい。

行動規準の内面化過程に働く親の説明的しつけ方略

さて、荘厳論文が本研究の問題が凝縮されているとする「実験的観察調査によって測定された自己主張的自己

制御行動と乳幼児期の気質との関連」に関する第三の疑問についてである。これについては、3つの観点から批判・問題点が指摘されているが、最初に指摘されている「気質が母親の主観的な評価にすぎない」との批判に関しては第一の疑問に対するコメント箇所でも前述したので、次に指摘されている「行動規準の内面化過程に働く要因」から議論していきたい。

荘厳論文では、行動規準の内面化過程に働く要因として「親の説明的しつけ方略よりも母親の共感的態度の要因」が強調されている。そして、前操作期にある子どもにとって親の説明的しつけ方略は有効ではないことが主張されている。しかしながら、筆者は、子どもの注意が親の方に向いており親のメッセージが明確で子どもにとって受け取りやすいものである場合には、親の説明的しつけ方略は有効に機能すると考える。これに関しては、以下のような先行研究からの知見が参考になろう。Hoffman (1970) は、良心の発達がすすんでいた子どもの親は道理を説明する方略を取っており、それはしばしば権威を主張する方略と組み合わせられて使用されていたことを報告し、以下のように主張している。ものごとの道理を説明するしつけ方略は、子どもの行動が他者に如何なる影響を及ぼしたかを強調する時には特に有効である。なぜならば、それは、子どもの共感的能力を発達させ、監視されていない状況においても自分のとった行動の結果から逃れることはできないという感情を子どもに誘発させるがゆえに有効なのである。さらに、Hoffman (1988) は、以下のような研究結果を根拠に、道徳規準の内面化に関する社会的学習理論の見解に批判的である。子どもが行動規準から外れたモデルを模倣することは見られたが、自分の欲求に逆らい行動規準を守ったモデルを模倣することはなかった。ゆえに、単なる道徳的なモデルの観察が子どもの道徳性の内面化を促進するとは考えられない。このHoffman (1988) の知見は、子どもが無条件に母親の共感的態度を模倣するとは考えにくいことを示唆している。また、Higgins (1989) は、なぜそれがいけないかの理由を示したりなぜそうすべきかについて説明したりする親の子どもは、自分自身の行動とその行動に対する親の反応とにどのような関係があるかについて極めてきちんとした知識を持っており、その結果として、自己制御の行動をとることを明らかにしている。

仮説検証型の質問紙調査による縦断研究

さて、積み残された問題として「自己制御機能の発達を母親の説明方略と関連づける時の方法論」に対する疑問が提出され、第1回の調査時点から観察調査を中心に据えた縦断研究を行うべきであるとの見解が示されている。確かに母親のしつけ方略がどのように行動規範の内面化過程に寄与しているのかのメカニズム解明が唯一の目的である場合にはそうした方法が望ましい。なぜならば、親のしつけ方略が子どもの行動規範の内面化に及ぼすメカニズムを解明するには、子どもがどのような問題行動をしたかで親は使用するしつけ方略を変えているという事情を考慮に入れ、子どもの問題行動の性質・その時の子どもの問題行動に対する親のしつけ方略・子どもの個人差（気質的個人差を含む）・親の個人差の4つの変数を考慮に入れることが必要であり（Grusec, & Goodnow, 1994）、より詳細なデータは観察調査を縦断的に積み重ねることによって得られるからである。しかしながら、水野・本城（1998）論文は、水野（2000）の「母子相互作用・子どもの社会化過程における乳幼児の気質研究」の一部分として実施されており、これに先立つ部分研究の中で幼児期の子どもの気質の扱いにくさが母親の育児ストレスと関連することが明らかになっている（水野, 1998）。すなわち、この一連の縦断研究から、次のような知見が得られている。気質的に扱いにくい子どもを持った場合には母親の育児ストレスは高くなる。そして、そのような場合には、母親が道理を説明するしつけ方略をとることが少ないし、子どもの自己制御機能が低くなる傾向にある。このように、仮説モデル検証に必要なデータを縦断的に収集し、それらを総合的に考察して仮説を検証することは質問紙研究によっても可能であると筆者は考えている。

最後に、水野・本城（1998）論文は、質問紙測定による乳児期の「気質的扱いにくさ」が母子の関係性の質やしつけ方略と関連を持って行動規範の内面化過程に関与した可能性があること、質問紙測定による幼児期の「行動的抑制傾向」が自己制御機能の行動統制の過程で関与した可能性があることを、子どもの自己制御行動を実験的観察によって測定するという観察研究を加えることによって検証したものであって、決して「子どもを取り巻く周辺環境の要因が一切排除され、子どもの気質的側面が完全に独立変数として取り扱われている」わけではないことを確認しておきたい。

文献

- Bates, J. E., & Bayles, K. (1984). Objective and subjective components in mothers' perceptions of their children from age 6 months to 3 years. *Merrill-Palmer Quarterly*, 30 (2), 111-130.
- Carey, W. B. (1982). The validity of parental assessments of development and behavior. *American Journal of Diseases of Children*, 136, 97-99.
- Goldsmith, H. H., & Campos, J. J. (1982). Toward a theory of infant temperament. In R. N. Emde, & R. Harmon (Eds.), *The development of attachment and affiliative systems* (pp.161-193). New York: Plenum.
- Grusec, J. E., & Goodnow, J. J. (1994). Impact of parental discipline methods on the child's internalization of values: A reconceptualization of current points of view. *Developmental Psychology*, 30 (1), 4-19.
- Higgins, T. E. (1989). Continuities and discontinuities in self-regulatory and self-evaluative processes: A developmental theory relating self and affect. *Journal of Personality*, 57 (2), 407-444.
- Hoffman, M. L. (1970). Conscience, personality, and socialization techniques. *Human Development*, 13, 90-126.
- Hoffman, M. L. (1988). Moral development. In M. H. Bornstein, & M. E. Lamb (Eds.), *Developmental psychology: An advanced textbook* (2nd ed.) (pp.497-548). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 水野里恵. (1998). 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究. *発達心理学研究*, 9, 56-65.
- 水野里恵. (2000). 母子相互作用・子どもの社会化過程における乳幼児の気質：気質的扱いにくさと行動的抑制傾向を中心に. 名古屋大学博士学位論文（未公開）.
- 水野里恵・本城秀次. (1998). 幼児の自己制御機能：乳児期と幼児期の気質との関連. *発達心理学研究*, 9, 131-141
- 荘巖舜哉. (2001). 質問紙研究が観察研究を補う条件：水野・本城論文に対するコメント. *発達心理学研究*, 12, 58-60
- Thomas, A., Chess, S., & Korn, S. J. (1982). The reality of difficult temperament. *Merrill-Palmer Quarterly*, 28 (1), 1-20.

2001. 1. 10 受稿, 2001. 4. 19 受理

刑部論文(1998)に対する意見論文にこたえて

刑部 育子

(公立はこだて未来大学)

麻生氏(2000)・須田氏(2000)・倉持氏(2000)は、それぞれ筆者の論文(刑部, 1998)を丁寧に読んで下さり、大変有意義な議論を投げかけて下さった。心から感謝する次第である。本論では三氏の意見論文を受けて、刑部論文では紙面の都合や論文としての制約等により十分に説明しきれなかった点、若干誤解を引き起こしているのではないかとと思われる点についてこたえていくこととしたい。特に、分析枠組みとしての「正統的周辺参加論」(Lave, & Wenger, 1991/1993)という立場の捉え方による誤解があり、そこから派生した問いについて具体的にこたえることとする。

須田氏の問いにこたえて

① 社会性発達について

須田氏は社会性発達について「情緒調整」という視点で捉えなおすことを提案しておられる。刑部論文における「関係性の変化」に着目し、人と人との情緒調整に着目されたのではないかと考える。この点についてはその可能性を否定するものではない。しかし、当該論文では情緒の反応連鎖による主体間の心的側面の特性に焦点を当てた分析的枠組みとは異なっている。

② 「具体から具体へ」

須田氏は本研究を典型性の抽出としての事例研究として捉えておられる。当該研究で示した事例が、一般性を目指し、広くあると予想される事柄の一つという位置付けをされておられる。しかし、本研究は麻生氏が述べておられたように、「具体から具体へ」という立場であり、典型による一般化を目指しているものではない。むしろ、具体の中の織り成すさまざまな関係を抽出することを目指している。一見、独立的にみえる事態が様々な関係の相互作用によって構成されているということを示した分析であった。当該論文ではこのような関係論的なものの見方の重要性、有効性を示すことを目指した。

③ 「型にはまらぬ能動的な子ども」としての可能性

須田氏の見解の中に「型にはまらぬ能動的な子どもへの変化の可能性はなかったのだろうか」という問いが投げかけられている。もちろん可能性としてはありえると考えられる。しかしながら、当該論文では発達の可能性を事前に予見した上でデータをとり、分析したものではない。また、発達についての一般的な答えを探求した研究ではない。本研究は収集できたデータの範囲の中で明らかに

された事実を可視化することを目的としている。それゆえ、当該研究のデータからは、変化というものが「気にならなくなっていく、目立たなくなっていく」という事態が分析の結果として明らかになったということなのである。

倉持氏の問いにこたえて

① 保育者に対するリソース

当該論文が保育に対するリソースとして見ていただけたならば、それは大変うれしいことである。また、当該論文を読むと「4歳児クラス以前のK」はどうなのか、「ちょっと気になることは1歳児から続いていたのだろうか」、このような話は「担任が変わることに伴って出てきた問題なのだろうか」、などさまざまな疑問や可能性、想像が喚起されるかもしれない。しかし、本研究ではそういった仮説のもとにデータを収集する立場ではない。あくまで与えられたデータの中でいえることは何かを追求するエスノメソドロジー的なフィールドワークの方法論なのである。当該研究において明らかにされた事実は、最初から予測したものではなく、何度もデータにあたり分析を進めていくうちに明らかになった結果なのである。

② 保育者個人の子ども観や保育観を問うこと

倉持氏は筆者への意見論文の後半で、保育者の子ども観や保育観に焦点化した議論をすすめておられる。しかし、当該論文は特定の個人の「心」をできる限り問題にしないのが分析的立場である。当該論文の理論的枠組みは「正統的周辺参加論」であり、それは心理主義への批判を行った立場である。従って、「本当は何が起こっていたのだろうか」、「特定の人が何を考えていたのだろうか」、「何を考えるべきなのか」など特定の個人の「心」の言及を控える立場なのである。正統的周辺参加論では、できる限り「心」を言及せずに相互作用的な関係として語りうるものをデータの中から拾い上げようとする理論的立場なのである。当該研究ではそういう形で記述することへの有効性を示す試みであった。

麻生氏の問いにこたえて

① 事例の選択

麻生氏は当該論文について「膨大な量のデータをばっさり切り捨てている」と述べておられる。しかし、分析

過程を明かすと正確にはそのようなものではない。そこで事例が選択されるまでの過程について概略を述べる。

筆者は長期のフィールドワークによる大量のビデオ録画記録を眺めては、データとしてどのような形で論文に提示・表現すればよいのか、ずっと悩んでいた。思い切りのよくない筆者は、目の前にある大量のビデオデータをばっさりとは切り捨てられなかった。しかし、論文にするためには、それを文節化し表現することが求められる。そこでまず、いかにKが自ら他者と関わることなく、一人で過ごしているかを数量的に示そうと考えた。それなら誰もが納得するデータを提供できると考えたからである。そして各月のKの活動が1時間、鮮明に録画されたビデオ記録を取り出すことになった。記録は週に一度分あったのだが、時間量をあわせて上でカウントできるだけのデータをそろえようとする、月1本1時間分しかそろわなかったのである。それゆえ、後に当該論文で質的に分析されることになったデータは、麻生氏が述べたように「主体的選択」ではなく、上記の条件にあうよう選ばれたデータであった。出来事として印象的なエピソードは他に数多くあったが、恣意的にならないように条件に合わせたため、選ばれたデータはむしろ、当初、何気なく映っていた場面にすぎないように見えた。こうした理由により、麻生氏のいうように「(膨大な)データを大胆にカット」したわけではなく、「1時間」が鮮明に撮れているデータに絞った段階で、結果的に、「膨大な量のデータをばっさり切り捨てる」ことになった次第である。

② 保育者・家庭への言及

麻生氏は、当該論文について保育者との関係や家庭の関係への言及がないことを述べておられる。しかし、倉持氏へのこたえにも述べたように、当該論文の分析的立場は、入手し分析の対象としたデータの中を徹底的に見ることによって明らかにする立場であり、手元のないデータや過去の予測、可能性をあらかじめ仮定してデータを収集し、探求していく方法論ではない。むしろ、問題は後づげに発見されるのであり、今あるデータの中から一見、全く異なると考えられる数々の出来事が実は相互に関係しているということを可視化させていくことを目指した。従って当該論文では、たとえば、Kの登園が家庭の事情により遅かったことなどはあったにせよ、その場で起きていない事実を追い求めたり、家庭や保育者が原因でなのではないかというような因果論的説明はさげ、観察の場でおきた具体的出来事を可視化することを目指した。

③ 「中心」への誤解

よく誤解されるのだが、「正統的周辺参加論」では実は「中心」という概念はない。この「中心」という概念はLaveらがもっとも注意しなければならないと警告し

ている箇所でもある。翻訳版(佐伯, 1993)では、full participationは「中心」ではなく、すべて「十全参加」と訳されていることに注目していただきたい。

共同体の複雑な、相互に微妙に異なる特徴を前提にすると、実践共同体における向心的参加の到達点を、一様な、一義的な「中心」とか、直線的に進む技能習得に帰着させないということが重要である。実践共同体では、「周辺」だと指し示せるようなところはないし、もっと強調していうならば、単一の核とか中心があるわけではない。中心的参加(central participation)といってしまうと、共同体の個人の「居場所」に関しての中心(物理的にせよ、政治的にせよ、比喩的にせよ)が一つあることになってしまう。完全参加(complete participation)といってしまうと、何か知識や集約的実践の閉じた領域があって、新参者の「習得」についての測定可能なレベルがあるかのようにになってしまう。そこで私たちは周辺の参加が向かっていくところを、十全的参加(full participation)と呼ぶことにした。十全的参加というのは共同体の成員性の多様に異なる形態に含まれる多様な関係を正当に扱おうと意図したものである。(佐伯訳, pp.11-12)

ここからもわかるように正統的周辺参加論は、徒弟制の学習についての静的なモデルを提供しているのではない。人々が関係性の変容をともしつつ、学習していることを描きだすための視座を提供しているのである。同様に倉持氏が「言葉の問題」として指摘された「新参者」「古参者」といった言葉も、共同体における学習過程に伴うダイナミックな社会的諸関係を示すための概念なのである。それゆえ、当該論文では単語としての辞書的な意味で用いられているのではなく、そこで生じている具体的な出来事の表象として用いている。

「たかが4歳児」と思われるかもしれないが、4歳児の集団においても権力関係が歴然と存在しているし、麻生氏の指摘どおり「幾重にも重なり合って重層的な構造」がそこには存在している。また、観察当時、同じ年齢を集めた集団に徒弟的な新参者、古参者のような社会的関係性はないであろうと予想していた筆者であったが、分析をすすめていくうちに、新参者の子ども(新入園児)と、すでに0歳や1歳からこの保育園に入った子どもの他者への関わり方が違うという発見は大きかった。これらの発見は正統的周辺参加論の視点があったからこそ見えてきたことである。

文献

麻生 武. (2000). 「ちょっと気になる」論文：刑部論文へのコメント. 発達心理学研究, 11, 226-227.

- 刑部育子. (1998). 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析. *発達心理学研究*, *9*, 1-11.
- 倉持清美. (2000). 保育的視点から刑部論文(1998)を読んで. *発達心理学研究*, *11*, 224-226.
- Lave, J., & Wenger, E. (1993). *状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加* (佐伯 胖, 訳). 東京: 産業図書. (Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. New York: Cambridge University Press.)
- 須田 治. (2000). 関係性の変化についての研究が, 発信したものについて. *発達心理学研究*, *11*, 223-224.

2001. 2. 16 受稿, 2001. 5. 25 受理